

川柳塔

平成元年十一月二十五日印刷
平成元年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七五〇号



日川協加盟

No. 750

十一月号

俱会一処の川柳塔 建立募金のご案内

初代川柳二百年忌と麻生路郎二十五回忌の年に当り、このたび絵本山金剛峯寺高野山大霊園に川柳塔社同人同愛好者のための川柳塔と「川柳は人間陶冶の詩である」の路郎語録を刻んだ石標を建立する運びとなりました。墓域は匿名同人の寄贈により確保できましたので、川柳塔と石標の建立ならびに開眼法要等の基金を左記のとおり募集いたします。

「俱会一処」の増城への意義深い趣旨に、同人・誌友諸氏のご賛同と絶大なご支援をお願いいたします。

一、募金目標額 二百萬円

一、一口 五千元（何口でも可）

一、完成 平成元年十一月

☆送金は現金封筒、小為替、振替用紙等で川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へ

〒581 八尾市中田二二三〇二

振替口座 大阪8133336八番

川柳塔社

☆新年号特集☆

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一旬」

■今年中に発表された句に限ります。
■締切 11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は左記のとおりですので、よろしくお願いたします。

★個人 一口 一、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

① 1/4頁 六、〇〇〇円 ③ 3/4頁 一、一、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月25日（必着）

〒581 八尾市中田二二三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社 会計室

文化祭

西尾 栞

十一月三日の文化の日を中心に、大阪市をはじめ各衛星都市の市民文化祭川柳大会が踵を接して開催されることは、洵に喜ばしいことである。何しろ十月から十一月の日曜・祝日をあてこんでいるので、残念なことには、A市とB市との川柳大会が同じ日となることは已むを得ないとしても、之は相互に連絡して円滑に開催したいものである。

次に各川柳大会の選者が昔と違って、A結社、B結社、C結社の若い人たちが顔を並べていることは、まことに喜ばしいことである。之をステップに若手選者

のますますの伸長と各社の豊かな交流親善の発展することは嬉しい極みである。何にしても、若手新人選者に大変、勉強の場となることは必然で、柳界の躍進につながる立派なことで、いよいよの文化祭川柳大会の成功を祈ってやまない。

×××××××××××××××

七月号に書いた随想の「真田祭」が尾をひいて、十月号の「懐しの立川文庫」という題で、筆名望月

六郎なる方から蘊蓄を傾けた随想を寄せて下さって感激している。

ここに改めて篤く感謝申し上げます。

実は先に、紀水川柳会の会長岩倉天彦氏から、真田庵発売の真田

十勇士なる、勇士の姿を書いた日本手拭を送られて、啓示されたことや、小さい時、真田の抜穴で遊んだという人らの、なつかしげなお便りをいただいたことがある。僅かな一文に、こんなにもして下さる親切に感動している。

川柳の専門誌に埒外なことを書いて申し訳ないが、書家の字は書家臭いということもあり、川柳の意外性ということに赦していただきたい。

鬚剃った顔ほめてくれ笑うてくれ
古代瓦をはなれない濡れ落葉
北の島を時々思い出す政府
ヒロシマのドーム拜んで旅終る
無人駅を発って無人駅に帰る



座右の句

浮き草は浮き草なりに花が咲き

(生々庵)

私の句

愛されて脇役でよし福寿草

門谷 たず子

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

文化祭……………	西尾 葉……………	(1)
高野山靈験記……………	西田柳宏子……………	(2)
川柳塔(同人吟)……………	西尾 葉選……………	(4)
自選集……………	東野 大八……………	(30)
■川柳太平記(138) 川柳の群像 小池鯉生……………	東野 大八……………	(34)
■連載 柳籠裏三編研究(一丁)……………	東野 大八……………	(36)
水煙抄……………	黒川紫香選……………	(38)
秀句鑑賞	阿 萬 萬 的……………	(57)
同人吟	奥田みつ子……………	(61)
水煙抄……………	橘高薫風選……………	(58)
愛染帖……………	小出智子選……………	(62)
■女性コーナー 茴香の花……………		

高野山靈験記

西 田 柳宏子

高野山大靈園内に「川柳塔」を建てること
が、トントン拍子に進み、開眼の日時まで十
一月十二日午前十一時三十分からと決まった
のは世話人の一人として嬉しい限りだ。高野
山には靈験あらたかな話は沢山あるが、今回
栗王幹以下四名で打合せに高野山を訪ね、深
い感銘を享けた。

奥の院へ着いて昼食を済ませ、事務所へ行
く前に一同揃って碑を建てる墓地を見に行く。
改めて靈園の環境に心洗われる思いを噛みし
めながら事務所へ行く。副園長は待っていてく
れていたが、所用のためと墓地名儀切替えをす
ませると、あとは事務所の方に話してあるから
打合せしてくれと言葉を残して下山のため
出て行かれた。残された我々も、事務員の女
性と老年の男性と何となく話のつながらぬム
ードであった。

石碑、五輪塔のことと口をかけると、男
の方がボソボソ傍へ来たが、結局、何も聞い
ていないとのこと、結局、この人が石材部主
任と判ったが、頑固そうな石工職人氣質の人
何となく取り付き難い感じで話が進まない。
すでに薫風さんが見積りも聞いており、今日
は彫ってもらおう字を持参した旨伝えて、栗王
幹が書き上げた隸書体の書を見せると、「こん
な字は五輪塔にはむかん。また、こんな大き

「糸」……………	桜井千秀選 …… (64)
一路集「高い」……………	辻 文平選 …… (64)
「灯台」……………	榎本吐来選 …… (65)
初歩教室「地味」……………	辻 白溪子 …… (66)
平成元年度川柳塔社同人総会	…………… (68)
二賞表彰本社十月句会	…………… (72)
各地柳壇(佳句地10選/藤井明朗)	…………… (76)
■吟行 尾浜川柳会(弓削)	児玉歌子 …… (88)
城北川柳会(生野町)	神夏磯典子 …… (89)
柳界展望……………	…………… (90)
■十一月各地句会案内……………	…………… (91)
■編集後記……………	…………… (93)

座右の句

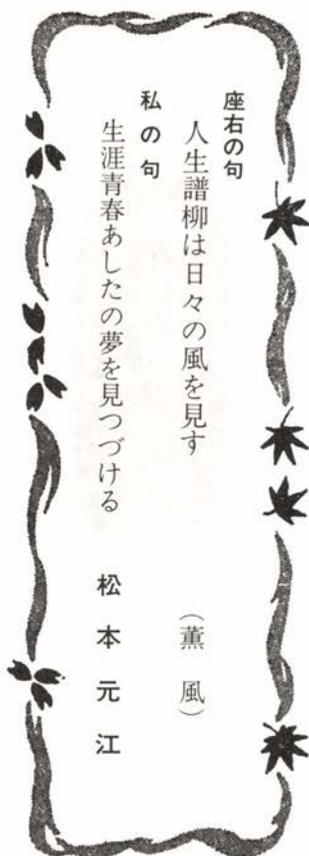
人生譜柳は日々の風を見す

(薫風)

私の句

生涯青春あしたの夢を見つづける

松本元江



な字では彫られん」とのこと、字の縮小もできぬと素気ない返事に少々苛立って、字の縮小はこちらでするから寸法を示してほしいと詰め寄り、何となく白けたムードで互いに顔を見合せていると、折柄いつの間にか外は暗く、沛然と土砂降りの雨、主任も気づまじりからかボツリと喋り出した。

「こんな字、勿体ないナ…。五輪塔でなく碑にしたら立派なものになるが…。丁度すぐ横に歌碑があるから見てみなされ。あれやつたらこの字も生きるで。」とのこと、早速傘を借りて一同揃って歌碑を見る。高さ約二米、幅約八十厘の堂々たる歌碑である。思わず声を揃えて「そら、この方が何ば立派かわからん」と。主任さんも雨になってから、すっかり態度が変わって親切になり、その歌碑を建てた石材工務店へ電話してくれ、早速、若い主人が雨の中を駆けつけてくれた。いろいろ話して、雨の小止みに揃って建立墓地を見に行く。略図、見積り等を九月二十五日までに送ってもらうことで話を終る。

雨は上り、爽かな風に送られ、事務所を出て殊数屋四郎兵衛さんで当日の土産や昼食の打合せも終えて駅まで送ってもらい、再び快晴の中、下山する。本当に晴晴れとした気分です。つくづくともし副園長がずっと居たら、突然に雨で足止めをされなかったら、果して五輪塔が川柳塔碑になっていたらどうか？主任が洩らした言葉が妙にくすぐったく胸にひびいた。「園長さんが決めた(五輪塔)のを勝手に変えて叱られるかな…ハハハ」。

高野山霊験記でした。



西尾 葉選

松原市 玉置重人

平成を生きるバリウム飲んでいる
煩惱も雑念もありおもしろい

ひと言がすなおに言えぬ日の便秘
子供部屋のカベを厚くせぬように

鍵っ子と遊ぶある日の管理室
しあわせごっこコーヒーはアメリカン

倉吉市 奥谷弘朗

中立は無関心よりなお卑劣

生き残るための握手がまだ疼き
シベリヤを捕虜の絆でつなぐ仲

車中では故郷の見える席に座し
窓いっぱい開けて遠慮のない暮し

鬼に成る努力を高く買ってやり

米子市 林 荒介

わたくしの山を崩して陽の昇る

戦列を離れられない備の馬

おとこを整える昼下りのコーヒー

街角を曲り切れない竹の蛇

十字架は確かな形 立つかたち

鍵盤を叩いて欲を突き離す

岡山県 嘉数 兆代賀

欺されることにも馴れた座りだこ

年金のくらしへ秋の空が澄み

頼られる伴せがあり明日へ生き

つまずいた石の言葉を抱いて生き

落日が早くて明日の絵が描けぬ

義理ひとつ果して今日の陽が沈む

豊中市 田中正坊

菊月の誕生色は楓の朱

なにごともなかつたように秋の天

もくせい香にさそわれる秋の章

そして秋 老いは静かに忍び寄る

咲けば散るさだめ知ってる花芙蓉

ぎやまんの洋燈が昏し白秋忌

堺市 河内 月子

嫁さんが怖い怖いとよく遊び

物騒な事件うちにも息子がいます

別々の旅を楽しむ倦怠期

ダンスしたくらいじゃ妬かぬお母ちゃん

姉弟に見られて妻がふてくされ

シャーベットトーンで飾る老夫婦

大阪市 西出 楓 楽

ない袖もときどき振って賢夫人

思春期の風を孕んだ言葉尻

笑い袋繕いいくさまだ続く

台所事情と別に粗食する

会釈するだけの絆を大切に

ブレッシャーあつて背筋がしゃんとする

堺市 高橋 千万子

余命いくばく時間は私の宝もの

夏休み見上げる二人の孫が来る

鈴虫を飼うマンシヨンの十二階

魂のぬけがらと見る夜のビル

ひらいやにもライバルがある夜明け

幸の耳は不幸を聞き流す

倉敷市 小野 克 枝

ゆすつたら迷いさめるか古時計

会という名前つくりのうまい友

借金のような娘がよく笑う

生きて在ることのうれしさ秋の虫

片ちびの靴に妥協を強いられる

荒れている父に小さな掌をのせる

ふり向いた過去のページにある余白

鳳仙花尼僧の素足にある女

どちらが病んでも寒い夫婦箸

まっすぐに生きてる地下足袋干してある

叱られたぬくさが残るのも絆

煩惱の過去にふれてる虫の声

やがて消える花のいのちの絵ろうそく

缶ビール環状線の旅をする

木の枝にかかる長さの縄をもち

金で済む話の金が何処にある

その後が気になる下着試着室

あの世から母が戻った忘れ傘

三十年前の話をして笑う

好きなこととして朝の扇風機

パチンコ屋で歌詩を覚えることはない

みんなまだ寝ている美味い珈琲だ

川がある私の小さい頃がある

てっぺんで力を貰ってから下りる

竹原市 小島 蘭 幸

松原市 谷垣史好

錦秋の野をチンチンと行く電車
草鞋づくりの土間から冬が忍び寄る

その辺のことは男に分らない
虐待を喜んでゐる縫いぐるみ

お小金魚お前も酸素足りないか
ご期待に応えられないポンコツ車

米子市 林 瑞枝

ドレミファが秋の封筒から零れ

鈴鳴らしちよいと気ままな夢売り屋

図書館で明治の美文読んでゐる

優しさの漂う塀に寓とある

命日の母へ蛇の目が会いに行く

手洗いの花にも流すシューベルト

豊中市 安藤 寿美子

夕焼はいつでももかなし金色でも

受付で習字に行こうと又おもつ

同じ年夫婦で元氣競争し

泣きながらうとうと寝るのを老女という

遍歴の女の顔も名も忘れ

締切の日が敬老の日にあたる

熊本市 永田 俊子

照る日曇る日だけならお幸せ

ひたすらになびくこと覚えた芒

天動説でもいいじゃないの夕日が沈む

ぎんぎんぎらぎら沈む夕日を誰も見ない

同行二人リモコンとうに捨ててます

安全地帯が好きで芽が出ない

寝屋川市 江口 度

台風一過ふとんをうんと高く干す

戸を開けた方があわてるキスシーン

港神戸着く頃バナナ熟れてくる

柿熟れて落ちて少年らは塾に

街のネオンをじつとみつめてゐる案山子

子の居ないところで息子を賞めておく
松江市 舟木 与根一

漬物を買ってグルメの旅終る

嫁の身丈計りきれない鯨尺

農業も見通し暗い土踏まず

路地の風経済成長から外れ

裏窓を眺め良くして隠居する

合鍵だけが夫婦という暮し

島根県 堀江 芳子

とうさんと白いごはんに飽きぬ幸

敬老のうたコトコトと小豆煮る

たかが血圧されど血圧負け戦さ

子のように子に叱られて漫画だな

故里の恋しさうたう祭り笛

盃は今も昔も溢れさす

京都市 松川 杜的

喜びも悲しみも男の黒い靴

下手下手と結構いい字書いてゐる

男女同権妻とおんなじ目方です

信号待ち丁度よかったプロポーズ

絵日記へこまごま朝顔一代記

九官鳥も喋れないラリルレロ

西条市 片上明水

ひとに道譲ってみちの広いこと

噴水の方を指差す乳母車

真実の声忠魂碑の前で出る

近道にちかみちがある通勤路

遺言の文字を夫婦で尋ね合い

手土産が気になりだした帰り道

寢屋川市 稲葉冬葉

鈴虫と午前三時の詩ごころ

父権が落ちて玉露の味を知る

これ以上背丈はいらぬ蜆取り

毒舌とながが良いので不幸せ

高飛車に出ると子供は寄ってこず

外面をそれぞれ持っていた夫婦

唐津市 筒井朴竜

妻の交通事故

闇が仇非情のロープ蹴躓く

粗忽とは言えぬ刹那や不慮の事故

抱き上ぐ妻は無惨に脳挫傷

母危篤むすこ三人飛んで来る

息子らが見守る母よ頑張れや

点滴で繋ぐ生命の時差を埋め

和歌山県 寺田裕美

夫婦とも頭に馬鹿がついている

繕いの中に女の知恵がある

サンダルが波打ち際で秋になる

花博のニュースへ炎える彼岸花

仕返しの出來ぬストレス溜めている

解説を見返してやるホームラン

松江市 恒松町紅

古いもの毀す世相へ目をつむる

ワープロの指では書けぬ王羲之碑

育て方ばかりを責める花時計

子育ての終わりは嫁とする別居

逆転の引き金だった消費税

大阪市 江城修史

川村好郎師を偲ぶ(一句)

コーヒーの香り届けよ雲の峰

コスモスが咲いて亡母の忌が巡る

ちぎれ雲流れの旅の巡り逢い

腎不全粗大ゴミにはなるまいぞ

ふり向けばよくぞここまで来た命

奈良市 宮口笛生

無花果が熟れて八月十五日

二人では食べきれないが西瓜割る

噴水が止って行基菩薩行つ

野仏のそこから道が細くなる

高山は古い町並五平餅(高山にて)

名古屋市 越村 枯梢
蛸焼きの名で出ています烏賊の足

銀行と女将は私を様づけで
コーヒーの嫌いな女で味気ない

食べて寝る二つの芸の年齢となり
四の五のと言つてる内は脈があり

宇部市 平田 実男
定年をひかえ月日のたつ早さ

おみくじの嘘待ち人が来てくれず
おたかさんもいいなと思うヤジロペー

永田町金にも女性にも乱れ
日本の目印富士がきれい過ぎ

倉敷市 稲田 豊作
派手を着て余計に齢が見え隠れ

くだらない奴に貞女が窺れ果て
貧乏が早く馴れろと夫が言う

貧乏が性に合うのか太る嫁
酒が出たもう逃げられぬ逃げられぬ

堺市 中川 滋雀
奥の院なにかがおわします静寂

逆らえば昨日と同じ風が吹く
回り道それでも励みもつ歩巾

三の矢も用意してある消費税
ごまかしのまだ効く孫がいてくれる

下関市 石川 侃流洞
趣味三味玉手箱には用がない

人蓄無害そんな政治家支持しない
蟹の泡愚痴の話が多すぎる

大根ならスパッと斬って見せてやる
春の芽を確かめ譲り葉地に還る

美祿市 安平次 弘道
方舟にはあらず難民船が着く
万歩計まだまだ欲は捨てられず

正論が勝つと限らぬ時 所
日々好日金の話は止し給え

バツカスではないぞと胃カメラが叱る
伊丹市 樫谷 寿馬

昔女性は大太陽だった 今も
社会党党首の紅が濃くなり

大臣の妻初耳のスキヤンダル
噛みしめる友のなさけのしょう油豆

半生を一冊にして懺悔せん
笠岡市 松本 忠三

手も足も出ない尻尾を出している
わたくしは地獄女房は極楽か

じいちゃんの冷水であり生ぬるい
自由とはこうも都合がいいものか

冥想に耽りそのまま眠つてる
八尾市 宮西 弥生

秋夜長すこしテンポをずらそうか
年の差なんか言うまい法善寺

生玉子三日つづきのグラフ表

何ひとつ残せぬ城にマリア像
上役の机に並ぶ旅土産

大阪市 本間 満津子

うちの仏さんバチあてたりしはれへん

枝葉に花が咲いて終りのない話

裏話聴けば頷くことばかり

占いを信じる人とは争わぬ

湯豆腐にしようか今日の爽やかさ

大阪市 津守 柳 伸

台風へおんな独りの身ごしらえ

コオロギが鳴いて宿題急ピッチ

信じきるお方がいます無為無策

差別なき俱会一処の夢枕

天国の句座は高野に極まれり

兵庫県 辻 文 平

青竹を踏む檜山へ登る足

イヤリング大きく未練ゆれている

水鏡やっぱり負けた顔を見る

二円分愛のころを足す便り

思い出をグラスに溶いてゆく孤独

和歌山市 若 宮 武 雄

台風が外れて浮かれる凡夫です

明月へ歩こう夜露に濡れるまで

偽りはよそう真澄の空の下

威張らねば仁王の役は勤まらぬ

その山を山ふところで見失い

和歌山市 堀 端 三 男
長命だと言う自己暗示かけている

初恋の女老人会の偉いさん

振りあげた拳やさしい瞳に負ける

玄関へ出てのちよつとは油断せず

知恵の輪が解けたら別れねばならぬ

和歌山市 福 本 英 子

ペンキ塗りたて公園は秋日和

あと幾日一枚買った宝くじ

ドライブを誘う社長の面脱いで

アバアバと隣の孫に遊ばれる

束の間のやすらぎ雨が降ってきた

和歌山市 西 山 幸

誘拐犯の話甘栗剥きながら

こおろぎが鳴くので旅に出たくなる

たとう紙の中にいつかの秋が棲む

台風が去って怠惰な日に戻る

如才なく生きて知恵の輪もてあそぶ

和歌山市 松 原 寿 子

檸檬ころころ貴方のうわさ消すように

遮断機のむこう見守る人がいる

朱のアーチくぐってまぎれな逢瀬

いつまでも愛は純白かぜは秋

手のうちに魚座の運命うずくまり

今治市 越 智 一 水

親切が過ぎて勇気がいるを知り

台風一過孝行者へ山は晴れ
美しき恐さを秘めて山黙し
いらっしやいませと黒四虹が立ち

永平寺

真とはこれぞと老杉 天を突き

柳井市 弘 津 柳 慶

ママごとのパパ エチケツト注意され

受話器を置いて未練まだ残し

課長のカラオケお世辞のアンコール

念仏を唱えて妻に済まぬ事

動悸の乱れ恋人に見透され

松原市 佐 藤 藤 子

麻生路郎の句碑にあずけてきた心

生き延びた王様だろう山椒魚

病んでから私のそばにいてくれる

吾亦紅君はバラ科であったのか

あれ以来ひとりぼっちの珈琲館

京都市 都 倉 求 芽

虫の音に溺れそうなり無人駅

神さまも鯉も手をたたくまで知らぬ顔

風船に噂話をくくりつけ

辞書引いたしりから書けぬボールペン

ゴシップはもう免疫の2カラット

高槻市 辻 白 溪 子

なにげなく手を貸しておく車椅子

舞台効果 風は激しい音になる
作戦タイム取っても流れ変えられず
欠点がないから仲間避けたがる
おひらきの膳に残っていたメロン

今治市 矢 野 佳 雲

男には女観音様に見え

聞いているのですかと妻に叱られる

拳式まで期待持たせて只の人

口下手を買って金庫の番に据え

我慢出来ず抜いた刀が錆びていた

尼崎市 春 城 武庫坊

夏痩せが戻ると酒が美味くなる

お互いに隙見せあつて今日送る

西日ちかちか明日がわからぬ癌病棟

秋風のどこかに亡父の祭笛

青年の孤独が鬼に変化する

尼崎市 春 城 年 代

節々が痛むと思ひあたる亡母

薬づけでどこまでこわい橋渡る

お遊戯といふことばさえ通じない

一日置いて疲れ出てくる萩すすき

玉葱を刻む女の悲観論

米子市 小 西 雄 々

マナーにも自信をもってフルコース

登るより下山の心配する与作

マスコミに刃向う火薬しめりがち

本音かもしれぬ海鳴り聞いて寝る
約束へ熟柿が一つ落ちてきた

米子市 菅井 とも子

この家で生れたそんな見て帰る
子に夢をかけて故郷の家を売り
停車場で送った父は振りむかず
鈴なりの柿持てあましているのは大人
翔んだから少し遠くも見えて来た

米子市 野坂 なみ

研修会一つの世界へ融けてゆく
深海の魚はきつと透けている

オール電化 手足遊ばせないように
顔ぶれが揃うと湧いてくるファイト
町内の人とばったり八重洲口

米子市 青戸 田鶴

言い過ぎたあととはご馳走する破目に
遊ぶ事下手な大人を笑えない
慌ててるちらり尻尾が見えている

孫はもう私の彩に染まらない
秋風におしゃべり続く曼珠沙華

米子市 田中 亜弥

六十を生きて遠慮のないくらし
まつわる児があつて母の席あたたかい
家族六名笑い袋を皆がもつ
平均寿命男が少し負けてやり
恋人をさそうに丁度よい岬

父を誘って牛を誘って萩の道
水がさわいで流れを急にかえさせる
どっちみち裸になってから勝負
知れたものだよハミングが飛ぶ範囲
母屋の傷をかばって桐の木は伸びる

米子市 政岡 日枝子

思い出の箱におさめた夏景色
輪の外で噂ばなしが風化する
鈴虫の前世はきつと善人だ
江戸切り子の青に合わせる茶托選る
生家との絆へ残す傷ぐすり

米子市 寺沢 みど里

夕やけに亡父と歌った「靴がなる」
一人旅かわらとんぼが裾を舞う
住みついた猫があるじの顔をする
ブランコとゆっくりゆれる昼の月
先頭で力の限り太鼓打つ

米子市 澤田 千春

お粥炊くゆきひらの良き妻のよき
花の名を忘れては聞く繰りかえし
てのひらに栗転がして記憶呼ぶ
合掌のときだけ忘れてる闇路
窓鳴らす風の言葉は亡母の声

島根県 堀江 正朗

真直ぐに帰る父ちゃん誕生日

島根県 西村 早苗

冬がそこに残る手紙焼く
聞きあきた言葉二度とはいいたしません

ものたらぬ夜寝返りを打つ枕
ふくよかなひとの耳たぶほめながら

島根県 錦織文子

妥協癖ばかりになるのに馴れました

亡母の地図私の地図も残さねば

同じこと又聞いていた日の疲れ

一人ぼっちにならないうちの旅プラン

一日の感謝欠かさぬ夜の仏間

鳥取県 川崎秋女

さわやかな目礼でした初秋の女

ありがとう言えるお婆さんになろう

ある出会いそれから狂う花時計

子定日が近づく軽い眩暈など

序列から外されていた古狸

鳥取県 松下たつみ

ぬいだ靴そろえる常識だけはあり

世辞うまい鏡と会って街へ出る

相槌を気軽に打った人の顔

健康が秋のジーパンはきたがり

それなりの幸あり過疎は俺のもの

鳥取県 新家完司

中年の水着を嗤うことなかれ

旅に出たくて港まで散歩する

嘘をつく人に出逢って夏おわる

目立たない人よせ書きも隅っこに
笑わない女ひとりに気をつかう

鳥取県 江原とみお

楽しい顔すこし誇張をして描こう

ライバルの肺活量は知っている

絵葉書の湖にはアオコ浮いてない

遠慮ぶかい男がひいた貧乏くじ

古備前の壺ひやかな貌でいる

大和高田市 岸本豊平次

孫が来て川の字に寝る夏休み

早起きは三文の得茄子の露

お茶持つて出る頃あいも年の功

山道で休む石には温みあり

地藏盆菓座が聞いている老いの愚痴

西宮市 門谷たず子

両の手を伸ばせば足る夫の距離

望遠レンズで見ればどの子もよい家庭

冷戦のほとぼりさます珈琲館

残る旅路を各停でよい縄電車

性善説老眼鏡を拭きなます

高石市 浅野房子

修羅の場をくぐりトンボに羽根がない

キャンプファイア若いリズムに乗ってみる

村興し捨て石になる覚悟する

その事にふれずコーヒーすすめられ

期待などしない独りのティータイム

大阪市 大塚節子

掛声と団扇のあがる菊大輪
夕涼みの団扇に道を教えられ
口もとをかばってくれる京扇子
禁煙してついでい吞を買った父
先生と呼ばれて寄付の筆頭

寝屋川市 岸野 あやめ

農を継ぐ決意が鈍る嫁不足
政界のプリンス老眼鏡を拭き
心ない噂をそらす一つ紋
仲直りさせて気の済むお節介
輪廻とか蟬のむくろは蟻の巢に

唐津市 田口虹汀

暑いのによく耐えて来た鬼瓦
見えぬ瞳に虫が知らせる秋の声
住む所もなく蒼氓船で来る
音無しの構え無気味な妻の留守
鶴は姫の出番を待っている

唐津市 久保正敏

突発事故あつてはならぬ鍋の中
それからは3という字が呪わしい
価値観の違いを埋める札の束
心だけ貰ってどうなるものでなし
美しい距離に異性の友が居る

唐津市 仁部四郎

いつの世も飽食なぜか罪とされ

臆病でないが不倫は罪である
結果論出て賛成に手をあげる
常識の変化に気付く結果論
気付薬ですと妻からコップ酒

唐津市 浜本義美

地の底で戦を呪う亡兄弟
闘病に疲れ味覚の秋を瘦せ
句読点忘れ文章狂い出し
お陽様を拝みたくなる足の裏
古伊万里に酌がれて旨し秋の酒

大阪市 神夏磯典子

健康法自然の風にまかせます
あの人もあの人も逝き川流る
医学書を読んで疑い深くなり
滝の水何故か神々しく映る
行き詰った時は郷里の山を描く

呉市 横田英詩

肩の凝る話はない母と娘は
母と子がお洒落比べをして平和
大吉のみくじぐらいで弾むなよ
コーヒーに誘われビール呑んでます
横顔に芝居をさせる好きだから

大阪市 河井庸佑

石橋を叩いて思案まだつかず
方便と苦しい嘘をついてくる
なまじっか知ってるだけに危なかり

転職で企業の厳しさと知ら
どろどろの嫌な社会を見てしまふ

仙台市 川村映輝

男女同権女も鎧着たいらし
空想で政治できないことを知る

巢立たせて後は二人でくらし
お墓には親子一緒に入りたし

忘れること無視して今日も読書する

松山市 谷 信夫

ひよつとしたらまだ三年は生きるかも
下手でよし上手で書かぬよりはよし

さびしいとはいわぬさびしさ天井見る
動けないから落ち着いているので

まだ生きていていいのでしょいか仏さま

西宮市 西口 いわゑ

仮の世の旅で喧嘩など致し
しあわせな一日だった紅一点

あの時も揺れていたのは秋ざくら
一円貨この頃もろにもの申す

もののはずみで男を殺すイヤリング

喜びではちきれそうな花の種

彼岸花わたしの化身だと思ふ
寺の鐘不安打ち消すように鳴る

公園のブランコ未練なく揺れる

煩惱や自分の影に引つ張られ

尼崎市 奥山 美智子

お多福を小さく飾り旨い店

パチンコも必勝法を読んでから

玄関を開けるとカレーだと判る
初恋は図書館に葛青い窓

欲張った願いは持たぬ流れ星

九月まだ熱き思いはそのままに

秋実るやがて心も満ちてくる

時過ぎて罪が私の手に残る
止まり木を信じて今日も帰路につく

月明りの下で小さな嘘をつく

夜に鳴く蟬よ亡父を捜してくれないか

死のような睡りが欲しい海を視る

雨に流され風に流され書く手紙
種明しも出来ない雨の日の詩集

旅に出ようよ瞳が霧に濡れるから

解けるまでの長いながい一秒だ
自信たっぷりスクランブルエッグ

ドレス丈にこだわる秋の入口で
饒舌な指だと思ふコンバクト

影絵のような遠いことを想い出す

一度だけぎやふんと言わせた貴方

西宮市 奥田 みつ子

和歌山市 牛尾 緑良

和歌山市 神平 狂虎

和歌山市 後藤 正子

和歌山市 桜井 千秀

和歌山市

和歌山市

和歌山市

和歌山市

和歌山市

和歌山市

和歌山市

和歌山市

和歌山市

あやふやなままで跨いだ水たまり
筋一本通して遠くなる灯り

花道で長い台詞は似合わない
枯れ葉にも散り際がありそれぞれに

和歌山市 福井桂香

人肌の爛恋しかり虫すだく

愛は今あつく瞬間接着剤

懐の加減で選ぶAコース

なおのこと雨が降るので出かけよう

落し蓋したから味方こぼれない

和歌山市 木本朱夏

淋しくはないわと猫を抱きながら

淋しさに軽いおとこの舟に乗る

おもいきり貢げば鱗おちるかな

ゆるやかに愛溶けてゆくわかれかな

仮縫いのままで終った恋いくつ

大阪市 北勝美

居直って生きる欲あり喜寿の秋

金婚も過ぎてみとせをさりげなく

職業に貴賤ないとは成功者

彼岸来てお寺さんから案内状

み仏の慈悲が裏目の一人旅

岡山県 小林妻子

お自慢の孫が並んだ宵祭り

お迎えの旅も忘れてなぞいない

舌を抜く鬼へ菓子箱忘れない

絆とは神のみが知る計りごと
長雨よどこまで稲をいためる気

岡山市 川端柳子

おいくらでもいいが一番困るなり

天眼鏡あなたの夢を捉えます

鍵束の自信に満ちてちがう貌

指の形くらいは似てる叔母と言う

許し合う仲でも禁句脈を打ち

奈良県 田中紀美代

おませでもないのに早い更年期

犬小屋に優曇華夫は寝てばかり

イソップの話届けにキリギリス

海外へ出ると夫婦で手をつなぐ

盾とはこ持ち替え私を取り戻す

竹原市 森井菁居

セールスに明日無し今の今を生く

プライドを持つてる僕の棒グラフ

花の名に通じセールス板につく

足跡をしかと残して黄昏れぬ

栗のいがからこぼれ落つ秋の詩よ

大阪市 黒田真砂

亡母に似し後ろ姿や柿若葉

かたむいて押し流されて夫婦船

報われぬ想いを抱いたまま老いる

一徹なとこ亡父に似た座りだこ

明日へ続く日記の余白愛ひそむ

奈良市 天正千梢

箸一本添えて甘酒出してくれ
よくれた金でさままにあやつら
れ

国営のすべて赤字という経済で

世紀末動脈硬化で動揺し

繁栄のむこうに感じとる不安

高知県 赤川菊野

自分史へピリオド打ちたいそんな日も

電卓は性に合わない帆前掛

釘一つ打てぬ男と五十年

寡婦として甘え許さぬ向い風

ゴマスリが来てから会が乱れ出し

鳥取県 土橋螢

さっぱりとふられてみようホトトギス

日本より広い日本海がある

確実に楷書で読める字を書こう

天が下ちぎれた雲が迷いだす

星の夜を別る人も待つ人も

高槻市 河瀬芳子

その際の科白をずっと考える

ラーメン鉢に軽いおとこが浮いている

十年前の水玉の服出してみる

夏雲のただけだけしさよ遠い日よ

難民満載やがては沈む日本丸

富山市 舟渡杏花

隙のない妻のすき間を縫うスリル

より戻る予感がすこしおでん鍋

律気な夫約束通り先に逝く

木の葉の小判木の葉に戻る負けいくさ

脱ぐ時にもチャンスがあつてそれつ切り

八尾市 宮崎シマ子

大都会の一人と思ふ御堂筋

素晴らしい笑顔も男の実力か

勝手つんば嬉しい事は知ってます

台風一過ご無事でしたかお日様も

台風一過原始の色の西の空

松原市 小池しげお

愛想のない捨て犬も混じつてる

香奠の利子も使うて三回忌

国訛りかんにん袋の緒が切れる

断り方がまるきり妻と違っている

今日の俺が小さくなってゆく手酌

羽曳野市 榎本吐来

馬鹿になる道を訪ねている歩幅

利口馬鹿川柳馬鹿を追う眉毛

怒り肩まだまだ馬鹿になり切れず

馬鹿という視野から世間見えてくる

酒汲んで是非の舌軽くする

岡山市 井上柳五郎

戦友会召集たより喜々と祖父

死より生敗戦日からきょうに生き

七十の血を容赦なく抜く検査

身ぎれいを老妻くどくまたも言う
ホットニュース妻持ち帰る美谷院

羽曳野市 吉川寿美

思ひ出を静かに畳む忘れ傘
いちご皿表も裏もない話

腑甲斐ない男と渡る丸木橋

鉛筆の芯尖らせている鬨志

母が逝く悔いと泪を置いて逝く

寝屋川市 平松かすみ

宮様へ素直に拍手差し上げる

健康器買って安心しています

コーヒーが安定剤と言う男

手を引いて上げると早い白い杖

父さんの気力に負けているスルメ

堺市 柿花紀美女

雨の日は雨のリズムで古い二人

お年ですと胃薬だけを医者がくれ

どこまでも夫と同じ波の上

表札の墨色父と共に褪せ

雲流れ待ち人もなし十三夜

出雲市 吉岡きみえ

しんみりと秋のお酒が身にしみる

お月さんと仲良くできる風を入れ

乱れ咲く萩に体調査まれる

偽善者の花は赤が濃すぎる

生きている限り仕方ないこともある

装うてものどの辺りが化け残り

赤ポストお前も抱いて欲しかろう

秋を吸うて頭の中を入れ替える

座長一任ちゃんと根回し出来ていた

ちぎれ雲亡母との縁うすかりき

かろうじて和の中に居る飯茶碗

句削りに追われ大根蒔きおくれ

遠慮の裏で本音が物言いたがる

悔しくて五回目のトイレ朝になる

気ままに生きて終着駅の無為無策

柿の種埋めておこうとうちの蟹

カステラもポテトチップも食べる鯉

均等法未婚の母が胸を張る

平成の恋プリンスとシンデレラ

恐れ知らぬ若者たちに嫉妬する

いざと言う時の鞆を見せられる

賛否両論いろいろとありまつり事

二三步遅れ歩く癖あり自己主張

人を愛して付いた傷なり温める

遊びから本気になった雨の音

祭り好きやっぱりじつとしておれず

岸和田市

原 さよ子

広島市 藤解静風

倉吉市 淡路ゆり子

大阪市 板東倫子

和歌山市 田中輝子

虫干しへ嫁に着物を予約され

息子交通事故

事故電話体が震え聞き取れず

事故以来ピポの音に怯えてる

病人が素直になれば又案じ

島根県 小砂白汀

真直ぐに歩いたつもり蟹の足

朝霧を捕えすぎたり蜘蛛の網

目を閉じて芙蓉は明日を信じたし

献金で女を買った家買った

松江市 柳楽鶴丸

好きだから意地悪も喧嘩もしています

妻が横にいるからよくねむれ

還暦や妻に内緒のママシ酒

夫唱婦随 婦唱夫随 馬鹿と阿呆

東大阪市 森下愛論

自惚れが真直ぐに私を歩かせる

ピザパイに世代のずれを身に感じ

御堂筋銀杏パラパラ冬に入る

満月に鳴いてる虫も恋の唄

米子市 石垣花子

風車座り込んででは回らない

子の泥はかぶる覚悟をしてたはず

助手席で妻屈託の無い寝息

ピンチ救う椅子を若手に貸してみる

岸和田市 福浦勝晴

橋のない川の向うで黄昏れる

アドリブの猛者で上手に嘘を吐く

新聞はいっちゃん先に訃報読む

帰路いそぐピエロに星が降りかかる

大阪市 藤田頂留子

末っ子でゼロの事から知りたがり

やっかみをなだめてしゃべるきれいな言

公園に居ると安心する家族

彼岸までノルマがあるという暑さ

大田市 藤田軒太楼

期待して居るから愛の鞭振う

こぼれ種やがて天地の愛を知り

新婚の二人に故郷近くなり

恋知った息子ズボンを寝押しする

鳥取市 両川洋々

難民へ日本は虹の国に見え

ネオンの灯へ女ざかりを売りに行く

冥土への予定キャンセルして飲むか

おんな一匹だまし上手な風に逢う

大阪市 吐田公一

丹精の鉢に親父の顔がある

嫁ぐ日が近い娘がやさし過ぎ

近すぎて会わず終いの偲び草

善人がぐぐれば温い仁王門

和歌山市 内芝登志代

七転び支える家族の笑い声

千差万別神の恵みの彩で咲く
キャンセルの切符が分けた幸不幸
傍に居てあなたの心解らない

町田市 竹内紫 靖

講師におじぎを返す前列
ワープロに慣れ別の肩が凝り
襟垢が濃いパソコン実習
齢です針から逃げる血管

高槻市 川島 諷云児

職退いてノーネクタイの朝の風
父の鞞踏まない靴に履き替える
おかめでも良いのあんたが好きやねん
達者かと癖のある字が聞いてくる

守口市 羽原 静歩

バスで来てバスで帰って七五三
遍歴の旅の果てなる山頭火
柏手を打つ真昼の逆光線
ライターは嫌いマツチのアマノジャク

貝塚市 行天 千代

友も八十腰痛の針ききますか
老いて今死後の世界の地図を書く
就職がきまり孫急に大人びて
敬老会老いの九月は忙しい

寝屋川市 柴田 英千子

石の上にも三年上司入れかわり
キッチンへ二更の花の香が忍び

立派だと思いが過ぎる自画自賛
菊日より老母の腰痛治らない

大阪市 西森 花村

連休の前に家賃を集めに来
街路樹よ町会費など気にしてず
鏡見ておれの死顔見たくなし
神主もやっぱりこわいガンの神

静岡市 渥美 弧秀

それぞれの趣味に生きてる凡夫婦
古希過ぎて婦唱夫随にやつとなり
詩と酒暮しの中にあるリズム
少しずつ季節の動く散歩道

神戸市 山口 美穂

補聴器が悪い噂をきいてくる
死を忘れ業病と仲良くして暮す
降りつづく雨どう思う池の鯉
明日から明日あらと思うダイエツト

玉野市 小谷 仙山

十年の苦節電池を入れ替える
せんべいかそうかと入歯横を向く
二つ三つ苦手があつて只の人
五里霧中何時まで走る駄馬の群

姫路市 人見 翠記

棲み付いた執念にある憎悪
お迎えは「則天去私」になった頃
向上の極は自我を捨てた時

名作に心奪われ夜が白む

箕面市 坪田紅葉

方言で話し合う仲午後の雨

藍浴衣団扇を持っておどりの輪

夏づかれながびき今日も診察券

行先はわからないけど青い空

宝塚市 丸山よし津

脇役に徹し重宝 霞草

二次会で本音ぼろりぼろり出る

子供乗せ競争出来ぬ木馬たち

騒音に耐えねば今は生きられぬ

出雲市 板垣夢酔

聴診器少し温めてくれる医師

日本語が話せぬ宅急便のふぐ

悔った妻から離婚切り出され

ガミガミが過ぎて夫が帰らない

出雲市 園山多賀子

吃水線口約束が重過ぎる

脛に傷男に寡黙な風が吹く

風は晩秋一円玉がこぼす愚痴

目立つとこ庭掃く息子と同居する

出雲市 石倉芙佐子

優しさが折り重なって萩の花

茫茫と行方も知れず花芒

そう言えばどれも寂しい秋を咲く

花よりも絵になる人と道連れに

唐津市 浜本ちよ

六十路過ぎ試行錯誤の枠の中

割り算と引き算ばかりの枠の中

幾何学はとてどもくもには適わない

好きだから意地悪をして意志表示

唐津市 山口高明

自家用で豆腐一丁買いに来る

白い杖小石ひとつを避けてゆく

難聴の老女聞こえる亡夫の声

太陽の明るさ持った家の嫁

倉吉市 渡辺苦句

オーバーなヨイシヨに背が寒くなる

未来都市描いている子に兜脱ぐ

癌という何ともにくらしい字面

笑いながら言うと思われず

八尾市 山下美津留

花博に空港に親方忙しい

浪人をしてチンジャラパチンコの通になる

ザアマスが半額品をチラと見る

出番です女性パワーが続々と

河内長野市 井上喜酔

狸寝が上手に人の噂聞く

葬式のとんぼ返りでくたびれる

いか程と聞かれ返事に一呼吸

若者の話が走る大ジョッキ

東大阪市 崎山美子

言わぬのに解つてくれる妻がいる
指きりをしながら腹でまだ迷い

還暦と思えぬ毬がよくはずみ

田舎には母の大きな鍋がある

米子市 川上より子

端居する法要の日の借り眼鏡

兄嫁の愚はむずかしい役どころ

ひと様のお子達ほめて夏を閉す

薬草が美事乾いて仲直り
米子市 小村てい子

鏡拭く時は気持の軽いあざ

いわし雲なにも魂胆ないようだ

影を比べて月の雫に濡れて佇つ

念仏が聞えて消えた彼岸花

島根県 松本文子

守つて下さい玄関におく亡夫の靴

全国にやあと握手の友ができ

恋人でもいとじいちゃん言いはった

新しい朝だ立腹せぬように

島根県 藤原鈴江

ひとときの愛も懐かし秋ざくら

身の上を忘れうっとり秋の月

髪型も服も男で女です

やるせなく日課になつた医者通い

島根県 松本はるみ

CMの泡へ禁酒を延期する

片言に思わず冷汗かかされる

やさしさを愛だと誤解してしまふ

ふる里で余生をおくる青写真

七尾市 松高秀峰

寄付金の不足會長切る自腹

数字には弱いが年金貯めている

何事も少し不足で丸くゆき

売れっ子になって初心を忘れかけ

福岡県 横地正好

爪に火を点すと友に逃げられる

ベル押せばドアーチェーンの冷えた声

城下町生れは心に城を持ち

我儘を鞭打つ学校に記者が来る

岸和田市 清野こう

転院の此処にも親しい友が出来

傷ついた心にぬくい港の灯

古稀などと老いてはおれぬ鉄をふる

娘と歩くパパに誇りとはにかみと
岸和田市 古野ひで

風だけが秋の匂いの残暑です

愚図だって取柄あります算数5

全開で待つてくれている母の窓

濡れ落葉そんな夫と手をつなぎ

倉吉市 野中御前

手を握ることなどもなく秋ざくら
亡母からの便りはこないもうこない
多数決こんな誤算があつたとは

八尾市 鷺見章

ラブシーン口説き上手はフランス語
コスモスに外野が守る草野球
手伝いの妻へも通夜のビール券
秋桜母の墓標は風ばかり

富田林市 片岡智恵子

嘘も方便しつかり汗をかいてる
石橋を叩いて渡らぬ人もいる
水と光と風へ茶室の小宇宙
一筋の道を信じた突きあたり

富田林市 松本今日子

打明ける呼吸計って居るうちわ
懸命にあおいで居るのはすしの飯
三分の祝辞毒舌封じ込め
我が家にも派閥があつて米をとぐ

有田市 松井かなめ

節度ある正論なのに人気ない
飽食の国乞食の暮してみたい
たらい舟吾作の気分ひたつてる
半眼の不動誠意ない信者見分けてる

奈良県 長谷川春蘭

立秋の絵皿に溶かす空の色

片蔭を帰りの傘を杖として
思ひ出さぬままの会釈で夏帽子
庭暮れる妻に夕餉を二度呼ばれ

大阪府 坂口公子

満月が一寸だけよの雲わたり
選挙事務所で一キロ余り肥えてくる
与うるは倅せなりと言うけれど
購う物がほんにないとは佗しいね

大阪府 井上白峰

輪の中をみんな味方と見た油断
謝れば済むのに無駄な口答え
正直へ貧乏神がついて来る
気楽なと思うベンチで愚痴を聞く

姫路市 中塚遊峰

神の手が欲しくて豆の木を探す
鎌の柄に亡母が残した汗の艶
美容師は鏡の客へ言葉かけ
おとなしい友は机上の辞書二冊

豊中市 一瀬福一

天の川だけは汚染度今はゼロ
よく回る口で周囲を凍らせる
東大出というそれだけの釣書
明治より昭和に生きてなお夜なべ

守口市 森川まさお

渡りかける吊橋空が広くなり

保護色の虫を描きにくそうにする

冷然と床屋の鏡が顔うつす

見覚えの車に女が乗っている

富田林市 新開 千代女

頭が下がる舗道修理の人の汗

仲直りそつと好物置いてある

何見てもいい気分なり株上る

分別があるから垣は越えられぬ

境港市 細木 歳栄

愛の日々ああ長編の一コマよ

愛してゐるなどと子持ちよふざけるな

盆が来た亡夫あれから年とらず

来世ではピンクの花など咲かそうよ

羽曳野市 田中 隆二

少しだけ話してあげるいい話

お話はそれだけですか山椒の実

目玉焼妻は当分帰らない

あの日から情事の続く昼下り

大阪市 渡部 さと美

迷わずにお産みなさいよ三人目

赤ちゃんのどこもおむつを干してない

美味しいはず今度のお米雪美人

やかましいだんじり祭りが性に合う

藤井寺市 福元 みのる

眠れない人に向いてる哲学書

トイレではみな考える人になる

肩パットいらぬ私のは自前

俺の若い頃と言ひ出すボケはじめ

鳥取県 さえき やえ

恩師を見舞う(3句)

竹ふみも効かなんだよと師の涙

切れかけた命手足をさする秋

筆談をするかなしきよ秋の雨

子の継がぬ畑かも知れぬ土肥やす

竹原市 岩本 笑子

栗活けて昔話をしてしまふ

幸福なことにへソクリ少しある

通帳の残が少しずつ増える

木もれ陽よ二人の時を大切に

守口市 結城 君子

雷がやんでも昼寝起きてこず

雨台風木津川近き息子の住い

荔枝咲く家の門扉はしめたまま

共通の敵と知って腹を割る

岡山県 千原理 瑛

性善説信じきつてる神だのみ

正体をあばけば過去が尻尾出す

身の回りちらほら赤がある六十路

単細胞同士の友といて楽し

あどけない恋 宮様は鮫好き

茨木市 井上 森 生

出る港帰る港は妻の役

瀬戸内の蟹はガザミの旅の味

川舟の浮かぶ地球を取りもどす

姫路市 丁坪 サワ子

妥協癖ついた佗しい据膳で

此の世では言えぬ話を頭陀袋

婿とって父権少し見直され

照れたとき空咳する癖親ゆずり

大阪市 中西 兼治郎

刑務所で心みがいて来た暮し

百姓の連休空が決めてくれ

歯車にたとえて離婚の娘を論し

だましてた癌の夫へ墓で詫び

竹原市 信本 博子

裁かれる朝とは知らず百合の白

飽食の国民病名たと持っ

面つけて逢いに行きますまだ他人

親切のつもり他人の糖衣錠

豊中市 上田 登志実

人様がお身大事と言うてくれ

おいしいと蛸焼き買いに寄るお人

キャッシュカード持てば安易に買ったがる

名も知らぬ草を育てるのも興味

肩書の弔電だけで以下多数

東京都 吉川 一郎

胃袋へ寂しい酒をたんと注ぐ

乱気流一生懸命生きてます

膝頭かかえ耐えてる黒子役

和歌山市 青枝 鉄治

期待したピンチの裏にこぬ女神

単身赴任いつも雑巾乾いてる

嫁が捨て妻が拾って着てる赤

身をけずり育てた子らが振る反旗

川西市 松本 ただし

一気呑み引き受ける胃を切りとられ

不摂生してストレスを飛ばす秋

生きてゆく最小限の欲を出す

冒険をしながら病後の自信つけ

箕面市 椎江 清芳

犬の恋自由にならぬ血統書

参観日よその子ばかり手を挙げる

喧嘩した時に見せたいラブレター

嘘一つ覚えて少女脱皮する

黒石市 相馬 一花

襟巻の狐よっぱど美人です

飽食のツケを喜ぶ外科内科

一杯のコーヒだんだん苦くなる

果樹園の鎌はリングゴの皮も剥く

和歌山市 山川 克子
常識で迫ると女はおちません

七人の敵へ私の黙示録
マイペース マイペースとは負け惜しみ
ハイミスの気嫌に合わすのも仕事

鳥取県 土橋 はるお

誘われてステテコのままついてゆく
墨つぼの昼寝が少し長すぎる
白バイから降りて来たのは息子かい
庭石に助手が仲々うるさいネ

十和田市 斉藤 茹

期待する物見あたらず箱眼鏡
本心を言わずに述べてきた祝辞
手づくり村の柱時計と昼ご飯
五人目の祝辞台本から離れ

大阪市 北川 悟郎

あさましき仮面を人はつけたがる
舞台裏僕には似合う持ち場かも
幾星霜変らぬ友情戦友会
今も抱く大和魂の抜け殻を

吹田市 茂見 よ志子

肩のこる話だったねティータイム
ローヤルゼリー疑問を抱いて飲み続け
ひと言が効きすぎたのか背かれる
人恋しくも窓拭く秋の雨

豊中市 辻川 慶子

赤トンボ昔話をつれてくる
横歩き蟹には蟹の家憲あり
釣忍昔の話母とする
秋の旅まず服の事靴の事

静岡市 永倉 僕川

再会を喜ぶ友の国訛り
遍路旅仏の貌になってゆく
旅疲れ我が家に勝る宿はない
戦友会逢う約束へそれっきり

鳥取県 羽津川 公乃

謝ってばかり煙草は斜陽族
助手席の男居眠りばかりする
遊び心が競争心に化けていた
大漁旗は二〇〇海里の沖が好き

奈良市 米田 恭昌

戦争展にて(3句)

学徒出陣雨中に聞こえる父母の声
報国の証し隻腕じつと見る
出陣の遺書嗚咽する老女
鬼だつてハンカチが要る時がある

静岡市 藪田 猷沓

花火の夜見えぬ処へ呼び出され
出会つても過去があるから横を向く
鼻声の何時もの秘書が電話口

適当な間隔おいていい仲間

岡山県 直原 七面山

生きるために人は互いに裏切られ

騒がれる程の美貌でまだ嫁かず

雨降れば雨に立ち風吹けば風に立つ

岡山県 岩道 博友

地下街で昨日の欠伸の人と会い

コマージャルまた外人で見せられる

人生の裏道むかでを踏んだ日よ

岡山県 二宗 吟平

冷房の風よけにした偉い人

親切の押売りひじ鉄とは悲し

八方美人これが一番わしに向く

寝屋川市 宮尾 あいき

せめて雨の日かがしよ横になり給え

お化けかがしこわがりませぬ蝶トンボ

値切つといて売る気にさせて買わず去に

加賀市 細呂木 魯木

根回しの攻防次を狙ってる

マスコミに洗脳された世相みる

空しさは義歯ではぎしり年を知る

岸和田市 芳地 狸村

岸和田まつり(2句)

こなからの坂でだんじり見栄を切り

紅提灯が夜のまつりの顔になる

人情も恋も出てくる港町

和歌山県 天満 三千代

汗になる水の旨さよ野良仕事

水かけ不動老若男女の願を聞き

ショーウインドー先取りしてる秋の色

羽曳野市 佐野 白水

老人の中元先は医者と寺

五年間水着は濡れぬままに秋

手のうちを見せる間もなく秋の風

和泉市 西岡 洛醉

ストレスを流す湯舟の狭過ぎる

財テクの話は遠い凡夫です

雑草の俺 俺なりの道探る

大東市 土岐 トク子

政界を揺るがす女性スキャンダル

亡き主人の残した花びんけしの花

親が言う事は然りと娘婿

静岡市 安本 晃授

手打ち蕎麦父が自慢の秋祭り

おぼろ月誤解深まる波の音

補聴器で陰口みんな拾う母

岡山県 池田 半仙

遠回りしたのに嫌な人に逢い

トンネルで峠の難所語り草

ペダル踏む毎日が有り安堵する

竹原市 石原 淑子

その裏は思わぬことよ女郎花
打ち消して期待大きくなるばかり
入院へ笑顔忘れぬ八十八

出雲市 久谷 まこと

初志曲げぬ決意三日は持ちました
嫌なこと補聴器には聞かせない
老いの意地ゲートの中にもえている

米子市 光井 玲子

過去の絵にこだわっている赤トンボ
堀越えた毬の残した道しるべ
ロボットもそのうち乱す時間表

和泉市 岡 井 やすお

月はもう見るものでなし行くところ
大國の地盤支えに異邦人
来て貰う程住み良くはないジャパン

鳥取市 小谷 美つ千

裸婦像に薔薇一輪が狂い咲く
花束を受けとる手なら汚されぬ
遺跡から骨を拾っただけのこと

島根県 石田 清泉

国富んで一億円が宙に浮き
余剰米見越したように稲倒れ
土井ビジョン三面鏡の顔を替え

島根県 北川 民子

くちなしの白鮮やかに夜が明ける
桐一葉万円札がちりぬるを
頰杖に一瞬秋がしのびこみ

弘前市 真喜内 實

定期点検父と車とおんなじ日
ラブレター丸いポストを捜して
痛みから痒さにかえてくれた神

出雲市 小玉 満江

言い張った女に座る場所がない
砂を吐く貝はストレス溜らない
句読点打たぬ老婆に日が沈む

豊中市 吉田 あずき

近きよし遠きまたよし鐘の音
交替へ満ちた顔して戻って来
褒められたバラは内緒で切ったバラ

河内長野市 植村 喜代

お茶よりもコーヒー好きとお坊さん
夕暮れにふる里思ふ浜の風
平等にすればよかった共稼ぎ

大阪市 横山 為子

嫁が来て家に新風吹き荒れる
星空がこんなに奇麗ピアガーデン
夜店から拾った話につく尾鰭

大阪市 富岡 温子

熱帯夜隣の寝息ばかり訝え

酷暑にも弱音を吐かぬ路の草
大ごとが無ければ奇れず遠く住む

広島県

田村新造

窓で手を振って見送る古代船
温泉と遺跡目玉のバスツアー
目つぶしの金で定年棒にふり

茨木市

堀良江

秋祭り今年はひとり子が増えて
好きなのに彼を敬遠してしまっ
立派すぎる椅子で話も上の空

米子市

茂理高代

逃げられぬ性なら強く受けてみる
夾竹桃かなしいだけの夏でした
巣作りの上手な母がいてくれる

米子市

金山夕子

好奇心伸ばして火傷してしまっ
謝れば済むことですと言われても
気分転換誘う仲間がいてくれる

寝屋川市

堀江光子

長篇の終りをちよつと読んでみる
横からの話がどうもますます
古稀すぎた母の掛けてる夢二の絵

大阪市

塩田新一郎

五体満足だから何も出来無いで
風速五十米これ掃除機の中の事
三本の指では天下握れまい

倉敷市

田辺灸六

予定にはなかった愛の途中下車
死と住んで老いの晩酌欠かせない
どん底で人の情を知る出会い

海南省

三宅保州

香奠は故人の遺志で貰います
大器晩成やつと運転免許取る
飲みながら話そう今日も飲む話

岡山市

花田たけ志

ひょうたんのような暮しでまだ死ぬ
わが道を少し譲ればゆるむ坂
天国に日本が見える難民船

岡山市

松本元江

雨雨雨笑う日のない秋ざくら
とうに忘れたはずの記憶が戻る秋
人が病む田が病む花も病んでいる

鳥取県

田村きみ子

雨の午後だから法話を聞きに行き
兎小屋に住んで番犬飼っている
秋の雨わたしホットコーヒーです

岡山市

矢内寿恵子

かけそばの一杯からの母想い
幸せの序列乱れた母の草
古里を語れば友も老母ひとり

羽咋市

三宅ろ亭

粗酒粗肴汲まんと友へ出す便り
雨垂れを選んで鶏頭伸びて咲く
柿右衛門を思い柿の葉を拾う

大阪市 町田達子

輪の外で器用になれぬ聞き上手
ゴキブリの髭にちよこちよこ試される
欲張って余生プランをまた増やし

和歌山市 玉井豊太

鉢ひとつ菊を楽しむ真似をする
蟻の列やがては冬に差しかかる
氣を利かす常連隅で飲んでる

神戸市 仲 どんたく

ジョギング歩幅が秋の風となる
三猿のしびれが切れてしゃべり出し
補聴器で虫聴いている独り酒

西宮市 瀬尾六郎太

一握の砂持ち帰る甲子園
先生が好きで算数甲となり
森が鳴く姿見えねど蟬しくれ

姫路市 大原葉香

結論を急いでならぬ月の道
議事堂の玄関仁王など如何
天秤の商いならば信じよう

高知市 北川竹萌

一門のまじめ嬉しい便り読む
目の前で蜘蛛幾何学書き終える

出雲市 小白金房子

搾乳へ夜風いたわる今日の幸
会いたくて思い出運ぶ下駄の音

鳥取県 乾 喜与志

半惚けのまんま浄土へ父還る
血筋より育ての親ともつ絆

奈良県 中原比呂志

一枚のタイル謀反を広げゆく
息苦しやたら英語のふえた街

鳥取県 谷口次男

アパートでふるさと色の米を研ぐ
アリバイは白骨だけが知っている

大阪市 大野武太

この辺で男の貌にもどるべし
死ぬときのこのむつかしさ辞書になし

岡山県 山本玉恵

人形を愛し憎んで二度童子
身構えて寡婦の意地とや失語症

鳥取県 津村八重子

味噌汁もおいしく風邪の床上げる
ななかまど夕日に負けぬほどに燃え

吹田市 園田文子

投げやりな女にもあった影法師
ウエディング泣かぬ約束だったはず

吹田市 栗谷春子

足枷手枷秋の長雨うらむべし
暑くなるのか寒くなるのかカレンジャーの間違いか

大阪市 神保拓生

鬼百合が河鹿の唄を聞いている
熱帯夜窓開ける音閉める音

自選集

久家代仕男

風鈴を外せば秋がなだれこむ
寄居虫に追いはぎが居て引き出され
片足の無い蟋蟀の澄んだ声
ころ病む傷口に降る秋の雨
私の胸にあけっぴろげの地図がある

遠山可住

台風のみやげが橋にひっかかり
埋れ火をちよくちよくほじる丸木橋
指染めて花粉にいのち託される
牽制球ということもあり子を論ず
汗引いた肌へ確かに秋が来る

黒川紫香

何気ない素ぶりの中にある本気
田園は秋だ特急車が走る
添えられた煮豆が好きで後で食う
喪服着る一団が居るコーヒ店
吊橋がかすんで見える朝を発つ

水粉千翁

匂うべし五風十雨の土の香を
さざ波の磯に詩人は問いかえし
昼食につづく爪楊枝の会議
ハミングのリズムに妻の襷掛け
ふるさとの衣脱ぎ捨てられませぬ

月原宵明

次の世も川柳作る俱会一処
退屈はしても人間やめられず
ネクタイを結んでも出る国訛り
前進を忘れた靴にひびが入る
秋風になって風鈴しきり鳴る

小出智子

満ち潮が来るまで待つてみることに
女でなければ出来ないことをすればよい
お天気の良い日に予定組んである
嫌われることまた言うている秋だ
秋が来たというのに壁とにらめっこ

小林由多香

久し振り見せた酔態なにかある
気の乗らぬ署名に細いペンを
椅子一つ序列派閥的になる
紙オムツ赤ちやんだけのもの
でない
コーヒーが飲みたくなつた
午後三時

本田恵二朗

通話料母持ちにした長話
好敵手交互にトツプの座に
すわり
下戸一人忍術みたいに雲が
くれ
通訳はママです片言よく喋り
月一度朗らか人種が円座
組み

藤村 女

月一つ写して静かに池眠る
寺に来て無我になれない風
に逢う
別れても風の便りに痛む胸
渡り鳥語り部となる森は泣く
落葉焚く去年は姉と焚いた
庭

野田素身郎

相席の人も偶然左利き
集金が一度に晴れ間縫うて
来る
傘さしてまでパチンコへ負
けに行き
待ち遠しくて舌で入歯をも
てあそび
台風へ鈴虫律義に鳴き続
け

正本水客

どたん場にきて神さまを信
じない
腰が据つていないと他人の
こと思う
勿体ない勿体ないと嫌が
られ
挨拶がきっちり出来た子
を見詰め
棚ぼたを否定している訳
じゃない

工藤甲吉

平和平和帯がほどけたかの
如し
年寄りが助かる地球温暖
化
原爆忌から敗戦忌そして
秋
月見草竹久夢二など想
い
かくて女はかたくなに口
つぐむ

波多野五楽庵

少年の壮志に東京丸ノ内
ビル止めて次郎が欲しく
なつた秋
カルテにも医者個性がある
らしい
なるほどと言われるほどの
乱筆で
初恋の頃はマリアに見
えた妻

児島与呂志

マンションはいりまへんか
と電話ベル
年寄りのしみ年寄りの肌
になる
知り合いに素通りされた
日の不安
しみじみと逝つた人くる
指で繰る
父だけが古い手紙の束を
持ち

大矢十郎

孫集うりーダー格の声変わり

奥さんと話せば解る信用度

縁結ぶ神あり似た者の夫婦

嘘を言う顔かと無理な事聞かれ

ホステスが惚れたと言えば済むものを

金井文秋

贅沢に使えとタオルよく溜まる

スーパ―にこぼれておった一円貨

歩けるうちは歩かな足が退化する

持ち駒はないがいつまで生きられる

インタビューに百歳の顔の艶

八木千代

秋の枕は昔の見える位置になる

夕顔がプラトニックに枯れている

秋草の中にしばらく身を隠す

三日月の光でわたくしを捜す

野の露のつめたさうまさ生き残る

野村太茂津

友を愛して秋を娛しむ俱会一処

友の胸開く思いで忌憚なく

病葉がはらはらと舞う友の忌に

秋は長雨悲しい噂せぬように

本音ばかりで通らせぬ世とは知りながら

有働芳仙

難民の顔は昔の俺の顔

オジタリアン オバタリアンに道をあけ

親と子の対話一日なかりけり

地下足袋に軍手で一生終る蜂

寝た切りへお守袋邪魔になり

山内静水

何もかも一人でやった出来た頃

生き甲斐は煙たがられて頼られて

吾ながら随分ちいさくなった声

銚子がないだけ猫の飯犬の飯

枕が二つある倅せに気づかされ

藤井明朗

川柳の詩宴楽しみ文化祭

詩の華に文化豊かに菊の秋

秋台風ジグザグ油断の隙襲う

国民の良識見直す消費税

政局の混迷自民連合総選挙

阿萬萬的

驚一羽ゆく春惜しむ水の音

コルドバの碧夏草背を競う

松の小枝もはつきり瀬戸は夕焼ける

芒かすかに揺れて大阿蘇秋深む

遠山の雪見てござる道祖神

現代南画展を見て

西田柳宏子

手の内を知られたくない無駄話
一日一善なにもできない日が続き
隠れ蓑一生外せない仮面

半額のチラシに要らんものも買い
仮面よう脱ぎ捨てないで居る紳士

河内天笑

お見舞いに行きまひよあつち向かん間に
カルチャーで遊びごころを身につける
悪いこと言うたかいなと覗き込み
腰低うして出し抜くのがうまい
ぼろのちよんけなしてくる有難さ

橘高薫風

淡島幻想

流し雑素朴消えたら海消えた
男根のたけくらべには水を遣らねば
完璧な乳房に逢うた母以来
安らかな乳房の形りの土まんじゅう
光の過去と水の未来の中に澄み

「愛染帖」欄選者交代

本誌の「愛染帖」欄は、十五年間にわたって
橘高薫風氏が選者をつとめてまいりましたが、
一月号から河内天笑氏に交代します。前選者同
様、よろしくお願い申し上げます。

川柳塔社

平成元年度大阪文化祭

第41回 川柳大会

とき 11月4日(土)

午前11時開場 午後1時締切
午後2時から披露および表彰

ところ 大阪府中小企業文化会館

地下鉄「谷町9丁目」⑤番出口・谷町筋南へ7分東入ル
地下鉄「四天王寺前」下車・谷町筋北へ7分東入ル
近鉄「上本町」下車・南西へ10分

兼題

「肌」 神前 朋義選
「煉瓦」 田中 正坊選

「時計」 住田英比古選

「潤」 高橋 白兔選

「最近のニュースから」 柏原幻四郎選

当日2題発表

出句 兼・席題とも2句(出席者に限る)

会費 一、〇〇〇円(作品集代含む)

主催 大阪府・大阪市

大阪府・市教育委員会

川柳の群像

小池鯉生

東野大八

○流れ者只の鼠でございます 鯉生

この句は、人間鯉生を語り尽して余りある秀句だといつも私は思う。その心証は、以下語る波乱万丈の苛酷極まる彼の生涯をふりかえれば、誰しも首肯できることだと思つ。

鯉生・本名小池理一は明治40年11月7日神戸市で父石三郎、母雛尾の私生児として生れたが、生母は彼の生後六カ月後に伝染病で27歳で死亡。里子に出され養母つねの手に移つたが、貧しいながら教育に厳格で、貧民窟の善隣幼稚園に五歳から通つた。ここで賀川豊彦を知る。園児の内でも彼は粗暴で、幼稚園卒業の日、悪友たちから凶器をもって襲撃を受ける。小学校に進学し、六年間全甲で級長で通したが、操行のみ乙。乱暴やます、四六

時着物はスタスタ、ためにブリキの着物で行けと継母に折檻され、余計乱暴を働いた。

やがて県立神戸商業に進学したが、成績下落、ボート部員で運動ばかりやる。級友に三条東洋樹、鈴木九葉がいて、一級下に大山竹二がいた。東洋樹は峰月、九葉は露溪の川柳号をもっていたので川柳をかじる。号は悲劇の僧俊寛をもじつて俊坊、時に16歳。『大阪』『叢叢』『川柳雑誌』など、川柳仲間購読誌のおかげで十数誌に片っ端から投句。

大正十三年18歳の時上京、向学の念やみがたく、父の猛反対を押し切つて慶応義塾経済学部に入學。学資は自力でまかなうことになり、甲府の水晶を角帯姿で東京日本橋一帯の間屋街に売り歩いた。この間、柔道をやつて

いた縁で、講道館長嘉納治五郎の西摂塾に起居した。しかし月十六円の塾費を得るため、修養団体希望社(後藤静香経営)の会計係になつたが、大学で小泉信三教授にいきなりドイツ語のカール・カウツキーの『貧労働と資本』の全訳を命じられた。

このことから小泉教授の信任を得て、同家に庇護され、先生の書斎の整理や、水上瀧太郎(阿部章蔵)の著作の分類、整理を手伝つ傍ら、親戚の子弟の家庭教師を勤めて学資を稼いだ。働きながらよく遊んだ。麻雀は日本連盟本部で鍛え、花札も得意の一つになる。

こんなことで父の怒りも解け、神戸に帰つて家業を継いだ。帰郷直後、四国から妻を迎えたが、なんと新婚三日目で新妻が発狂。養生先でその妻は、連続殺人狂の兇手にかかつて死亡した。このことからぐれて、家を出て神戸港棉花組の世話になり、長男大賀広次の伴をして各賭場を歩くうち、暮・花札賭博を覚え、時には白刃に見舞われる日もあった。殊に朝鮮人二百人の扱ひ方を誤り、大喧嘩の末、殺されそうになつたが、急をきいて駆けつけた大賀の一喝で、人夫頭の『二条の金』の詫びで危うく難を脱れた。

このようなことから父の勘当も正式に解け、

家業に身を入れ、公私職十幾つも受けもち、二度目の妻も貰い、昼夜の別なく活躍した。

この間、満州の北滿へ開拓民移植の調査にも行った。そして帰国すると召集。千島列島の軍輸送の指揮艦に乗り、アメリカ潜水艦に脅かされながら千島・北海道を往復するうち、アツツ島玉砕、北海道司令部付となって終戦

終戦後の焼野原に神戸商店街の再建に尽力したが、店の経営難のうち妻は乳癌で死亡。この時、阪急高架下の倉庫が類焼した。第三の妻愛子（現夫人）を迎えていたが、過労のため結核になり、療養生活に入った。

○落魄と言う字は白く書くものか 鯉生
倒産して無一文の生活、英語もドイツ語も忘れてしまったが、日本文法だけは残った。かくて中絶していた川柳の道に戻った。房川素生、椋文紋太師らが懐かしい川柳の手をさしめてくれた。父は昭和20年6月の神戸空襲で死亡していた。かくて病後、伝手を求めて浦和に出て鶏卵商を細々と営む。川上三太郎がこの家に数度現れ、いつか川研の幹事にされていた。号は俎上の鯉から鯉生とする。

「私の放浪無残の生活の中から得たものは
嘉納治五郎先生から若者愛すること
後藤静香先生からは日本を愛すること

小泉信三先生からは人類を愛すること
川上三太郎先生からは己れを愛すること
そして最後に

椋文紋太師からは……」

以上が鯉生にとってただ一つの句文集「残照」の長文の「あとがき」の大意である。序文は紋太が不自由な手で九頁にわたり執筆。素生もあたたかい一文を寄せている。

○丸裸から玉子屋を思いつき 鯉生

○猫背にもならう小銭の小商い 〃

○有難き仕合せ玉子一個売れ 〃

○あつけなく売切れとかく玉子店 〃

○世渡りの下手許し合う小さな膳 〃

○遠くきて二人住居に鳴る時計 〃

この句集は、愛子夫人のあたたかい発案により昭和45年5月に発刊されたものである。しかし、玉子屋の経営に落ちついたとみる時、多年の有為転変の疲労と結核後遺症に加えて、脊髄カリエスが突如見舞って、再び死の床に横たわった。

○病窓は十字架である西を見る 鯉生

○夜もすがら汗の十字架背に描き 〃

この句は「残照」に辛うじて入っている。

この絶唱に似た想いが神に届いてか、彼は死の危機を乗り越えた。

○残照を瓦礫に憩う許されし 鯉生
鯉生は書をよくした。門下千人と称される

東方書院柳田泰雲師の五十人衆にもリストアップされている。号緑山。大展に幾度も入選しているが、「自分の書いたものは売れる気はない」と筆者の手許へ、幾度もその大作が届いた。畳二枚分の超大作やフスマ程の心経の闊達な文字を膝元に展げ、筆者は幾度も途方にくれた。

鯉生と筆者の出会いは、昭和44年のふあうすと四十周年大会が開かれた会場であった。

「住田乱耽と今会ったが、こんな大会は電気掃除機だ、と怒って帰っちゃった」と言うのと、鯉生は阿々大笑して筆者の手を痛

いほど握った。後にも先にも鯉生と顔を合わせたのは、これ一回きりであった。しかし、この日から毎日のように書簡が矢つぎ早やにきた。どかっと秘蔵アルバム七冊がきたりして、それを返しても彼の書簡は大箱いっぱいある。

○思い出はよい看護婦のよいおでこ 鯉生

この達筆のハガキの所感を最後に、昭和62

年11月19日、心不全で死去した。79歳。

○浦和在憚りながら紋太弟子 鯉生

★次回は「安川久留美」

柳籠裏三篇研究(二丁)

11 棒の先キへうなぎがくつついて出ル

佐藤 〓 鰻の穴釣りの場面と思うが、どうであろう。穴釣りは短い竿の先に糸とうなぎ針をしつらえ、土場みみず、または、どじょうを餌にして釣る。穴の中へ竿をぐっとさしこむのである。針が竿の先にくつついてるので、手応えがあつて引き上げると、竿の先に鰻がくつついてるように見える。それを詠んだ句ではなからうか。

罪に成る数珠を持つてる鰻釣り 二九一〇
うなぎかきせなかくて舟をあいしらい

宝十二義 5

西原 〓 礎稿の如くであると、棒とはいわないうで竿というのではないでしょうか。蒲焼であれば串という。それでちまたの風景として「うなぎ売り」と思います。天秤をおろした時、這い出たうなぎが天秤棒を伝わつたのではないのでしょうか。

大野 〓 「鰻釣り」と「鰻掻き」と外見上似てはいるが、区別したいと思つ。穴釣りであるうか。

鈴木 〓 贊。穴釣り風景は戦前、葛西海岸でよく見掛けたもの。石垣などの鰻がいそうなきマに竿を差し込んでやつていた。

10 男飯焚おはくろで度々喧嘩

佐藤 〓 「お歯黒壺(鉄漿壺)」は火のそばにおいて暖めないと濃く出ないのである(鉄漿は温度を加えると酸化が促進されるという)。それで、下女はよくお勝手の釜の側に鉄漿壺を置く。これはもちろん、下女自身用いるお歯黒である。男の飯焚は、この壺が邪魔になるといって小言をいう。下女にだつて言ひ分はあるだろう。そこで言い合ひになる。そういう場面の句であると思つ。

めしたきハおはくろつばでいぢり合

七二四

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助 故岡田 甫

七久保 〓 飯焚きが汚ながつて、度々捨てよとするので女たちと衝突。

青木 〓 おはくろをつける下女がよく解りません。出戻り女とか、婚期を逸した女と想像して居りますが、そうだとすれば向う気も強い事でしょうから、男飯焚との喧嘩も派手な事でしょう。

鈴木 〓 礎稿明解。お歯黒を下女があつたためるので邪魔になる。

岡田 〓 礎稿に贊。なお、下女のお歯黒は、年増女だと熟練者として給金が高くなる。それで未婚の下女でも、年増に見せるためお歯黒をつけるのがいたのです。

岡田||ウナギの穴釣りです。礎稿に賛。

12 窓へ来た御慶に女房氣をつける

佐藤||御慶は年賀の挨拶である。玄関から来ないで、からめ手の窓から亭主のところへ言葉かけるのは、どの道油断のならぬ裡に違いない。これを誘い人といい、行き先は決まっている。目で語り、手で合図し、「山川」の暗号を用いることもある。何とかして女房の目をくらませようという、二人の共謀。毎度のことなので、女房もおさおさ油断をおこたらない。

野となれといへばさそい人山となれ

明八桜 4

さそい人八またやかれるを外で聞き

明三義 4

八木||大体、賛成ですが、当時、正月に悪友が来たからといって、簡単に吉原あるいは他の遊里に遊びに行けたのかその辺不安。かなり子約制になって居たのではないかと思うが。

鈴木||礎稿ご明解。例句を一つ。

何やつか窓をつついてさあとい

天・六・八・二・五

八木氏そのようなご穿さくご無用です。事實は子約制もあり、なきもあり、川柳はあく

までフィクションで、あの手この手を使って吉原行のチャンスを利用した句作にすぎません。

岡田||同。

13 そそう千万八屋根屋の絶死也

佐藤||猿も木から落ちるの譬え。屋根屋が屋根からころげ落ち、打ちどころが悪くて悶絶死した例もないとはいえぬ。しかし、商売柄で屋根屋は屋根の勾配に足をとられることは、まずないことで、これは誤ちにしても粗相千万、笑止の至りであるという程の意と思う。

屋根から落ちて賑かにしぬ

武十八五

屋根屋あ屋根屋といんろう持て出る

安六仁 3

鈴木||賛。

岡田||礎稿にてよからん。

14 取ツて廿子に成りやすと運のよさ

佐藤||十九は女の最大の厄年で、特に川柳では、若い娘の死ぬのは十九歳と相場が決まっている。その大厄年を無事に通過して、当年とって二十歳という娘、まあ運が良かったとは他人の評であろう。

仕合せは四五の式十で床を上げ 麓三 14

八木||運が良かった、まででよからう。

西原||賛。娘ではなく、妻である。

鈴木||礎稿に賛。「取ツて廿に成やす」は、誰かから「お花ちゃんおいくつ」と聞かれて、お花の答え。あるいはお花の母親の答え。それに対して聞き手が、「ソレハ運が良かったですわ」。

岡田||賛。娘か嫁かは不明だが、答えの語調からすれば娘。

中野文擴句集「おふくろ」

出版記念句会

とき 11月5日(日) 午後1時開場

ところ 湊川神社・楠公会館

(JR・高速神戸駅北すぐ)

宿題 「歌」 高杉 鬼遊選

「名」 平山 繁夫選

「街」 藤本静港子選

「雑詠」 時実 新子選

*各題3句 締切午後2時

会費 1000円(句報・記念品呈)



黒川紫香選

摂津市 木下道子

てのひらで男豆腐が切れますか

鳥取県 山根八重

美容院の鏡はすこし嘘をつく
暗誦番号忘れた悪夢真夏の夜
渋滞の列のトップを走りたい
涼しげに着こなしてはる着道楽
一応は余白だらけの手帳繰る

鳥取県 西川和子

約束をする日は何時も雨が降る
喜びを口には出さぬ秋ざくら
茶柱がほんのりくれた朝の幸
指切りの指を静かにあたためる
感情は心にしまい丸く見せ

富田林市 池森子

花束贈呈嫁と私の涙です
孝行の少し遅れた紅葉狩り
言いにくい事をさらっと言っつてのけ
二十五時今日の予定をやつと終え
雨音も気温も丁度いい布団

今治市 野村京子

夫婦の絵だんだん乾燥して暮れる
男盛りにふもとの風は生ぬるい
つながれる紐一本を信じきる
逆風にもなびいてみよう時の風
あくまでも他人として逢うロビー

名古屋市 藤井高子

かごめの輪抜けた可愛い青りんご
みょうが漬特に忘れがひどくなる
恋ごころ抱いて悲しい人魚かな
風葬にしたい一つの花言葉

小春日に和む背ながら手足から
やさしさに住んで小鳩は眠うなる
計が届き御慶が届き季の移る

秒針のすべりが今日もなめらかで
はた目にも哀しいお酒とわかります

出雲市 金 森 知恵子

言にくいことはつきり言う鏡

ちっぼけなこだわりでした青い空

語り口軽いが蘊蓄ある話

少しだけケチツて帳尻合わせとく

ゆっくりと難問解こう蝸牛

八尾市 高 杉 千 歩

新婚と連れだち墓参冥利尽く

山も樹も語りべとなる過疎の村

笹舟を浮べ蛭に逢いに行く

赤い灯青い灯プラトニックな恋でした

月からの果し状だとやがて知る

広島市 流 奈美子

朝シャンで若さちよっぴり真似てみる

ひと色の緑に富める千枚田

空高しよどみなきかな笑い声

NO言えぬ悔いに溺れる盆の窪

優柔不断まずいケーキを食べた悔い

熊本市 宇 野 昭 代

曇り後晴盃が回り出す

大家族だった広さに一人住む

こおろぎの鳴く敷石を踏み惑う

アメ玉を出すタイミング狙ってる

よろこんでくれて茶柱うれしから

熊本県 大 川 幸 子

相合傘必ず誰かに見られてる

冷房で秋の足音きこえない

失敗の痛さを糧に努力する

結局は進めた分まで寝坊する

潮時をちゃんとわかまえ飲み上手

和歌山市 山 口 三 千 子

秋風に堪忍袋補修する

気がつけば飼いならされた独楽鼠

忙しい時は忘れてる傷み

シャガールの名画も我が家には合わぬ

すきま風吹いて合鍵置いてくる

和歌山市 森 茜

時刻表ドラマティックな旅に行く

長男に大ぶりの茶碗買ってくる

大箱のアイスクリームもてあまし

息子へ送る句誌へひとことうれしさも

店仕舞2B鉛筆買い占める

尼崎市 野 瀬 昌 子

髪飾りつけて昔の夢を見る

押し出され成り行き見てるトコロテン

肩書が十指にあまるお人好し

留守番を頼まれ所在なく昼寝

ポッケから砂が出て来る孫の服

鳥取市 西村 黙光

酒好きの親友がすすめる断酒会

ストレスがはち切れそうな日曜日

秋風に棘を抜かれたバラの花

秋晴れに天狗の鼻も美しい

天高く記録を伸ばす万歩計

静岡市 沢田 きん

一鉢の花と安らく孤独の日

再会へ胸ときめかす発車ベル

雑念がさまよう夏の不眠症

好奇心味方の顔で座ってる

地下街の老いを迷わす出入口

伊丹市 山崎 君子

雨やどり小犬に礼を言っ出て出る

水たまり犬とまたいだ散歩道

梨届く今年の秋が早く来る

コーヒーにしっかりと聞かすひとり言

三時です今日も一人で茶を入れる

京都市 松川 芳子

マスコミに言っってはならぬ艶話

分け合うて重荷にならぬように生き

羽根布団軽い噂が飛んで来る

幸福の扉の鍵が見当らず

責任が無いからすぐに妥協する

西宮市 秋元 てる

ひとり言叱ってくれる人が欲し

好き嫌い戦の頃を持ち出され

嫁ぐ日の夢も見ていた防空壕

故里を捨て小走りに歩く癖

唯おぼろ夫と居た日の国境

大阪市 上田 柳影

豪快に軒をかいて平和です

鬼という仇名を消している笑顔

飽食の財布で貝になってゆく

脇役に徹し切れないかすみ草

とつつきの悪い隣のバラの花

久留米市 鶴久 百万両

陽の匂う木かげで亡母の絵を描こう

齢のこと忘れてワルツ踊ろうか

鈴虫逝くその夜は黒い風が吹く

養育費めぐってオトコ対おんな

寂しがりやの男を誘う菊の展

堺市 山本 半銭

月の出に合わせて風呂の窓を開け

傘さした月がやさしい帰りみち

仏壇の薄暗がりに蚊がひとつ

けんかするぐらいの絆で続いている

出雲市 金村 青湖

家族みな寄る所あり小さい屋根

思い出が寄せては返す里の海

もう三日ささいなことでも口きかず
訪う人もなく燃えている葉鶏頭

米子市 新 正子

禁煙のさびしさ飴がなくなさめる

裏返す枕の柄は変えておく

隣より一日遅れの焼魚

海も山も同じ土産を売っていた

大阪市 松 永 すすむ

年よりが居る柿の皮乾してある

秋の空池にもうかぶいわし雲

停年で暇もてあます粗大ゴミ

瀬戸際に立ってはじめて手を合せ

大阪狭山市 桜 井 莊 次

札束が渦を巻いている裏話

とんでもない事を考えている頭

切れ切れになって一つの恋終わる

台風一過空を仰いで欠伸する

藤井寺市 高 田 美代子

敬老日ふと父の齢母の齢

おだてられ天を覗いた豆の蔓

それからのことは神様に聞こう

すこし疲れて紅白饅頭食べている

寝屋川市 宮 崎 菜 月

悔まれて月に物問うせつなさよ

恋人はブータン国王と決めている

浮ついた自分を離れてゆく言葉
梅地下で息子の背なへついてゆき

兵庫県 森 脇 和 子

友の背の温みで知った生きる道

神さまのいたずらだから負けている

生いたちを語ると濡れる紙人形

ポケットの内緒が騒ぐ気の疲れ

吹田市 井 上 照 子

たまに打つ日曜大工の釘曲る

もう少し若さが欲しい試着室

夕食に姑とビールを干す晩夏

歯車を動かす位置で腕ふるう

鳥取県 市 村 京 子

触れないでようやく澄んだ水たまり

思い出の底でかごめの輪が回る

田舎の風に抱かれに行こう影法師

呆けた父が涙を流す怒りだす

吹田市 山 本 希久子

入り口でまだ迷ってる医者嫌い

かたつむり登ってみたい山がある

暇がない愚痴ながながと電話口

桜貝波に誘われ行ったきり

京都市 渡 辺 圭 坊

梅の花寒さにめげず忠実に

ポインセチア私の心燃えている

過ぎし日の追想紫苑楚々と咲く
はにかみを見せて内気なシクラメン

尼崎市 鈴木良征

弱者には情け容赦の無い政治

親馬鹿ですぐに絵の具を買いにい

あきもせずガム噛締める影法師

予定した日には帰らぬ伝書鳩

静岡市 柳沢たま

へソクリのたまつた頃に羽根がはえ

長年の思い出つめた日記帳

只今ヘカレーの匂い鼻をつき

残されたノートに夫の愛の文字

尼崎市 森安夢之助

一筋の煙に邪心すてている

車座で肩の凝らない茶をすす

線引きをされると右へ入れない

肩の荷をおろし絵筆と旅に出る

尼崎市 的場十四郎

スタミナをつけて如来にひざまずく

アルバムは想い出ばかり夢ばかり

意地張って本音をそらすその恐さ

群のなか帽子が目立つ伊達男

尼崎市 山田保蔵

だし抜けにアメリカ行を誘われる

コメデイアン中折帽がよく似合う

背中まで泥はねあげて孫帰る
下駄ばきで銭湯帰りの足軽い

西宮市 松本一郎

本心が見え隠れする美辞麗句

ときには止りときには流れ丸い石

右上り癖字の温い子のたより

父の樹をまだ越せないで不肖の子

東子市 小山悠泉

ポケットベルにつながれている八時間

休肝日一日のばす友が来る

お茶のんだだけへ嫉妬をする噂

許す気になつて言訳聞いてやる

熊本県 高野宵草

半分は居眠る僕の読書趣味

吊鐘が風に揺れてる村芝居

カラオケに行こうか憂さがたまりすぎ

本心を糺せばやはり金のこと

出雲市 岸桂子

一日の汗をまるめてシャツを脱ぐ

枝豆とビールがあつて月を誉め

橋一つ渡れば村は秋祭り

植え方をおしえてもらい苗を買う

島根県 高野律子

雨の日の墓参水子の灯が揺らぐ

終章は茜の如く燃えたいな

物言わぬ石に孤独をいたわられ
糸車耐えた老婆の唄を聞く

鳥取県 西浦小鹿

雨の午後三輪車だけ公園に
蟻のスクラムに勇気が湧いてくる
日の丸をあげたい風がゆつくりと
和菓子のかさに負けてしまったお茶

倉吉市 青砥菊枝

品の良い紀子さんに只見とれてる
雨しとど別れの歌を聞くもよし
一日を初秋の雨にくるわされ
手相見に手よりも顔を見つめられ

尾崎市 尾宮弘治

エプロンを外して義父にビール注ぐ
脇役に徹した老父の換気扇
手話の子も共に輪の中地蔵盆
妹の水着見たてる車椅子

岡山県 富坂志重

老人の背は年金に支えられ
故里に痛みのわかる山が有る
試着室高い方のも着て見たい
糸巻のシンにかくした恋の文

和歌山市 堀畑靖子

仕上がりは万全などと言う驕り
落ちこんだ顔にギョギョツとする鏡

出不精が出るというのに雨模様
人生を更に楽しむ趣味を持つ

大阪府 亀井円女

うつの日は笑い袋もしばみませ
流れ星よ楽に死なせて下さいな
思ってもない世辞を散らして自己嫌悪
短気は損気と今日も亡母に叱られる

貝塚市 池田寿美子

ひと駅を歩いて今日のノルマとす
三途の川泳ぐ日課をつくらねば
溜息が人形劇の裏にある
秋深し魚の目にも映る雲

鳥取県 今本早苗

夕暮れの灯りへピアノ弾いている
秋の花瓶に投げ入れるものがある
幼な子の涙いっぱい欲しい
わたくしを支えてくれる男がいる

相生市 中塚礎石

三世代それぞれテレビあてがわれ
隙のない身なりに愛が飢えている
廃線は地図に残して消えていき
兵隊の話だまって聞いてやり

熊本市 黒田緑

安息の船を港につなぎたし
回してもすぐには空かぬ栓の捻子

偉そうな顔で頭を掻いている
くすぐってコンプレックス手に温め

熊本県 岩切康子

思う事済ますと頭が空になる

こおろぎの合唱を聞く仕舞風呂

曼珠沙華摘まれやすいとこに咲き

尋ね来て昔の愛に触れている

兵庫県 酒井靖子

叫びたい心ゆくまで叫びたい

ひまわりに元氣出しなとささやかれ

裁かれているのか咳が止らない

ふくらんだ噂半分嘘だった

高槻市 芦田静江

奥の細道羽根を伸ばして雨の留守

百枚田に穂先を探す赤とんぼ

故郷の海が抱いてた国訛

二度咲きのカンナが余生弾ませる

鳥取県 乾隆風

台所の方へ招かれて助手になる

柿の葉が落ちると齡を意識する

あばら骨慰めてきた風呂上り

檜山へ年金かじる虫が這う

大阪市 堀口欣一

織田作の思いもあり自由軒

わが妻をみめうるわしく思う朝

思い出の人が出てくる秋の夢
ふるさとの八幡さまで祝い酒

尼崎市 中澤向西

音のある玩具に幼児両手出し

だし抜けに帰ると言って靴をはき

高飛車になった女が笑い出す

夕立が去って涼しい葱坊主

尼崎市 明壁敏之

足音をころし虫の音聞いている

台風が近く風鈴騒ぎ出す

うどん食い身上話聞いてやる

結論が回り道してやっと出る

鳥取県 太田幸枝

人間のSOSと爪の跡

犯罪の口かなしい思ひさせ

要領良いエリート乗せた泥の舟

浄土への道中歌を習ってる

鳥取県 武田照女

壁二つ越えて自分に突き当り

傷心をいやす言葉が見当らぬ

秋の空人の情けが欲しくなる

田舎の子虫の命を見て育ち

尼崎市 吉永伊三郎

着飾った親が受ける宮詣り

いつからか婦唱夫随の赤い旗

気の弱い男と渡るかずら橋
仲よしになりたい膝に詰め寄せられ

来ない人待つのは止そうお月様
茄子の肉しまつて秋になり申し

それからはピエロ無口になりました
かすみ草主役の夢は持っている

思い出がコップにゆれる水中花
乙姫が舞って来そうな水族館

未練まだ心の窓を半開き
逢うまでにほぐしおきたいからむ糸

ハイポーズカメラ慣れた小さい孫
クローラーを嫌う夫の薄い肩

今朝もまた目玉焼かとフライパン
今年で暮らす夫婦の金婚式

旅の宿スタミナ料理に満足し
おそくまで孫の浴衣を縫っている

正直に書けない日もある日記帳
風邪引きが待合室でよくしゃべり

肩のこる話オウムがまねている

堺市 神原 文

京都市 小林 英子

静岡市 宇佐美 寿美

静岡市 小 木 久 子

尼崎市 木 下 義 嗣

豊中市 村 上 とく子

駅前のピラはよそ見をして貰い

周遊券おんなじ人と又出会い

チロルの丘を無心で駆ける春帽子

回廊の艶修業の僧をみる

意地張った舟で大波ばかり受け

身上書四角い文字でべール張り

母と娘の話 無言の目が妥協

孫の顔見れば財布の口ゆるむ
夏休み孫と祖母との猿芝居

単身赴任知る人もない細い月
出世するはずの手相をじっと見る

もとの二人となって秋が深くなる

まん中へ杭一本を打っておく

平熱になって人間とり戻す
結局は逃げるつもり言葉尻

夕立へ墨絵のように人は駆け
空白を埋めるつもりで一人旅

不義理した心の敷居高すぎる

円卓の肴にされた裏話

酒田市 永 沢 裕 子

岡山県 森 下 正 子

大阪市 今 西 静 子

徳島市 宮 武 まつ女

藤井寺市 菊 地 繁 男

枚方市 中 山 おさむ

外向きの顔に戻った会議室
白砂青松若い二人をふところに

和歌山市 田中みね

ゆめのある帽子で鳩が躍り出る
欲言わぬ今のまんまの妻で良し
逝く人の面影胸に畳み込む

十和田市 阿部喜久江

自分でも満足してる並の顔
佳い話続いて過疎が甦る
絆かな子まで虚勢張って居る

熊本市 北川一進

額ぶちに入れば億の値も上り
突然で済まぬ済まぬと金無心
お見合に母もすこし塗る化粧

尼崎市 佐野六浦

真つ二つに切った西瓜へ夏の雲
マネキンの派手に着飾る商店街
幸せに結ばれたのに親離婚

守口市 森川春子

自動車の騒音虫すだく中
採血をする看護婦が気兼ねする
縫針を落し磁石の力借る

鳥取県 黒田くに子

涙涸れ果てて女はつよくなる
イヤリングうわさ話を聞いている

ていねいに掘っているのは落し穴

羽曳野市 福田満洲子

主婦の身に自由賜る盆ひと日
寝ころがす土地か今年もバツタ飛ぶ
寝ていても子猫を遊んでやるしつぽ

愛媛県 八塚三五島

時計などいらぬふたありだけの夜
逆風に耐えると別の花が咲く
万歩計 古本市につきあたる

鳥取県 西原艶子

亡父がいて私が生きている歴史
三寸ほどの小鯛で祝う誕生日
魚の目の薬 夫が買ってくれ

伊丹市 小熊江美

糊きいた浴衣から手足太く出し
カタカナの店の名前が出て来ない
自分では気付かぬ癖を子がまねる

岡山県 福原悦子

花活けて明るさ満ちる部屋に居る
世渡りにほどほどの車間距離を置く
別々に日記抱いてる凡夫婦

鳥根県 菅田かつ子

あの案山子うちの案山子が好きらしい
泣きなはれ心ゆくまで洗面所
汽車ぼっぱ急げとんぼやかぶと虫

寝屋川市 太田 藍子

行くまでが楽しみですと旅プラン
込み入った話コーヒー一杯で
ダイエットの予定狂わすご招待

静岡市 中西 雅

善戦し郷土へ涙の砂袋

亡き夫の墓にふるよな蟬しぐれ

年老いて嫁のすすめではでになり

枚方市 森 下 節 子

お誘いがあればホイホイついてゆく

六艘が舫って上る鵜飼船

人の名を思い出すのに回り道

尼崎市 住 谷 石 舟

女教頭妻に戻れば甘えたし

真知子まきあの頃わたしも恋してた

合鍵を貰ったままで三月たち

岸和田市 三 輪 通 彦

若さとはいいな何でもよく似合う

盆三日姑に主役の座を譲る

道で会う息子他人の顔で行く

鳥取県 木 下 芙 葉

挨拶がろくに出来ない発起人

酔う程に昔の癖が二つ三つ

孫の書く似顔絵ほんとに似てるよう

岡山県 伏 見 すみれ

親も子も左利きです器用です
きっかけはテニスコートの好敵手
京の宿雨に煙った渡月橋

鳥取県 石 谷 美恵子

中傷も聞くが味方と信じ切る

冗談にしては本音が覗き過ぎ

お喋りの端で糸口盗まれる

広島市 名 和 喜一郎

大穴を狙う勇氣は妻がもつ

味噌汁の音だけさせて老夫婦

葬儀屋の指図通りに式終わる

鳥取県 美 浦 美代子

もとは他人と水くさい事夫は言う

細くとも母の紐には愛がある

盆踊り金髪の兎に拍手する

鳥取市 岩 原 喬 水

新築の無理なローンが身を削り

孫の酌平和な家の酒に酔い

国宝にされても仏しらぬ顔

今治市 渡 邊 伊津志

ぶらんこの園児の足が空を掃く

冗談が通じないので座が白け

カーテンを引くと白浪遠ざかり

鳥取県 山 内 芳 江

名声は高いが低い腰を持つ

立秋の彩が茄子からこぼれ出す
ストレスをビールの汗でみな流す

藤井寺市 楠 昭子

老いの身に容赦はしない日が過ぎる
暇を持て余す割には捗らぬ

唐津市 浜本 治幸

孫の肩もって未来の夢つなぐ

大阪市 清水 利武

甲子園親子二代の球歴史
松茸の走りが海を越えてくる

岡山県 福原 辰江

体育の秋先取りの練習生

予定にはない一生で夢がある
予定日へ何回電話里の母

寛ぎは今日もいびきの隣に寝

広島県 森川 抜智

坊さんのお経の最中足くずす
機嫌の悪い日はビールが慰めてくれる

出雲市 高橋 きよし

お金なく造幣局でも勤めよか

風だけが吹いてる過疎の無人駅
大掃除出て来た明治の通い帳

寄り合っておしゃべり上手な村雀

岡山県 後安 江山

澄んだ目を信じて孫の言い分を
心和む人と逢いたし秋の彩

安楽死年金の話茶飲み友

通い馴れた道にもあった落し穴
知らぬ振りしてるが母の眼はたしか

報われていると気づかぬのも不幸
主人より大事にされて居るベット

冷房がきいて古傷うずき出し
生きるためやむなくしつぱ振っている

労れば妻との距離が近くなり
白々しい顔で夫婦の仲直り

降り立って金沢駅の暑いこと
時計屋に狂った時計がかけてある

怒る泣くそんな昔に帰りたい
夫を恋う夜はデイスコの渦に溶け

姑の足に合わせる寺詣り
答えてはくれぬ仏間に知恵を借る

書いて消し捨てる句ばかり夜半過ぎ
晩学の机の下の蚊やり香

面とれば笑顔の優しい汗の顔

静岡市 増田 扶美

岡山県 土居 ひでの
メルヘンの郷里へ集まるおもちゃ博

山ほどの障害かかえた出会いです
西高東低明日は何やら荒れ模様

寝屋川市 河合 時 弘

ルビー婚飽きも乾きもせず夫婦
紋入りの袷紗も秋は忙しすぎ
赤い灯のむかし美人座あつたとこ

砂川市 大橋 政 良

新しい支えをさがす豆のつる
傘立てにぼかんとしたる傘になる
人蔘に騙され終着駅に着く

鳥取市 森山 豊 子

風鈴に風のありかを聞いてみる
ライバルの背がまぶしくて近寄れず
頂点に立つ夢だけは持っている

岡山県 牧野 秀 香

羅漢さん宿の浴衣で並ぶ膳
夕立ちが庭の樹木に行水を

寝屋川市 井上 すみれ

地米地酒ご自慢聞いて嫁の郷
神妙にこけしが愚痴を聞いてくれ
ひと言を聞き流してから胃に溜る

静岡市 西村 千代

表札を亡夫外せと言うかしら
雑念の心を捨てて句に生きる
クラス会恩師小さくなり給う

兵庫県 奥野 テル

灰になるまで母は捨てない子守唄
小利口な女の素顔光ってる
夏バテに食欲そそる茄子の彩

八尾市 片上 英一

須磨明石エサアリマスの文字が見え
補欠でもチャンスは急に置き薬
深夜勤どこかに電話するナース

堺市 船越 重子

蟬の声木にしがみつき夏惜しむ
瀬戸内に墨絵のようにうかぶ島
鳥羽湾の真珠の筏かこむ島

流山市 神田 治

自転車が曲るおとこの更年期
父の背を見ると男が小さくなる
運賃が含まれているロバのパン

静岡市 三浦 つね

おさがりの自転車私の味方です
すばらしい計画でした夢だった
雷に急き立てられるお客様

羽曳野市 芦田 絢子
騒音三日家が一軒消えました

自己主張しすぎて困る網タイツ
星座表口説いてくれる人がある

鳥取県 石尾 かつ乃

童謡が聞えて来そう陽が沈む
足の向くままに旅して風に乗る
誘われたあの日の午後の向い風

大阪府 川原 章 久

浪花節唸り豆挽く父の朝

母の手の文字薄れたる衣裳函

寝て起きて美味かったと掌を合わす

弘前市 肥後 和香子

何歳になっても欲しい赤いくつ

黙秘権じつとがまんの鏡です

曲線のすすきに今宵負けました

新潟県 高野 不二

一億円使うに知恵をためされる

年金の暮しに雨が落ちつける

美人ではないから話しかけて見る

旭川市 朝倉 大 柏

許すよりほかなし闇が深くなる

かくすから大げさになる癌告知

図に乗った足に初心が置き去りに

岡山市 中嶋 千恵子

捨てかねてそつとしのばす小引出し

年金の枠で拾った良い話

傷口をいたわり合うて共白髪

鳥取市 武田 帆 雀

掴みどころない男だが義理堅い

保険屋とねばり合戦しています

暴れ球投げては妻へ借りを積む

河内長野市 大西 文 次

なりたいと思う一つにチンドン屋

仏より手数のかかる生仏

貧乏を承知であんとこへ来た

羽曳野市 麻野 幽 玄

日帰りの地に住み疎遠の奈良京都

気配りは嫁の肩持つ母となり

淋しかったかと孫旅から帰って来

島根県 福岡 博 利

初生りのキューイ気になる風が吹き

病院のベッドで酒を恋しがり

帰省客送って妻もさびしがり

唐津市 野田 旭 恒

吉野ヶ里楼門睨む兵馬俑

青田刈稔りの果ての夢を追う

秋雨に冷えを覚えて障子張る

豊中市 三宅 つえ子

病んでから凭れる椅子を探している

仲直りのきざしが見える長電話

一流を好む娘を持つ自慢

豊中市 滝北博史

よその子の手をひいていた菊人形

歯車がかみ合わぬまままだ夫婦

留守番が好きな夫がビデオ買う

唐津市 福島紀一

ほおずきも色づき熟れてお年頃

夏帽子噂の人が浜に佇ち

夾竹桃あの日の夏を忘れない

佐賀市 古川一徳

風呂の水ちよろちよろケチる姑の知恵

神様も過ぎた望みと思う絵馬

利己主義がボタンの穴を掛け違え

吹田市 西岡豊

誉めおうて励ましおうて花が咲く

年寄りが楽しかったという講話

見え見えのしつぺ返しがやってくる

泉南市 坂根流水

あと五分ふんばることのむずかしさ

ふんざりがつかずだからなら悪いくせ

ぶつぶつとぼやいて猫の頭なで

岡山県 後安ふさえ

飽食の猫はねずみをふりむかず

無人駅ポツンと降りたは私だけ

親切な言葉の裏にある野心

島根県 加本義良

誰にでも挨拶したい歳になり
消費税どう変ろうとコップ酒
価値観の違い耐える子耐えない子

熊本県 増田一乗

ネットレス海水浴にもお供する

泳ぎの子貝拾ったと預けに来

ボイジャーもわが行く末に似てあわれ

奈良市 井上大

古里でまずなつかしく蚊に食われ

サミットで作り笑いをして別れ

宿題に親の学力思い知り

静岡市 久保きぬ

出不精な妻にさそいの通知来る

たとえばの意見での突いてくる

外見のよさに騙され大誤算

宇部市 中村三良

幸せ過ぎて神や仏に御無沙汰し

遠花火人の噂は直ぐ忘れ

ええ恰好ばかりして来た空手形

静岡市 青柳金吾

悪口を三猿にして丸く住み

雑念が消えると眠くなる坐禅

見送りへ無情に響く発車ベル

米子市 小西五十鈴

流行の先取りをした靴を買う

姿見にはみ出しそうな晴れ着る

静岡市 大石たき

悪口は私の耳でとめておく
毎日を楽しく趣味に生かされる

鳥取県 伊吹富恵

三りんぼう雑巾固くかたく絞る
ああでもないこうでもない種を蒔く

大阪府 乾哲静

バイトの子優等生で夏終る
バイトした孫の貯金に足してやり

鳥取市 池本山人

山寺の鐘が平和を告げている
自己主張つらぬくペンへ風当り

大阪府 榎本落児

いくさ好き水鉄砲で戦う気
漁師町水の旗がゆれている

田辺市 染道佳明

少し楽になった九月の冷蔵庫
鍵かかる大きな部屋が希望とか

鳥取県 中瀬さつき

憂愁をかきたてるよな長雨よ
赤とんぼまた逢いました秋の陽に

岡山県 江口有一朗

病窓に郷愁映す街灯り
人間味小さな口からこぼれ出し

富田林市 大澤三四子

森林を抜けて心が広くなり
花の精甘いムードで虫を呼び

鳥取市 前田一枝

週刊誌あらをさがして派手に書き
回り椅子くるりとまわり生き残り

静岡市 山中竹野

小説になる程自画像うきさずみ
湧き水のふんだんにある里の幸

河内長野市 岡崎実

芸に生き芸を育てる座りだこ
鏡台の前に座れば心晴れ

富田林市 楠美子

汗だくでくるくる動く母でした
阿波おどりうちわ背中でおどってる

堺市 宮本かりん

古い縁か我が家と同じ紋どころ
真珠婚時計も齢をとりました

藤井寺市 中島志洋

ライバルに同情される不甲斐なさ
禁酒した友と出会った縄のれん

鳴門市 八木芳水

よく弾む毬が時々駄々をこね
その時の覚悟も出来て逢うときめ

雨蛙じつくり覗く窓ガラス
独り言誰も聞く人いないのに

唐津市

山口 ふさ子

貧乏にこの世の地獄見て暮らす
大阪市 山北 三三三

両隣それぞれ違う二時を打つ

青森県

荒田 つる

度忘れを機転でつなぐ名司会
でこぼこの道で絵になる紺がすり

出雲市

伊藤 寿美

訓導の辞令見つけた亡母の文箱
喧嘩な都会で虫の音を探す

静岡市

片平 静代

古手紙愛だ恋だと捨てられぬ
恋をして女鏡へ忙しい

唐津市

入江 喜久夫

死亡欄俺とおんなじ年なのに
モナリザの微笑み妻にちと欲しい

樫原市

西本 保夫

年金の暮しネクタイに御無沙汰す
空想の旅へも妻がついてくる

堺市

井上 たかし

叱られる度に心はユーターン
サーピスの紅葉浮べた露天風呂

大阪市

尾崎 黄紅

髭つけていて冗談が過ぎるなり
逆転は小耳にはさんだ話から

米子市

大田 みさと

亡父の部屋何年たっても温かい
喉仏納めた山に逢いにゆく

米子市

小塩 智加恵

喉元をあたるカミソリ不安抱く
いい夢の続きを見たい夜を待つ

伊丹市

猪原 石莊

基礎だけで風呂場の位置をうなずかせ
孫が来て泊る小さなバジヤマ着て

鳥取市

萩原 美雪

手をつなぐ場所もプランに入れデート
停電になればごはんの炊けぬ妻

泉佐野市

真崎 浪速子

かちかちで鮪港のセリに寝る
背かれて男が見せる人間味

川西市

田中 喜俊

不器用と宣伝したのでらくになり
新聞の見出しだけ読む米寿母

島根県

今川 三津江

灯台へ手を振ってゆく遊覧船
秋雨へせかれるように種子をまく

静岡市

大村 正雄

フルムーン カメラが綴る旅日記

太鼓の音踊る阿呆になりに行く

静岡市 浅子 まつゑ

連休によく降る雨で骨休み

緑蔭に全身あずけ立話

寢屋川市 豊福路子

鬼退治にんげんさまは苦労だね

いつからか年寄りだと思っている

神戸市 岩田信義

握手する手がポケットから出て来ない

注ぎに来た男の魂胆考える

神戸市 木村貴代子

首にした部下に老骨拾われる

首切りの役目をおえて退職す

枚方市 山崎彩子

弟妹が一度に叛き暑い夏

寅さんの映画にウイーンをなつかしむ

広島市 中村要

美辞麗句並べたわりにはそっけない

脳の皺のばした分を顔に寄せ

兵庫県 倉垣恵美

良い患者良い医者さまを育ててる

裏路を選んでほっとした小犬

島根県 岩田三和

鳥ガラをとろ火で煮込む病みあがり

ローソクの文化は夜の美を照らす

島根県 松本聖子

財テクは私の前を通り抜け

コスモスが西日に映えている愁い

豊中市 小林一夫

灯に集うそれも夜に舞う蛾となりて

善人と悪人だけが住む絵本

岡山市 平田たけよ

置きぐすり孫の数だけ置いてゆき

諸行無常農器具いつか風化する

藤井寺市 武部敦子

コーラスが好きな我が家の蟬しぐれ

デザートにメロンが光る旅の宿

泉佐野市 大工静子

海越えて届きし便り皆元気

冷蔵庫掃除しておく嫁の留守

和歌山県 岩崎瑞穂

同窓会忘れた顔も二三あり

どことなく育ち思わす身のこなし

川西市 西脇富美

野仏へ何をささやく秋桜

本堂の柱が疎開の児を恋うる

鳥取市 松本伊都子

ライバルに勝ると茶柱二つ立ち

足元を掘れと遺跡の声がする

大阪市 清水絹子

行くわよと赤ヘル バイク妻六十

主婦專業退職金はないらしい

嫁ぐ娘に荷より大きい父母の愛

老妻がいばり出したよ均等法

高知市 山崎一求

茨木市 藤井正雄

進めない信号 工事また工事
中年の魅力はあるが金がない

米子市 服部朗子

日曜日百舌鳥がテラスに来てお辞儀
きっかけを作ってくれて仲直り

青森県 波 ただお

台所お祓いうけて気も新た
珍客を老母もよろこぶ初彼岸

青森県 木村喜峰

過疎の村歴史背負って石地藏

ススキの穂月の汚れを掃いてくれ

台風を止めもせず原発さわぎ

廊下にも信号のある幼稚園

寝屋川市 北岡波留吉

通る道萩がおじぎをしてくれる

島根県 兒玉幸子

お見合にはらはらさせた娘の素振り
紅をひく指がふるえる嫁ぐ朝

富田林市 山原昭水

ひな段のような稲田の黄金色

芦屋市 根来敬

牛を見に電車に乗って孫と行く

亡父の形見恩賜の時計止まってる

住所まで言わねばならぬ義理はない

借りろ借りろあれやこれやのローンある

伸び悩む漁業未練の船たたむ

鳥取県 前田嘉津江

勇氣出そ老人大学遅くない

大阪府 平山登代

吊り橋を渡るスリルに足も酔う

鳥取市 美田旋風

親の家より子の方先に便利にし

富田林市 浦田トシエ

ありがたいお経テープで間に合わせ

防災日火事で訓練そっちのけ

スモッグに月がかすんだ窓明り

孫入院鶴の折り方教えられ

手のとどく路地一つ風呂と台所

八尾市 向井しづ子

秋の味覚きらきら光るさんまかな

富田林市 加藤ミツエ

西瓜食むすだれに夕立さわがしく

豊中市 みきわきみ

独り居になりて笑いが遠くなる

姫路市

谷

清柳

風向きによつて仮面を付け替える

来るものと信じて待つた花時計

松江市

原

長三

足なえて年金少しずつ溜り

まだ若い負けてたまるか熱帯夜

鳥根県

梅

木

梅園

孫や子の夢へ柿の木みかんの木

十一月農家閑なし冬支度

東大阪市

大

平

太一郎

らしく生きらしく育てと宮まいり

過疎の里慣れた頃には孫ら去り

静岡市

丹

羽

定次

ねだりもの孫の返事の元気良さ

冴えぬ日はそれからそれとくりかえし

和歌山県

西

口

忠雄

婚礼で負けたが子供で引き離し

空席を探す目付きに立たされる

鳥取県

久

野

野草

海に出て心の狭さ恥じて来た

見栄をはるピアノの音が耳につく

岡山市

河

野

青銅

バーゲンで来年の夏買わされる

赤ん坊肩の高さで喜々とする

ホイジャー2号

大阪市 平井露芳

涯のない宇宙へ終りのない旅路

世界中鯨で埋まる夢を見た

堺市 近藤豊子

保育園ひとりが泣けば皆が泣き

社会面「十三日の金曜日」

鳥取県 幸家單車

ゆたかさの中で人情やせている

ペテランを抜いて重たい石を抱く

鳥取県 鈴木芙蓉

秋風が騒いで虫をだまらせる

投げ捨てた西瓜の種はチャンと生え

鳥取市 中居武士

人生は逆転劇のドラマです

高槻市 代田風樹

休暇去り川の子供のかけ消える

告

急

このたび高野山に建立した「川柳塔」の開眼法要を
11月12日(日)に行いますので、参列希望者は川柳塔
社事務所へご連絡ください。電話は土・日曜、祝日を
除く午前10時から午後4時までにお願ひします。
なお、開式は午前11時40分の子定で、当日の参加費
は昼食・記念品代を含めて二〇〇〇円です。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

阿萬萬的

川柳は生活の中から生れるもので、創作ではないと言るのが私の信条なのです。夫婦の間にも、いろいろの事がありましようが、あとから考えてみれば微笑ましいものです。

女房の何と不思議な記憶力

奥谷弘朗

ほどほどの妥協で夫婦独楽まわる

小西雄々

漫談のように眨して老夫婦

小林妻子

これらの句に、私はほのぼのとした夫婦の愛を感じました。

指先が不満知ってる動きよう

堀江芳子

目の悪いご主人が何か言いたそうにしておられる。それを感じ取って芳子さんが句にされたのでしよう。私にはよくわかります。

湯上りの息子へ母の眼が惑い

榎谷寿馬

外孫が大人になって他人めき

丁坪 サワ子

子供や孫が成長して、目を見張るものを感じたり、他人行儀にされると、一沫の淋しさを感じるのも……私も齢ですかねえ。

振りむかぬ女を強いと思わない

結城君子

どこかの党主へのあてこすりですかねえ。脇役をきつちり果すかすみ草

辻川慶子

活けられた花もそうですが、このかすみ草のような女に、私も本当の愛を感じました。

気の置けぬ友も私もうどん好き

本間満津子

さらりと言つて味のある句ですね。大阪人の「けつねうろん」の味ですかね。

こと勿れ主義が善人面をする

山田高夫

世の中そんなものですかねえ。しかし裏を返せば、味気ないくらしなのですがねえ。

掃除機に吸わす愚痴ならあり余り

中川滋雀

掃除機に吸わす愚痴 世の中にももつともっと大きく清掃車で運んでもらいたいほど、たまつていませんか。

思想無い小石の角が丸くなり

松下たつみ

何かに振り回されていたある時期の労働者の姿を見ような気がしました。

耳打ちをされて味方と思いこむ

藤解静風

耳打ちされる世間話には、必ずと言ってよほど裏があるものです。ご用心ご用心。駄菓子屋に私の過去が売つてある

波多野五葉庵

NHKのドンドンズームインじゃないですが、懐かしいですね。

コーヒーが駄目とは手間な方がいる

横田英詩

そんな人は必ずと言っていいほどいるものです。句会のことなど、喫茶店にはいった数人づれの中にも。

手術あとすぐ見せたがり退院す

丸山よし津

いるいる、そんな人が。退院したあとで、お酒が少しはいると必ずといっていいほど、胃を半分以上取つてね……などと言いながら。蠅叩き無用となつて呆けてくる

坂口公子

この頃は蠅叩きを使う家庭が少なくなり、すぐにアースをシューで、やれ打つな蠅が手をする足をする。などの風情がすつかりと。

あの頃はひと息で風船ふくらんだ

谷垣史好

齢をとることは、淋しいことですね。

車地獄手品のように今日も無事

花田たけ志

毎日毎日、交通事故が報道されています。

愛染帖

橘高薫風選

膝つこと茶先に和む雨続き

高槻市 河瀬芳子

ルビコン河を渡る橋りはその後
背筋シャンと延びる魔法のイヤリング

海南市 三宅保州

行く先を告げて家出を試みたく
胴体着陸するかも知れぬ妻よよよ

米子市 金山夕子

火を消してしばらく眠る火の女
誘惑に耳を貸さない金魚たち

竹原市 信本博子

難民の平和に遠いあばら骨
公園の鳩株式市況聞かされる

伊丹市 猪原石莊

満足という字体重計が指し
向日葵はがっくり何を恥じている

河内長野市 岡崎実

座ぶとんに座って母の愚痴をきく
六法に埋もれ冷たい顔並ぶ

守口市 森川まさお

好物がお仏壇に入らない
倚りかかる孫肉親の重みあり

藤井寺市 福元稔

献金に消費税などどうだろう
祝盃の上げ方で知る妬みよつ

米子市 青戸田鶴

浮草もそろそろ岸辺恋しがる
凧いでいる海をもの足りなく思つ

兵庫県 遠山可住

五十年振りと他人ですすれ違つ
危ない橋を渡る男の顔になる

羽曳野市 麻野幽玄

老いにまだときめきがある美酒珍珠
老兵の過去は平和へ入れる票

広島市 名和喜一郎

穴うめの程度の役で呼び出され
あのひとに負けないだけの紅をひく

米子市 八木千代

思い出のありすぎるのも刑のうち
むかしなら僕も義賊になつていた

平田市 久家代仕男

夫婦して帽子の似合う年齢になり
遠花火見るべきものは見たよつな

和歌山市 福本英子

正面の風には強い僕の旗
誉められて豚もわたしも木に登る

鳥取県 西浦小鹿

デパートの食堂で知るリアリズム
柱時計の音も秋思を刻むなり

和歌山市 西山幸

風の繰る頁に明日の絵がのぞく
小さい小さいつづらだ君を待っている

名古屋市 藤井高子

再会はさくららの花の咲く頃に
琴線に触れることばは切り詰めて

和歌山市 山中輝子

和歌山市 田中輝子

鳥取県 江原とみお

和歌山市 後藤正子

凜凜といのちに届く秋の鐘
強くゆすつて秋をてのひらに受ける

兵庫県 倉垣恵美

欲のない花咲じじいで暮されず
つま先とかかとはいつもさからわず

米子市 林荒介

ちちの言葉が残る竹の切り口
鳩尾に時計があつて狂えない

青森市 工藤甲吉

実篤の絵のよつに在る南瓜かな
財布にもある高気圧低気圧

島根県 小砂白汀

コスモスのはりつく天を秋という
耳鳴りはわだつみからのシグナルか

枚方市 山崎彩子

新子還暦比べてみても詮もなし
もつ逢わぬ人に電話はやさしくし

島根県 堀江正朗

失明してもメクラになりきれぬ

そして秋ユーモレスクを聞いている

弘前市

波多野

栗原隆さんを悼む 豊中市

田中正坊

神さまとおぼしき人とすれ違つ 豊中市

江口明光

葛藤を見せぬ晴着の妻と嫁 茨木市

堀

良江

娘待つ西方浄土へ向かう旅 寝屋川市

豊福路子

難民は我が家にも居る粗大ゴミ 今治市

越智一水

誰よりも水玉似合う婚約者 岡山県

千原理瑛

しあわせも涙も雲に載っている 和泉市

西岡洛醉

JR儲けて駅の草のはび 町田市

竹内紫鏡

紙鉄砲ぼんと昔の音がする 有田市

松井かなめ

秋深し五十路も深し旅続く 宇部市

中村三良

挿絵展名著のサワリひろげたり 大田市

尾崎黄紅

微落し一発夫婦喧嘩してみよか 宝塚市

丸山よし津

この世の誓いもうつ終りそう妻よ寝る 岡山県

江口有一朗

また逢えるかな老いた背を見送りぬ 堺市

神原文

西日射す廊下の隅で癌告知 和歌山市

堀畑靖子

遊び心四分の老いの日日楽し 今治市

月原宵明

くら暗にやっぱり眼鏡探して 廿日市市

森川抜智

老廃物自浄できない洗面器 和歌山市

木本朱夏

チチ口啼く過ぎた昔は還らない 黒石市

相馬一花

死ぬ時期が来れば死ぬのどのんびりと 岡山県

小林妻子

一期一会の雑炊うまき縁かな 尼崎市

春城 武庫坊

山門の絵に手を合わせ老いたかな 大和市

兼松宏安

年金で回る車はしれたこと 大田市

西森花村

人は人鳥は鳥呼び花野行く 砂川市

大橋 政良

同権を六十路も終りにつめ寄せられ 豊中市

みき わきみ

ありがとっ人に言いたい仏さん 川西市

松本ただし

花束に造花がまぎれ込んでいる 松原市

小池 しげお

何やらん拝眉の上とかまえられ 高屋市

根来 敬

片手だけ挙げる挨拶だつてある 八尾市

高橋夕花

乾杯のグラスからちりと火を点ける 唐津市

久保 正敏

手紙の中の雨が止まなままに秋 和歌山市

神平 狂虎

高層マンション仰ぐわたしは蟻なのか 唐津市

野田 旭恒

人買いの旅券に一家支えられ 大阪市

榎本 露児

花菖蒲添うっているのに妻でなし 富田林市

片岡 智恵子

案山子にも口紅つけた卑弥呼張り 西宮市

奥田 みつ子

近頃の虹には黒い色まじる 唐津市

浜本 ちよ

初対面目で風袋がはかられる 羽咋市

三宅 ろ亭

頃合いを考え掃除する書齋 唐津市

田口 虹汀

発展途上の子に来てくれた可愛い嫁 奈良市

井上 大

クリスタル古い話は知らず牙え 豊中市

辻川 慶子

不発弾抱いて楽しい老夫婦 唐津市

田口 虹汀

消費税になかった女性心理学 島根県

堀江 芳子

悟ったわけでないが涼しいうけこたえ 鳥取県

新家 完司

近道がいつか茨の道になり 唐津市

山口 ふさ子

誰も来ぬ日は郵便も来ない日か

堀江 芳子

鳥取県

新家 完司

唐津市

山口 ふさ子

唐津市

山口 高明

お礼状内と小さく女文字

神戸市

岩田 信義

鳴門市 八木 芳水

河内長野市

植村 喜代

単身赴任妻は電話にいつも出る

唐津市

福島 紀一

ネオンネオン裏切られても綺麗です

唐津市

瑞枝

歩き方まで担任に似るこわさ

米子市

林

岸和田市 原 さよ子

米子市

林

堺市 井上 たかし

唐津市

瑞枝

うとまき目覚め定期定年後

唐津市

瑞枝

御先祖の家訓きびしい父の咳

唐津市

瑞枝

有田市 生馬 美美子

唐津市

瑞枝

秋の風明日の我が身に置き換える

唐津市

瑞枝

吹田市 廣屋 利通

唐津市

瑞枝

冷房もビールも頼む風呂場から

唐津市

瑞枝

米子市 藤井 正雄

唐津市

瑞枝

対岸の絵がきらきらと光ってる

唐津市

瑞枝

無精髭こころ貧しくなつてゆく

唐津市

瑞枝

名古屋市 越村 桔梢

唐津市

瑞枝

パントマイムそれで通じる独りきり

唐津市

瑞枝

和歌山市 古久保 和子

唐津市

瑞枝

扇風機寄せ場の様な吹きだまり

唐津市

瑞枝

水羊羹おあい方が口口に合い

唐津市

瑞枝

羽曳野市 田中 隆二

唐津市

瑞枝

昨日とはちがう顔して逢いに行く

唐津市

瑞枝

朝霧が晴れりんどうの貞女ぶり

唐津市

瑞枝

切なげに遠くで電話なりつづけ

唐津市

瑞枝

政界を大きく変えて秋立ちぬ

唐津市

瑞枝

料理下手でもマニキュアは注ぎ上手

唐津市

瑞枝

デリカシーいっとき忘れた夏よ

唐津市

瑞枝

笑面市 椎江 清芳

唐津市

瑞枝

夢あまた抱いてわたしの小宇宙

唐津市

瑞枝

約束が果せなかつた花手桶

唐津市

瑞枝

晴れ衣裳精いっぱいの晴れ舞台

唐津市

瑞枝

涙せぬ女に目立つ泣きばくろ

唐津市

瑞枝

通夜の席まあ飲めと仏出てきそつ

唐津市

瑞枝

選良とや政治三流GNP

唐津市

瑞枝

名ばかりの庭名月に捨てがたし

唐津市

瑞枝

投句先 川柳塔社事務所へお送りください。

NHK川柳募集

課題「家族」選者 森中恵美子

締切 11月10日 (ハガキに3句以内)

投句先 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
ラジオセンター 川柳係

発表 11月26日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

羽曳野市 吉川 寿美

出雲市 園山 多賀子

吹田市 西岡 豊

富田林市 林 澄子

奈良市 米田 恭昌

西宮市 瀬尾 六郎太

京都市 木村 良三

投句先 川柳塔社事務所へお送りください。
(ハガキに3句連記)

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

奥田 みつ子

夢の中の事だまさか気付くまい

大川 幸子

そうです。まさか気付かないでしょうけれど、夢を見るのは潜在意識が働いたからでしょうし、それは以心伝心でいつか気付かれるかも知れません。ご用心、ご用心ノ九・三・五の力強いリズムに惹かれました。『いつか又夢の世界で逢いませう。沢田さん』と軽く詠んでいるのも楽しいです。

あなたの火消してマツ子を擦る女

池 森子

女の人に時々見られます。愛情の押しつけなのか、自分がつけた火でないと気がすまないものなのでしょう。

書き遣すことなしまだまだ元気です

高杉 千歩

いつまでも元気でありたいものです。たとえ、五分前のあなたを探す都市砂漠の中でも生きていくかぎり、出来る時に出来る事を

して、その日、その時を精一杯生きたいと思います。九・四・五と軽快なリズムです。

蹴ちらした石がおでこへ飛んで来る

藤井 高子

確かに近づき過ぎると醜い面も見え、つい腹立たしさに石を蹴ると、また、自分に返って痛い思いをすることになり、世の中、本當に思うようになりません。

絵にしたい花とおしやべりしています

山崎 君子

花とおしやべりする君子さんのやさしい顔が目につかびます。花とおしやべりしているところを絵にしたいようです。

女だけ攻めたてに来るしがらみよ

野村 京子

男の人にもしがらみはあるのでしょうか、どうも攻めたてられているのは、女の人だけのような気がします。

大空の碧を沈めて湖黙す(十和田湖で)

秋元 てる

一読して路郎先生の句を思い出します。格調の高さに打たれました。

美女になる秘訣を俺に聞きにくる

カネのなる木を裏庭に接ぎ木する

鶴久 百万両

これはまた、なんと楽しいことでしょう。「名は体を表す」とか、きつと百万両というお名前どおりの方なのでしょう。

雲海で昼寝出来たらすてきたな

沢田 きん

寝てみたいコーヒーゼリーの真ん中で

木下 道子

全く同感ですノただ、コーヒーゼリーの真ん中では一寸甘すぎますね。

糠にきぎ覚悟で打った釘が効き

山口 三千子

たとえ、糠にきぎの状態でも精魂こめた一打ちなら、ガッチリ止まってくれるものなのでしょう。なせば成ると言うところ…。

マンシヨンにクロスワードの灯がともり

佐野 六浦

マンシヨンが増えて無口になった町

小林 英子

クロスワードの灯とは、実にユニークな表現です。マンシヨンにはマンシヨンの交流も情けもあるのですが、地元の人たちにとって、は冷たく感じられる事もあるのでしょうか。

盲導犬に会うと涙が出て困る

亀井 円女

一円に罪はないけど腹が立ち

野村 静雄

蟬しぐれ止むと風にも音が有り

近藤 豊子

花の名を思い出せないだけのこと

小林 一夫

いい話らしい座布団深く当て

西脇 富美

首香のむ

小出智子選

満月をひとり見るのは寂しいね

堺市 小西 小雪

古ぼけた帽子を父は放さない

和歌山市 西山 幸

むなしさが溜まりポケット重くなる

大阪市 神夏磯典子

地虫鳴く 傷をひりひり疼かせて

大阪市 高田美代子

出迎えが兄嫁なのではっとする

大阪府 板東 倫子

うたがえはみな医学書に当てはまり

大阪府 板東 倫子

漱石が今新しい目で読める

和歌山市 田中 輝子

求人欄読むとフアイトが湧いてくる

大阪市 田中 弘子

九月閏々ぶつちやけるほど雨が降る

兵庫県 倉垣 恵美

失うてみると大事な人でした

和歌山市 植村 喜代

口喧嘩する友達に逢いに行く

和歌山市 植村 喜代

遠い日に会ったような寂しい日

河内長野市 植村 喜代

てにをはをたがえ本音が出してしまう

大阪府 西出 楓楽

一株の萩になぐさめられている

松原市 佐藤 藤子

噛みしめる涙 ことんと卵割る

鳥根県 松本 文子

赴任地の夫の蒲団へおまじない

寝屋川市 宮崎 菜月

夫婦の視野に別れ話が見えかくれ

富田林市 池 森子

助っ人に来てくれた人よく喋る

有田市 松井かなめ

二の舞やないかと再婚あぶながり
冗談にまぎらし一矢報いとく

堺市 高橋千万里
大阪府 日阪 秋子

愉しく別れコーヒはアメリカカン

八尾市 高杉 千歩

干潮に曳きずりこまれそうになる

倉吉市 野中 御前

髪染めておんなの戯画をまだ抜けず

名古屋府 藤井 高子

赤い花咲けば浄土も楽しかる

鳥取市 森山 豊子

こだわりのわが脳天で雉子が啼く

米子市 林 瑞枝

会って別れて今日もとんびが舞っている

岡山県 松本 元江

町並が変わり人情渴いていく

静岡市 小本 久子

継ぎ足して縄継ぎ足して戒める

和歌山市 後藤 正子

水の重さを抱いている母という名で

堺市 板野 美子

遺産分けガラスの破れる音がする

和歌山市 細川 幸代

男でも女でもなく好きになる

堺市 山本 半銭

うれしさに奮発をする秋の服

和歌山市 森 茜

ゆつたりと姑と呼ばれる帯の位置

羽曳野市 吉川 寿美

駅で買う赤福餅が落ちつかぬ

大阪府 津守 柳伸

善人に待つ潮時と言うがない

大阪府 上江洲勝子

まだ母が生きて夜の爪切らず

米子市 茂理 高代

秋日傘辛い話を姉とする

八尾市 高橋 夕花

水たまり越えると妻は強くなる

米子市 金山 夕子

小さいが金の成る木を買って置く

堺市 三浦 和子

この夏は結構なこと旅二つ

枚方市 森本 節子

豆の蔓ぐんぐん伸びて童話めく

岡山県 千原 理瑛

嫁の来る日は落ち着いた服を着る

寝屋川市 稲葉 冬葉

クーラーが利いているから話しましょ

田辺市 染道 佳明

座りだこ女を意識した日から
 農政に反感をもつ祖父の汗
 毎日がスリル太郎のいい寝顔
 避暑地のホテルこんな暮しもあるらしい
 冴えわたる月に反省しています
 夢ひとつ叶い涙が溢れでる
 ときどきは悪妻になり息を抜く
 おばはんと呼ばれ頼りにされている
 秋の風平常心を取り戻す
 つつかい棒あるから今日も生きられる
 フアツションショー帰りはトラックコーヒで
 旗竿の重さ口外せぬことだ
 畳替え十年先など考えぬ
 一日のバイオリズムよ正確に
 一本道いつか彼岸にたどりつく
 又カ漬けの壺は家風を知っている
 煩惱が照らされている夕月に
 時々はお母に味方の置きぐすり
 毛虫にも蝶々になる夢がある
 今時の姑という難しさ
 仏の水替えて一日つつがなし
 よいことは耳のむこうですぐ消える
 風に泣き花に和んできた命
 誰彼も許してしまふ自動ドア
 進級をするかのように度が進む

鳥取県 西原 艶子
 岡山県 丸山 光子
 米子市 新 正子
 大阪市 島村美津子
 和歌山市 山川 克子
 鳥取市 松本伊都子
 和歌山市 山口三千子
 尼崎市 春城 年代
 大阪市 堀 いくの
 姫路市 中塚 遊峰
 弘前市 肥後和香子
 和歌山市 桜井 千秀
 大阪市 鈴木 節子
 吹田市 茂見よ志子
 米子市 青戸 田鶴
 米子市 石垣 花子
 岡山県 福原 悦子
 米子市 光井 玲子
 鳥取市 前田 一枝
 寝屋川市 岸野あやめ
 西宮市 西口いわゑ
 八尾市 宮西 弥生
 和歌山市 内芝登志代
 高槻市 河瀬 芳子
 米子市 小塩智加恵

ハイハイハイお母は仏に近い顔
 胡麻打ちの老婆の唄に聞き惚れる
 呼吸していますルールに縛られて
 おしゃべりが何より下手な母に似る
 軽いドアたくさん友達持っている
 そして朝祭りの金魚浮いていた
 まともには読めないものを注文し
 ニッコリとサンマを買って道急ぐ
 しつかりと玄関閉めて老い一人
 一粒の朝顔紅く咲き続け
 雷が去ってひろうす炊き上り
 飛行雲悲しい過去が甦る
 たまに翔んだわたしにあった水たまり
 釣書へも添えたい自慢二つ三つ

堺市 宮本かりん
 静岡市 増田 ふみ
 和歌山市 堀畑 靖子
 吹田市 園田 文子
 大阪市 本間満津子
 竹原市 信本 博子
 吹田市 栗谷 春子
 岡山県 富坂 志重
 大阪市 稲本 凡子
 宝塚市 丸山よし津
 八尾市 向井しづ子
 兵庫県 東浦 砥代
 岡山市 川端 柳子
 湯浅 由梨

ゴシックの順に。ありのままの心を素直に詠ってあります。心が通い合った人としみじみと眺めたいのが秋の月でしょう。二句目。医学書を開いてみるとほんとに思い当ることはかり、納得するどころか却って不安になってしまいます。誰にも経験のあることと共鳴する句です。三句目。若い頃夏目漱石の作品はよく読んだものです。だが中年を過ぎて読むと、若い頃とはまた違った感慨があるもので「新しい目で読む」に領いてしまいます。四句目。口喧嘩の出来る程の友達とは、ほんとうの友達と言えるでしょう。

投句先 千 683 米子市花園町14

八木 千代(ハガキに3句)

糸

桜井千秀選

糸車回し続けて母は老い
糸の端持って苦しむことばかり
逢う度に二人に絡む赤い糸
いい噂ききたく繋ぐ糸電話
釣糸を垂れて行く末老える
もつれ糸解く指先に愛が棲む
つつましく女の生きるしつけ糸
糸の目の不揃い過去の物語
腹立った事は言わない糸電話
赤い糸辿れば夜叉にめぐりあう
一步退く勇気があれば解けた糸
淋しさを救うてくれた毛糸玉
お祭りを糸口にしたUターン
結び目が三つわたしの赤い糸
切れそうな糸を繋いで子が育ち
針山に祖母が生きてる木綿糸
とてもドライに絆を切った糸切り歯
釣糸に別の思案も垂れている
しつけ糸姫は三歳にて候
解決の糸口酒でほぐれかけ
古傷を埋める女の糸切り歯
ほおずきを繋ぐ糸です赤にする

糸トンボ母はこの世の人でなし
錆びついた針が有める木綿糸
糸口をたぐれば幕が開きそう
赤い糸さがしています花言葉
自慢にもならない過去が糸巻きに
折り返し点でぶつくり糸を切る
祖母の香と温みの残る糸車
操りの糸に命を吹きこまれ
壊れゆく自然を嘆く糸トンボ
墨壺の糸は不正を許さない
蜘蛛の糸たぐれば仏の灯に出合う
糸切つて尻も漫步をしてみたい
針を持つ母の確かな糸切り歯
子に繋ぐ糸はしっかりと結んどく
マリオネットの糸は自由を許されぬ

幸子 風云児 柳子 佳雲 正子 悦子 宵明 高子 寿恵子 明水 しみよ子 文 輝子 和子 砥代 一朗 秀峰 裕美 螿 ちよ

決心のつかない糸はもつぱれる
幸せこ糸はもつれたままでいい
慢心を繕う糸を持ち歩く
糸車辿れば母の背に戻る
尻糸の長さに高い天がある
不器用な愛がはみ出るミン糸
親と子の糸はいつでも凜と張る
糸紡ぐ娘の悲話がある峠
刺繡糸秋には秋の彩を選る

保州 三五島 笑風 テル 雀踊子 可住 高明 次男 正敏 比呂志 雄々 元江 一枝 よし津 佳 人 地 天 軸 妻 子 坊

高

辻 文平選

背伸びまだ続く都会のビルラッシュ
玄関の敷居が高い千鳥足
梯子車のとどく高さに部屋を借り
物価高老いの暮しを脅かす
石段が高く信心やめにする
高くても晴の衣装はケチられぬ
天高く秤が恐いダイエツト
兄ちゃんが一番高い柱きざ
高いけど女心にあるダイヤ
偏差値の高さと運は別でしょう
高下駄はお寿司屋さんにまかせよう
気位が高く縁談まともならず
目標の高さ足元すくわれる
天高く買物籠が重くなり
にぎりめしこんな旨い高い山
灯台の高さよ高所恐怖症
天守閣の高さに負けられぬ
頂点を目指す気概をせめて買う
高すぎた代償男を棒にふる
コスモスの高さへ風の置土産
天高し花子もお嫁にいくと言う
赤トンボ空の高さへ消えてゆく

ただし 風云児 白光子 利子 佳雲 旋風 京子 狸村 美代子 亭 悠泉 露児 裕美 重人 早苗 宵明 あやめ 青銅 輝子 寿恵子 寿美

初歩教室

題 — 地味

辻 白溪子

題からのイメージで、着物の句が多いのは当然ですが、同じ着想をあえて揃えず、一句について添削をしてみました。

寡婦ぐらし地味が身につく四十年 遊峰

(地味柄が似合う寡婦にも夢がある) 章久

慶弔の派手な割には平素は地味にする 一枝

(気前よく出して平素は地味にする) 一枝

包装紙地味な中身を派手にする 一枝

(包装紙中身が地味と思えない) 美恵子

派手に咲く中の地味な娘先に売れ 美恵子

(派手好きが残って地味な娘が嫁ぐ) 芳水

好まれたら困る見合いは地味を選ぶ 芳水

(好かれたら困る見合いは地味にする) 美代子

役付きになつてネクタイ地味選ぶ 美代子

(肩書の床しきネクタイ地味にする) すみれ

洪好み女は齢を語らない すみれ

(洪好み女は齢を知らさない) とく子

娘の見合い母親らしく地味を着る とく子

(地味着ても母が引き立つ娘の見合)

地味好きの父に贈ったアロハシャツ 志華子

(地味好きの父うろたえたアロハシャツ) 秀香

地味作り気品の高い宿を取り 秀香

(通された部屋に見劣りしない地味) 隆雄

好きですと言えず映画も誘わずに 隆雄

(映画にも誘ってくれない地味な彼) 信義

鏡だけ良さ知っている地味な顔 信義

(地味な顔少しも愚痴にせぬ鏡) 遊美

地味を着て若さが映える品の良さ 遊美

(地味着ても若さが目立つ顔かたち) サワ子

家計簿に地味な暮しを記す妻 サワ子

(家計簿が地味な暮しを知っている) 一乗

地味なのを洗い好みと誉め上手 一乗

(言い方で地味を洗いと誉めている) 敬

着こなした人がゆかしい地味な帯 敬

(地味な帯結んで床しき持つ女将) 轍

地味過ぎて若者達に嫌われる 轍

(若人にまじって地味なのが目立つ) 勝美

地味を着て故人を偲ぶ通夜の席 勝美

(通夜席へ出掛ける地味な柄を撰る) 信一

消費税生活三分地味にする 信一

(消費税分だけ節約を強いられる) 太一郎

日々地味に老い美しく八十目指す 太一郎

(地味も良し八十路に夢を抱いて居る) 円女

地味だけ嫁は時々翔んでます 円女

(翔んでいる嫁にも地味な柄が合う)

昼オケの妻が地味になる夕餉 治

(昼オケに凝って食事を地味にされ) 静子

地味な妻ツアアで羽目を外して 静子

(せめてツアアだけは地味ではない身装) 保夫

消費税地味な暮しをかき回す 保夫

(消費税地味な暮しを攻めてくる) 光子

娘がくれた派手にとまどう母の地味 光子

(娘の見立て地味な母には合わぬ柄) 義

地味な娘を嫁に貰えと親は言い 義

(地味な娘をすすめる親といつも揉め) 繁男

地味ゆえに恋の進行気付かれず 繁男

(地味に付き合えて恋人気づかせず) 呼風

二十過ぎはや地味なものを選び買い 呼風

(祖母に似て二十の娘が地味を着る) 和子

孫が出来ちよつと地味めに彩を取る 和子

(孫出来てからは好んで地味を着る) 時弘

お見合いに付き添う義姉の地味な態 時弘

(地味を着て引立て役にきた見合) 艶子

地味好み恋をしたのか派手になり 艶子

(いつからか地味でなくなり恋すすむ) 志重

地味でひかえ目立派にお役出来る人 志重

(控え目の応対地味な娘が目立つ) 金吾

銀行が地味な隣に御愛想 金吾

(銀行へ地味な隣が当てにされ) 昭治

財産があるのに奥さんまるで地味 昭治

(財産とべつ奥さんの地味ぐらし)
衣食住足つても派手な事出来ず
ちず子

(衣食住足りても地味が抜けきれず)
派手もよし地味も又よし二十歳の娘
三津江

(派手なのも地味も似合つて娘は二十)
少しだけ地味にしている夫の留守
照子

(留守中を地味に過して毛糸編む)
地味はでかと鏡に語る参観日
ミツエ

(参観日地味か派手かを問う鏡)
悲しみの黒い服装に薄い紅
好笑

(うす紅が喪服の地味を引き立てる)
先生と言われ田舎で地味に生き
彩子

(先生と慕われ地味に生きた過疎)
地味な服着こなしている派手な顔
しづ子

(地味な服着ると恋人避けたがり)
名演技スターの陰で地味な役
幸枝

(脇役の地味な演技が受けている)
若いから地味な服でも良く似合い
三千子

(地味な服撰つてる若い娘にひかれ)
生真面目で地味な男を父は好き
和子

(父好み真面目で地味なだけの彼)
玄関に地味な絵をかけた待っている
小鹿

(玄関の絵で人柄の地味を知る)
地味な膳年金暮らしして息を吸い
富恵

(年金の暮しに馴れた地味な食)
若いけど後添いちょっと地味を着る
菊枝

(後添いの遠慮が好んで地味を着る)
地味な子が派手な嫁さんつれてくる
喜代子

(地味なのが集まりけなす消費税)
落選し地味な暮らしも板につき
数彦

(落選で地味な暮しへすぐ戻し)
ご出勤送るだけの地味な朝
康子

(隣への遠慮が地味に送る朝)
雨続き女子高生の地味な傘
君江

(女子生徒の傘地味なもの混じる雨)
大学の息子に母は地味にしてい
登代

(子供も大学地味しか着ない母)
地味作りおつとりしてもいい笑顔
芙美子

(上品に見せて地味柄よく笑う)
娘のコート地味でタイヤがよく光る
喜与志

(タイヤはめ地味が引き立つ娘のコート)
年金の生活地味に暮らして
圭坊

(年金でなんとか暮らせる地味な趣味)
趣味に生き暮しは地味な老い二人
美恵子

(同じ趣味夫婦は地味な暮しする)
二代目の地味を商いで蔵が建ち
治一

(二代目が地味で老舗が立ち直り)
待ち合わせの地味な衣裳に光る指輪
明吉

(どの服も地味で指輪がよく目立つ)
地味を着た母の遺影に支えられ
春枝

(地味だった母の遺影に励まされ)
地味な服参観日用と決めて買う
和香子

(参観へ丁度形見の地味が合う)
地味な部屋新婚らしく変えられる
とく子

(新婚を住ませる二階地味すぎる)
裏方の地味な汗あり晴舞台
遊峰

(裏方の地味な汗へは来ぬ拍手)
生活は地味にしてい居て火の車
信一

(地味にしていでも家計簿赤が出る)
地味のまま年金までを無事勤め
呼風

(定年を平で終った地味な夫)
嫁ぐ娘へ地味な着物も入れてやり
春風

(嫁の荷へ地味な衣裳も持たせて来)
TVではスポットあびてる地味な人
宏安

(インタビュ―地味な力士が喋らない)
地味暮し流れに添つた舟に乗り
幟

(筏流し地味な暮しに甘んじる)
今回の着想、表現が秀れている句
治

あのマニキュアから想像できぬ地味な夫
虫干の度に地味だと思つて服
ちず子

若者が地味な田舎に謀反する
地味な花つけて雑草強く生き
志華子

私の句
娘も地味に育ち縁談ない四十
照子

白漢子

題「和服」 11月15日締切(1月号発表)
宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19
ハガキに3句以内 辻 白漢子

平成元年度川柳塔社同人総会

10月1日(日) 大阪市立労働会館

平成元年度の川柳塔社同人総会は10月1日(日)午後2時から大阪市立労働会館で開かれた。西田柳宏子氏の司会で野村太茂津氏が開会の辞をのべた後、西尾菜理理事長を議長に選出して議事に入った。

はじめに高杉鬼遊會計室長が昭和63年度の損益計算書・貸借対照表を掲示して口頭で内容を説明したが、それによると今期は諸経費の増加のため、やや苦しい収支状況となったが、今年6月から実施した同人費・誌代の改定により来期は改善が予想されるものの、同人・誌友の増加によってさらに収入の増加を計りたいと提案した。

続いて、松川杜的氏が会計監査報告、辻白溪子氏が別項のとおり事業経過報告を行った後、田中正坊氏から川柳塔社同人規約一部改正案と役員改選について提案、活発な質疑応

答があつて満場の拍手で全議案を承認した。

今回の総会の出席者は例年よりやや多く、正味2時間にわたつて熱心な討議が展開されたことが特徴的で、阿萬萬的氏の閉会の辞で総会の幕を閉じた。

■事業経過報告

(事業)

63年10月・2日 同人総会(大阪市立労働会館)

63年10月・9日 唐津支部秋季大会が城内閣

で開催、お話桶高薫風、選者河内

天笑ほか参加

63年10月・16日 鹿野町みか月結成8周年記

念大会へお話高杉鬼遊、選者西田

柳宏子・塩満敏・岩本雀踊子ほか

参加

63年11月・15日~20日 心齋橋ソニータワー

ビル9階で麻生路郎生誕百年記念

川柳塔作品資料展を開催

63年11月・20日 川柳たましま創立30周年記

念大会へ選者桶高薫風ほか、一八

〇名参加

平成

1年1月・15日 新春おめでとつ会(大成閣)

1年1月・29日 はびきの市民川柳会は創立

10周年記念句会を陵南の森公民館

で開催。選者里小路・板尾岳人・

河内天笑・金井文秋・笠原吸江・

佐野白水ほか参加

1年3月・5日 黒川紫香の文化功労賞受賞

・句文集「むらさき」発刊記念川

柳大会を尼崎で開催。お話桶高薫

風、選者小出智子・野村太茂津・

西尾菜ほか参加

1年3月・16日 西尾菜の受賞祝賀会を都ホ

テルで開催

1年5月・7日 尼崎春の川柳大会へ選者黒

川紫香・小出智子ほか参加

1年5月・14日 汐風川柳社は長野文庫追悼

を兼ね第35回愛媛川柳大会を開催

一四名参加

1年5月・17日 高槻川柳サークル卯の花は

5周年記念大会を市民会館で開催。選者西尾菜・黒川紫香ほか参加。

参加者一二九名

1年5月・21日 いずも川柳会は尼緑之助一

周忌追悼川柳大会を高松公民館で

開催、お話黒川紫香、選者西尾某

橋高薫風・野村太茂津ほか参加

1年5月・28日 和歌山市制百周年川柳大会

が市役所大ホールで開催、選者野

村太茂津他参加

1年6月・11日 第13回全日本川柳大会が長

崎市日昇館ホテルで開催、川柳塔

社から多数参加

1年6月・11日 川柳塔まつえは復刊20周年

記念大会を市婦人会館で開催、お

話橋高薫風、選者西尾某ほか参加

1年7月・9日 西尾某主幹の叙勲記念川柳

大会が大坂なにわ会館で開催、選

者黒川紫香・小出智子ほか多数出

席、参加者三三七名

1年7月・9日 第四回川柳塔勉強会

道後温泉(古湧園)

1年7月・16日 高鷲車鈍氏追悼句会が寝屋

川市民会館で開催、お話橋高薫風

選者黒川紫香・大坂彤水・西田柳

宏子・高杉鬼遊・里小路他参加

1年7月・23日 第40回柳都川柳大会へ選者

西尾某参加

1年8月・13日 小出智子句集発刊記念句会

がなにわ会館で開催、選者西尾某・

金井文秋・谷垣史好ほか参加

1年8月・27日 第13回茗人忌川柳大会が鳥

取工業福祉会館で開催、お話阿萬

萬的、選者黒川紫香・野村太茂津・

辻白溪子ほか参加

1年9月・11日 西宮北口川柳会は15周年記

念川柳大会を西宮市立中央公民館

で開催、選者黒川紫香・松川杜的・

田中正坊ほか参加

その他。女性コーナー「茴香の花」担当が

八木千代から小出智子へ交替

。本社事務担当が池田寿美子から西

山幸へ交替

。編集部長が橋高薫風から阿萬萬的

へ交替

(受賞)

高橋 操子 63年度路郎賞

奥田みつ子 同 準優秀作第一席

榎本 吐来 同 準優秀作第二席

土居ひでの 63年度川柳塔賞

野村 京子 同 準優秀作第一席

児玉 歌子 同 準優秀作第二席

工藤 甲吉 63年度愛染帖賞

後藤 正子 63年度尚香の花賞

西出 楓楽 63年月間賞永久保持

赤川 菊野 63年度各地柳壇賞

保西 岳詩 兵庫県川柳協会功労賞

森下 愛論 東大阪市文化連盟から表彰

江原とみお 西日本川柳大会岡山県知事賞

林 荒介 同 久米南町商工会長賞

水粉 千翁 同 感謝状

黒川 紫香 尼崎市文化功労賞

西尾 某 63年度秋の叙勲木盃一組台付を

授与

安平次弘道

浜本 義美 第3回国民文化祭文芸部門

中原 諷人 川柳大会秀作賞

有働 芳仙

安平次弘道 第2回NHK学園 特選

羽津川公乃 川柳大会(10・30東京) 同

三宅 保 同

若宮 武雄 あおい賞

岸本 静江 川柳塔わかやま たちはな賞

田中 輝子 吟社(4賞) 葵水賞

福本 英子 課題吟賞

林 はつ絵 ふあうすと創立 秀句賞

春城武庫坊 60周年記念大会 同

川島諷云児 姫路あしなみ新天守賞特選

野村 京子 第35回愛媛川柳大会今治市長賞

〈句集発刊〉

坂本仙吉郎 『ふたり旅』

新家 完司 『平成元年』

千原 理瑛 『風ぐるま』

小出 柳子 『蔭の臺』

竹原川柳会 『合同句集』竹原 市制30周年

もくせい川柳会 『合同句集』5周年

はびきの市民川柳会 『合同句集』10周年

林野 魁光 『里の灯』

黒川 紫香 『むらさき』(句文集)

大原 葉香 『谷間のささやき』

〈物故者〉

中村 優 (63・11・23)

長野 文庫 (1・1・20)

高橋 操子 (1・1・29)

竹中 綾珠 (1・3・24)

中田 白李 (1・3・30)

土居 耕花 (1・4・2)

高鷲 亜鈍 (1・4・15)

〈新同人〉

(16名)

田中紀美代(奈良県北葛城郡) 小田川智恵子

(島根県大原郡) 藪田猿香(静岡県榛原郡)

安本孝平(静岡市) 山田妙子(大阪市) 松永

すすむ(大阪市) 吉田あずき(豊中市) 吉田

明日香(吹田市) 米田恭昌(奈良市) 神保拓

生(大阪市) 田中輝子(和歌山市) 門谷たず

子(西宮市) 小谷美つ千(鳥取市) 舟渡杏花

(富山市) 千原理瑛(岡山県英田郡) 松本元

江(岡山県英田郡)

■新役員

会計監査

岩本雀踊子・松川杜的

参事

安藤寿美子・金井文秋

常任理事

河内月子・西出楓楽

理事

奥田みつ子・佐藤藤子・西山幸・
春城年代

■同人規約一部改正

(Ⅲ) 役員

・挿入 会計監査 2名

・同 副理事長のうち若干名は「川柳塔」
の副主幹となる。

・同 会計監査は、川柳塔社の会計を監査
し、同人総会に報告する。

・同 参事は、常任理事及び理事から選出
し、常任理事は、理事から選出する。

・変更 (3) 役員の選出は、同人総会で行う。

(Ⅳ) 機関 (役員会及び総会の6行改正)

(1) 川柳塔社に次の機関を置く。
同人総会
常任理事会

(2) 同人総会は年1回、定期総会を開催
し、規約改正、予算・決算、役員選出
その他の重要事項を決定する。必要に
より臨時総会を開催することができる。

(3) 常任理事会は、総会の決定を執行す
る機関で、月1回以上、開催する。

「初歩教室」について

辻 白漢子

今回本社の都合で、萬的先輩のあとを継ぐ
ことになりました。私は柳歴は古いかも知れ
ませんが、まだまだ勉強を必要とする段階で
あります。したがって「初歩教室」の皆さんの
句と真剣に対話し、心を通わせたい
と思います。どうかよろしく願います。

なお、以前にも誌上で見ましたが、同人の
方の出句がいつもあるようです。タイトルが
「初歩教室」ですので、今後は差し控えてほ
しいと思います。発表のスペースの都合もあ
って、そのために初歩の方を掲載できぬよう
なことになれば、目的に外れることになりま
すので……。もし出句されても、掲載いたし
ませんのであらかじめお含みください。

(Ⅵ) 附則

・変更 (2) 本規約の改廃は、同人総会の決議
を必要とする。会費の変更は、総
会または常任理事会で決定する。

・挿入 (3) この規約改正は、平成元年10月1
日から実施する。

(同人総会出席者) 栗・杜的・飄云児・女
白漢子・柳宏子・紫香・凡九郎・勝美・かな
め・笛生・雀踊子・武庫坊・鬼遊・公一・敏
重人・太茂津・萬的・正坊・幸・金太・文秋
吐来・二三・射月芳・吸江・小路・冬葉

寢屋川市民川柳大会

とき 11月3日(祝) 開場午後0時半
締切午後1時半

ところ 寢屋川市立総合センター4F

(京阪寢屋川市駅から京阪バス②乗場から総合センター前下車すぐ)

兼題

「氣 前」里 小路選
「チャレンジ」河内 月子選
「育 つ」上田 佳風選
「ラッキー」西山 幸選
「今 日」奥山 晴生選
「のん気」古川 一高選
「石」橘高 薫風選

出句 各題とも2句(投句拝辞)

会費 1000円(記念品・作品集呈)

賞 秀句には選者色紙と記念品

主催 寢屋川市川柳協会
後援 川柳ねやがわ

宮崎シマ子さんから
ご芳志、拝受しました

川柳塔社

富田林市民川柳大会

とき 11月19日(日) 正午から

ところ 富田林市中央公民館

(近鉄南大阪線富田林駅下車右へ200米左側)

兼題

「飛ぶ」河内 月子選
「立派」奥田みつ子選
「節目」西出 楓楽選
「泡」池 森子選
「装う」阿部 柳太選

席題 1題 各題3句吐

締切 午後2時

各題秀句に賞品あり

主催 富田林市教育委員会
後援 富柳会

新家完司氏から
金一封、拝受しました

川柳塔社

第31回

豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午

ところ 豊中市立中央公民館1F集会室

(阪急宝塚線曾根駅東200米)

会費 1000円(記念品・発表誌呈)

あいさつ 永田 帆船

おはなし 橘高 薫風氏

席題(当日発表) 堀江としを選

宿題 「柱」尾谷 清風選

「熱」龜山 恭太選

「箸」神谷嬉舎亭選

「男」中尾 藻介選

「鈴」小出 智子選

「昔」安藤寿美子選

「謎」木山 雄幸選

締切 午後1時(各題2句)

賞 豊中市長賞ほか各題に呈賞

主催 豊中川柳会
後援 豊中市
連絡先 石川 勝

でんわ 〇六一八五四―一九九〇

平成元年度二賞表彰

本社 十月句会

10月1日(日) 午後6時

大阪市立労働会館

平成元年度の二賞表彰本社十月句会は十月一日午後六時から総会と同会場の大阪市立労働会館大集会室で開かれた。今回の二賞受賞者は全員出席で、初めに栗主幹から路郎賞の宮崎シマ子さん、川柳塔賞の池森子さんに賞状と盾が授与され、所属の句会・教室からそれぞれお祝いの花束や記念品が贈られた。

ついで柳宏子氏から高野山に建立中の川柳塔社同人ならびに川柳愛好家のための「川柳塔」について報告があり、吐田公一氏のおはなしに移った。その内容は、女性には聞きがせないウンチクを傾けた宝石の話。後日、誌上に紹介したいので、ここでは割愛する。

初出席は、山根八重(鳥取)坂本国公(京都)池森子(富田)宮前秀子(大阪)の四月間賞は岩本雀踊子さんが獲得。(正)(進行―天笑)(受付―みつ子・いわゑ)(記録―射月芳・みつ子)(清記―楓楽)

出席者―ゞ女・勝美・笛生・凡九郎・太茂

津・柳宏子・紫香・美智子・正坊・颯云児・幸・寿美子・武庫坊・年代・吸江・はつ絵・かなめ・いわゑ・みつ子・文秋・みさ子・八重・三男・岳人・千寿子・勝晴・登志代・国公・秀子・雄幸・英一・寿子・智子・小路・柳伸・重人・天笑・敏・狸村・タン吉・薫風・幸生・頂留子・利武・冬葉・鬼遊・公一・静歩・森子・昭子・仙吉・英壬子・隆二・八斗・緑・英子・菜・萬的・杜的・白溪子・千秀・茜・利通・シマ子・勝・次男坊・朱夏・寿美・章・章久・悦郎・光代・路子・吐来・あいき・金太・雀踊子・後藤正子・射月芳・楓楽・すすむ・白洋・登志美・憲太郎・美幸・一二三・美代子

席題「甘い」

石川

勝選

秋日和色沓え柿が甘くなる 勝美
金平糖の甘い昔を知っている 幸
母の甘さへすがりに帰る失意の日 シマ子
老母の耳甘い言葉を書きたがる 智子
遠景に亡母の甘さがまだ残る 美幸
やがてはと思えば老母に甘くなる 智子
甘い顔軍艦マーチ聞く男 岳人
甘い話は聞きあきた火消壺 冬葉
エビログ甘いソナタがこころよい 西
キューピット甘いいたずらしなくなる いわゑ
学割が世間の風を甘くみる 寿美
自画自賛甘い情けに悔いている 美智子

遮断機を甘くみていた彼岸花 憲太郎

瀬を越える娘の甘い許さない 英一
古里はカラスも甘い声で鳴く 雄幸
四万十はいのちを洗う甘い水 雄幸
汽笛が響く甘いことを憶いだす 後藤正子
安月給甘えてばかりおれぬ俺 利通
甘いこと言うからしめしつかぬ破目 八斗
棒グラフ甘う見られただけのこと 小路
ジャンケンに弱い男の甘い声 後藤正子
砂糖三つ入れて別れる話する 一二三
たつたひとつの甘い写真もセピア色 白洋
甘い香へ虫寄せ付けぬバラのとけ 英壬子
安楽死甘い考え論される 憲太郎
秋桜に甘いはなしはせぬように 岳人
コーヒーに甘い言葉が駆け抜ける 美智子
甘い香りに愛は計算されていた 年代
イヤリング甘いジョークを聞き飽きる 朱夏
癌告知ふいに砂糖が辛くなる 楓楽
殺人鬼が甘い言葉を持っている 楓生
甘い話を聞きたがってる風の耳 楓楽
かたつむり甘い言葉も通じない いわゑ
男文字に甘い言葉の罫がある 幸
水掛不動へ世間を甘く見た女 萬的
甘い言葉でゆっくり廻る夫婦独楽 武庫坊
甘くみた山の掟に裁かれる 寿美
蟻がよる甘いお話好きだから 八重
甘いもの欲しいと思う失意の日 寿美子
甘い水探すはたるも淋しいか はつ絵
甘い声絶やさないのは鬼だろろう 勝

席題「散る」

木山雄幸選

燃えつきた女きれいに散りたがり
 乱れ咲くコスモス散る日考えず
 窓ぎわでやがて散る身を曝される
 深く散ろうと思ふ終の舞
 孫の客おもちや散らけたまま帰り
 青春も知らずに散った戦友もいる
 柳散る頃には終る夏の恋
 ライラック散って思い出だけ残し
 散りざわに告白したいことがある
 逢ったのは銀杏散りしく御堂筋



選者と二賞受賞者：(左から)山根八重・田中正坊・福本英子・宮崎シマ子・森茜・池森子のみなさん

雀踊子
 射月芳
 一三三
 寿美
 白浜子
 颯云児
 寿美子
 いわゑ
 楓楽
 正坊

夕焼けの海に散華の友もある
 散りざわに陸下方歳など言わぬ
 椿散る島からひとり嫁に出す
 一杯の酒で散らしている命
 コスモスを散らしてまでも追いかける後藤正子
 散らかしているがと居間へ通す友
 散るときもおんな口紅忘れない
 散ってゆく余生に明日の種を蒔く
 桜散る散る五百羅漢の膝に散る
 十代で散った命をいとおしむ
 散りざわがよいと敵かとおはめられる
 紅葉散る柿の葉ずしが猶うまい
 銀杏散る下で訣を言うつもり
 くもの子を散らしたように皆帰り
 散りざわは真赤の花の下にいる
 聖戦に散った墓石が風化する
 さわやかに散った敗者が美しい
 散り際を華やかに舞う半生記
 散る時のせりふを思ふ風の中
 散り際にひと差し舞って桐一葉
 火花散らして女同士のすれ違い
 急行通過枯葉ハラハラ無人駅
 屋台骨揺する噂をまき散らす
 散りざわの美学わたしも持っている
 散るときが頭を離れない
 散りざわは古武士に似たり辞表書く
 野の花は野で散らすこそ愛だろっ
 天王寺僧七色に撒く散華
 かわいそっくに花屋で散った花もある

美幸
 楓楽
 紫香
 狸村
 正子
 シマ子
 朱夏
 千津子
 杜的
 八重
 正坊
 章久
 智子
 文秋
 武庫坊
 勝美
 金太
 大茂津
 美代子
 英子
 千秀
 萬的
 天笑
 朱夏
 三男
 静歩
 いわゑ
 秀子
 勝

散るときは男の顔で散ってやる
 散り残るいのちはるかに慰霊行
 兼題「読む」
 春城 武庫坊選
 明日読めず過去をじっくり読み返す
 旅人になって案内板を読む
 傷心の旅の途中で読むマンガ
 辞令にはコママをつけて読んでいる
 その先を読まれているの知らないか
 本本を眼で読み返す鬼がいる
 本心を読む相槌を打ちながら
 応接間読まない本の背を並べ
 腹芸の肚が読めないまま握手
 顔色を読んで夫に茶を入れる
 先の先読んだつもりが落とし穴
 手の内を読んだ母は驚かぬ
 局面の先を読まれた重い石
 サバ読んだ年齢が目尻の皺にある
 終盤の勝読み切った駒の音
 保険証の裏面を読んだことがない
 読まれてるその先を読む詐欺師の眼
 胸の中読まれて蜚身を焦がす
 ライバルも同じ漫画を読んでる
 笑い飛ばして次の一手は読んである
 風呂敷をひろげ本心読ませない
 胸の内ちゃんと読んでる母の耳
 それ以後は読まぬ聖書になつて
 六法に催眠術をかけられる
 暗記出来る程も絵本を読まされる

雀踊子
 雄幸
 次男坊
 みさ子
 岳人
 美智子
 寿美子
 天笑
 鬼遊
 寿美
 いわゑ
 朱夏
 英子
 憲太郎
 朱夏
 史風
 射月芳
 森一
 公一
 国公
 天笑
 楓楽
 颯云児
 幸
 桂香
 文秋

読み人は知らずに詩が世に残り
輪の外の酒で裏側ばかり読む

一步先読んだ女の騙し舟

文学書読むのでペレー買いに行く
さまぐれに歳時記を読む秋の章

説明書また読み直す老眼鏡

読むだけでやすらぐ聖書ふところに

父の胸読んでも絵筆捨て切れず

その先を読み質問の矢を受ける

おしきせの誓い読んでる金屏風

妻なぜか法律の本読みだした

風を見て女おんなの本を読む

殴られて父の心が読めてくる

悪人と言われ聖書を読んでいる

地図の裏読み新世紀考える

兼題「郵便」

辻 白漢子選

膏葉のように一円貼って出し

消費税不足の手紙舞い戻る

郵便受の中でときめきためている

日に一度船で届いている郵便

来る筈の便りが来ない雨の午後

郵便が溜り空巢に狙われる

二度三度ポストを覗く雨の午後

もう逢わぬつもりの手紙つよく貼る

郵便のお世話になって恋実る

郵便受け督促状が溜ってる

いい返事届けてくれた郵便屋

郵便局の隣に住んで筆不精

千秀

英一

かなめ

金太

正坊

光代

勝美

みつ子

寿子

正坊

勝

瑞枝

飄云児

鬼遊

武庫坊

どんたく

螢

吸江

利武

勝晴

国公

英子

金太

武庫坊

ダン吉

隆二

あいき

小包は家族みんなで確かめる
小包で日高昆布がとどく友

恋文が二円不足で逆もどり

郵便で孫の手形がやってくる

情熱が速達便で来る句集

郵便をひたすら待つ当てがあり

クロネコに郵便局は勝てるかな

外出に郵便受けを見て出かけ

この町に文句郵便屋が違い

郵便が遠い情けを抱いて着く

ふるさと太いきすなのカモメール

ラブレター飲んだポストの赤い顔

親こころ包んで送るユニパツク

郵便受けに鍵こ近所を信じ切り

速達で送り返して来た几帳面

趣味の名で来る郵便ばかりです

お茶一杯馳走に過疎の郵便屋

姉妹で仲良く競うペンの友

寄せ書の見舞のハガキにはげまされ

親展の女文字から請求書

島に来た郵便船へみな走る

ローマからうどん恋しと子の便り

民宿から山の紅葉の便りが来

消印が大きく見える督促状

旅便り料金不足で届けられ

郵便受け飲み屋のツケも入れてある

屑になる郵便物が多すぎる

適当に返事を書いて飲みに出る

郵便の中味は離婚届だけ

公一

笛生

シマ子

敏

小路

智子

勝

紫香

白洋

美幸

頂留子

美代子

飄云児

英壬子

笛生

凡九郎

光代

小路

すすむ

寿美

紫香

みつ子

萬的

隆二

柳宏子

勝晴

射月芳

桂香

白漢子

平成元年度本社句会皆出席者(10月まで)
飯田悦郎・西口いわゑ・宮園射月芳・楠

昭子・北勝美・山本憲太郎・黒川紫香・

桜井千秋・松永すすむ・川原章久・田中

正坊・玉置重人・吉川寿美・西尾栞・岩

本雀彌子・宮口笛生・野村太茂津・松川

杜的・稲葉冬葉・清水利武・小出智子・

板尾岳人・藤田頂留子・金井文秋・川島

飄云児・辻白漢子・松原寿子・奥田みつ

子・阿萬萬的・西山幸・堀端三男・高田

美代子・西田柳宏子・芳地狸村・津守柳

伸 (35名)

兼題「メルヘン」

小出智子選

メルヘンな気分でレジヤバスに揺れ

メルヘンを残して欲しいプラカード

メルヘンに遊んでいます孫の守り

メルヘンの夢が広がる花時計

シンデレラの老後のことを知らないか

メルヘンの夢を育てるトウシユーズ

雪の夜は子狐手袋買いくる

メルヘンの夫婦で米の値を知らず

メルヘンを春のタッチで書きあげる

メルヘンの姫に手紙を書いてます

ガリバーのパバを起こしに小人達

都市砂漠で白馬の王子さまを待つ

都市砂漠にも夕焼けの美しさ

白漢子

重人

幸生

飄云児

勝

寿美

寿美子

鬼遊

二三

武庫坊

光代

みつ子

次男坊

メルヘンを書き少年の日にかえる
英子 一三三

メルヘンと仲良しになる掘り炬燵
みさ子

ふしぎの国でキノコサラダを食べてきた
楓 楽

ブランデーグラスに大人のメルヘン沈んでる
はつ絵

掘り椅子の老母メルヘンの中にいる
瑞 枝

メルヘンの白馬に攫われそうになる
蝸

生まれかわりの孫抱えているおじいさん
あいき

七十八まだメルヘンに憧れる
冬 葉

逆算をしてメルヘンの旅を待つ
蝸

少年にメルヘンを呼ぶ赤とんぼ
新正子

メルヘンを話すりんごを召し上がれ
国 公

お伽話里の水車が語り継ぐ
天 笑

いちまいの切符を抱いて夢芝居
白 洋

眠りの森にボクの枕も置いてある
美代子

タンポポの綿毛ととんだ春の夢
寿 子

メルヘンで君と僕とのドラマなど
茜

キングダーブックから飛び出したシャボン玉
柳 伸

横浜にメルヘンがある赤い靴
美 幸

父さんのメルヘン今年も菊が咲く
あいき

メルヘンの国へ帰るか渡り鳥
武庫坊

星がきれいではちやの馬車を待っている
岳 人

メルヘンへ南南西の風が吹く
幸

青いりんごも赤いりんごもメルヘンだ
重 人

都会にもメルヘンがある銀杏散る
射月芳

出世競争それは男のメルヘンだ
三 男

兼題「澄む」
西尾 葉選

ビルの谷間に澄みわたる空がない
冬 葉

道草をする気にさせる澄んだ空
すすむ

澄んだ目に大人の嘘が裁かれる
国 公

恋成就まつり太鼓が澄んでくる
幸

須磨の浦澄んで哀史が胸をつつ
登志実

寝たきりの澄んだ眼にドキリとす
杜 的

上澄みよ下の苦勞を知ってるか
金 太

澄む水に香り育てるわさび沢
狸 村

大気澄む村だが嫁の来てがない
史 風

秋澄んでるんるん彼もそばにいる
年 代

秋深し水も空気も澄む田舎
八 重

合掌の指から空が澄んでくる
国 公

善人になり澄ましてるかたつむり
敬

澄み切った心で写経の墨をする
飄云児

日めくりをめくると風が澄んでくる
美智子

空は澄み空気も澄みて腹はずき
利 武

澄みきった空へくす玉いまわれる
三 男

澄んだ眼と心で子等と話し合う
武庫坊

空澄んで大極拳の背なの汗
白溪子

湖底まで澄み切っていて死に切れず
笛 生

澄みきった空に煩惱などはなし
静 歩

耳を澄ますと星がこぼれる秋の音
公 一

澄まし込む妻が黒幕仕掛人
千 秀

秋あじの跳ねて母なる川が澄む
英 子

湖面ゆらいで声澄みわたる鶴一家
瑞 枝

上流はやまめいわなの住める水
文 秋

インタビュール明鏡止水に波立たせ
柳宏子

自首をする心見事に澄んでいる
勝

澄んでいる瞳に嘘をひっこめる
正 坊

澄んだ目がちよつと苦手な金バツジ
吐 来

澄み切った空母のおむすびがうまい
みつ子

清澄な月影踏んで百度石
小 路

五千年の遺跡を置いて空が澄む
はつ絵

道頓堀はつぽつ水も澄むだろう
蝸

澄みきった空に笑われないうように
桂 香

澄んだ目で時とききついでを言う
狸 村

澄みきった大気のなかで禪を組む
雀踊子

澄んだ声で返事をくれる嫁がいる
葉

鳴鋭声いよいよ秋の空が澄む

紀水川柳会川柳大会

とき 11月3日(祝) 午後1時開場
同 2時締切

ところ 橋本市教育文化会館

兼題 「澄む」
吉岡 益子選

「澄む」
岩本雀踊子選

「川」
児島与呂志選

「流れる」
河内 天笑選

「水」
明石フミ子選

「清い」
野村太茂津選

「清い」
岩倉 天彦選

席題 兼・席題とも2句(投句拝辞)

出句 兼・席題とも2句(投句拝辞)

会費 500円(各賞あり)



1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月25日締切厳守。
担当・玉置重人

川柳ねやがわ

高田 博泉

長男の無口をカバする長女
家中が馴れて無口は放つとかれ
父のウツ娘をとる敵と飲むこぶ茶
譲る人見付けて弾む郷土芸
とても良い笑顔で席を譲られる
この辺でお茶にしょかまとめ役
お茶だけで酔わせてくれる優しい眸
無口から引き出している酒の量
健康な爪面接の目にとまり
もう父は居ない夜の爪を替える
ひと思案欲しい話にお茶を替え
マニキュアの味を知らずに明治逝き
譲られたポスト確かな硝子張り
親ゆずりの美貌で罪を逃けている
譲る子もなし気楽に食べてます
やってみよう後任の席ゆずりうけ
スタートは同じうさぎも亀もいる
石畳の白が冷たい禪の寺
妊娠で嫁の我が儘太り出す

三千子 時弘 良三 波留吉 かつみ 頂留子 菜月 君子 雅文 亜太 権成 勇太郎 静江 英千子 勝一 増造 一芳 一鬼

川柳化粧槽

植村客遊子報

火だるまでも譲らぬ女の意地を見せ
譲る子が無く豪邸に老夫婦
社長の座譲った今朝の空の色
肩のこり五月出好きの罰でしょか
謙譲の美德なんぞと言つとれず
連休を拗ねたパンダが不貞寝する
生きてやるよろこび胸に欠む新茶
新緑のベンチで気のない欠伸する
マニキュアに無縁で主婦の座が堅い
茶柱が立つのは安い方のお茶
身こしらへ今日退院のマニキュアー

古稀の顔鏡は上手言いません
子の留守にビデオいじって情気ている
おふくろの味をフオークで食べている
味自慢昔気質の屋台店
山上の古寺でしばしの涼をとる
冗談の顔で想いを言うてみる
魂胆があり手土産をさげて来る
印相を変えても運はついてこず
教養が邪魔タコ焼きを食べそこね
人恋しげらせる秋の虫が鳴く
頂点上に立つて味わう孤独感
取賄も贈賄もない平社員
割勘へ一円玉も添えて出し
茶炊紗へ報われぬ愛たたま込む
履歴書へ書いた事なし元少尉
手を振った握手をしただけ分らない
そう言えはそうかと孫にも一理あり
一張羅陽の目も見ずに春は逝く

花世 紀代 節子 春子 庸佑 一途 光子 まさお あやめ 小路

川柳後楽

井上柳五郎報

外孫も立派に育ち社会人
むつころう穴子にしとく土用の丑

風鈴のすずしさを書くかもめーる
風鈴がよよう鳴った宵の風
風鈴をさびしく鳴らす秋の風
風鈴はいびいあ日蔭の吹き水
美辞麗句並べてチクリ胸刺され
岐路に立ち痛む心が欠伸する
月桂冠敗者の痛みも知っている
ほろ酔いの月へ古疵痛みだし
落書へうらみつらみの顔がある
お叱りの電話へ片手は落書中
落書の中であなたと結ばれる
今生の別れの落書練り続け
教頭の首を小兎かえり討ち
ふるさとが移動している甲子園
バーゲンに女の本性かいま見る
バーゲンで妻の本性見しまい
バーゲンでオバタリアンのたくましさ
バーゲンの品で間に合う暮し向き
バーゲンのネクタイばかりで終えた職

久世川柳クラブ 二宗 吟平報

うれしさが今日の日記に書き切れぬ
苦勞話語らぬ母の顔の皺
楽しみは孫娘の選んだ派手を着る
手袋の白さが欲しい立候補
四角にも丸にもなれず世を渡り
ためていた涙一人になつてから

永楽 客遊子 義親 九坡 柳五郎 照路 玉水 博友 草風 青銅 桃風 佐加恵 健一 吟平 金吾 拓治 哲郎 秋月 美智子 志重 伊久栄 江山 ふさえ 山人 秀香

家の子が入賞三面記事にのる
嗚呼玉音楽いた日本あの日から
古稀が来てまた人生をやり直し
消費税すったもんだでやり直し
やり直す谷間やさしい風に合つ
口下手で人目のつかぬ場所に居る
作文を読んで口下手見直され
口下手の煩わしさを筆にする

川柳塔あおもり

波多野五楽庵報

邦人 甫正 保恒 半仙 美恵子 吟平 恒心

夜話ならば家の爺さま村一番
真相を語れば乾いた音で跳ね
添い寝して子の話題にも耳を貸し
夜話の種にされてる過疎の雨
灯を消せば身の毛のよだつ音がする
うなずいて夜話聞く中に眠気さし
夜話を聞いて夢路をたどる孫
先輩の夜話の教えを未だ守り
夜話にろうそくの火消えかかる
夜話の続きをせがむ秋の風

城北川柳会

神夏磯典子報

疑いが晴れて心が軽くなり
きりがない話上手に聞き上手
根回しの果てに生れた新首相
御亭主のもてた話は眉に唾
嘶家の指はトクトク酒を呑み
飢え死の話わからぬグルメ展
水やりへ報いてくれた花の艶
通い妻心の底を覗かせる
夏日さらさら女が若く見えてくる

寿美礼 きみ子 秀夫 輝子 典子 静歩 しみ

意地悪な言葉の裏の愛に泣く
事故知ってからの火花を折り見る
笑われて大正の話横へそれ
返事せぬ御霊の夫に話しかけ
親子の対話テレビへ向いたまま
メルヘンの世界へ通う銀の馬車
儲け話について乗せられない老いの金
再検査すつきりしない医師の顔
心眼で繁華街ゆく白い杖
抱いた孫の信じ切つてる瞳がきれい
ピエロにはならぬ話がうますぎる
ポツクリ寺視野におさめて手術台
覗いても読めぬカルテに抱く不安
定退で面が外れた父の顔
国訛り昔むかしへ更けて行く
熟年の首ネクタイが若くなり
入道が鰯に代るまでの夏

川柳東大阪

森下

愛論報

竹光を差す浪人が飢えている
浪人の下駄が器用に減っている
ボタ山を見る浪人に雨が降る
善人の面は重いなと思つ
リクルード秘書に被せ厚い面
演壇の下で泣いてる仮面
嘘八百天狗の面が外せない
今にして母が刺してた足袋の底
かなつたら一つですまぬ思いごと
やせたいとつくづく想うレオタード
表面は聖人君子というお顔
世の流れ女性上位となる離婚

湖風 作三 美風 喜風 度久 章舟 孤舟 頂留子 晋吾 恒明 滋啓

温市 市郎 テルミ 登美子 文子 白峰 午郎 敏子 倫子 きくゑ 達子 ただし 満津子 史公 静風 右近

悠久の流れを語る欠け埴輪
物忘れ亡妻また部屋に居る気配
面倒と逃げを張る手の上手下手
無念無想そこから道が見えてくる
少しずつ流れを変え策を立て
図書館で浪人マンガを読んでいる
流れ星好きな女と腕を組み

静岡市川柳塔同好会

永倉 僕川報

平和の灯分かち続けて趣味を積む
胃カメラが素直に写す癌の位置
合格の通知に踊る電話口
逆境の暮しの中で知る人情
太鼓の音踊る阿呆になりに行く

弧秀 晃授 猛士 金吾 正雄

佳句地10選 (前月号から)

藤井明朗選

豊かさの陰で自然が泣いている 頂留子
歩いたら五分が長い案内図 正朗
駐在と並んで歩く村の道 紫香
叩かれた数だけ恩を受けている 三男
騒いでも無駄だが意地は見せておく 白漢子
捨て猫を抱いてきた子の瞳に負ける 鉄治
思い出がこぼれ始める旅みやげ 英子
借りた本そのままにあり落ち着けず 水客
いい夢の続きは明日に取っておく 風云児
幸せは老いの職持つ軽い足 ひさ子

残されたノートに夫の愛の文字
惚けた祖母駄々子様の様に困らせる
冷房で健康体を狂わせる
御近所も弾んだ声の夏休み
指切りで孫の願いが結ばれる
トンボの目延びる指先くるつと見
悪かったあやまる孫の瞳が奇麗
暑い日に命短かい蟬しぐれ
母の胸信じ切つて子の寝顔
飢の色違う世界に陽は一つ
アルバムに頑固な父の顔がある

いさり火川柳会

尾崎三代治報

童謡をうたう心は美しい
童謡が荒んだころ和ませる
虫のつく年頃になり気ももめる
上役の虫が気ままに刺してくる
鈴虫がひとりの夜を深くする
九回の裏で逆転眠れない
うっちゃりに敢闘賞の夢やぶれ
逆転の勝利まぶしい朝となり

川柳塔とつとり

岩原 番水報

新築を見ると値踏みがしたくなる
新しい家に似合わぬ靴をぬぎ
新築のローン親子でリレーする
新しい家に喧嘩は似合わない
辞表書く紙の白さに躊躇する
ポスターに汚職するとは書いてない
紙コップ旅の情けを知っている
紙船船みどりの風に叩かれる

た ま 八重子 智恵子 三代治 豊子 由多香 武士 孝人 伊都子 僕 房 久 静 千代 まつゑ きぬ きん つね たき

塾通い未来の椅子を夢に見る
停年後腰の落ち着く椅子がない
たなはたの総理の椅子にひもがつき
前列の椅子で再起のメモを執る
世の中をずるく泳いで早く逝き
学歴はなくてもうまく泳いでる
泳ぎより水着のほうが気に掛かり
泳ぐ術知つて世間をあまくみる

川柳塔唐津支部

久保 正敏報

遠花火我が青春の恋に似て
デパートの意地が変えない包装紙
メモ持ってパパ買出しのお手伝い
潮ぼとけ祀る灯台岬守り
高ければ良いと限らぬ山と鼻
又一つ社会が生んだ悪の華
ああ無情空しく枯れたこしひかり
夏休みあと一日の子を案じ
根っからのアンチ巨人で人嫌い

むらくも川柳会

藤井 明朗報

サーカスのピエロはいつも人気者
見合わせてばかり居るから出番なし
出番だと孫のけんかに出る姑
一番などどうせないよと拗ねている
けじめつけ他人になつて出る家裁
期待以上子供に人気おもちゃ展
ひばりさんすたれぬ人気栄誉賞
奉仕する心へ人気とつくる
人気者どの番組も顔を出す
あの先生気前がよくて人気者

洋平 多可志 俊路 帆雀 呼風 旋風 粗粒 虹汀 四郎 高明 朴竜 旭恒 幸實 幸夫 正敏 秀良 義夫 幸子 カツ子 巡歩 福子 竹乃 林蔵 仲子 島子

川柳塔鹿野みか月結成

満九周年記念大会

とき 11月19日(日) 午前9時開場
ところ 鹿野町営国民宿舎「山紫苑」
鳥取県気高郡鹿野町今市
JR「浜村」駅下車バス15分

お話 兼題 「椿」「うれしい」「声」「幸」「とんぼ」「苦」
西田 柳宏子 森中恵美子選 小出 智子選 山田 止水選 西山 幸選 長谷川博子選 両川 洋々選

席題 1題 兼・席題とも2句
会費 1500円(軽食・発表誌呈)
*欠席投句の方は、小為替で2000円を同封し11月11日までに左記へ。

懇親宴 2000円

(11月11日までに投句先へご連絡ください)
鳥取県気高郡鹿野町鹿野二二七九 中原 颯人宛

主催 川柳塔みか月
後援 鹿野町・町議会ほか

よくわかる話上手に人氣あり
下積みに耐えた人氣は衰えず
夏風邪は馬鹿でも引くと負け惜しみ
雷が逃げて青空のぞいて来
夕立へアベック雷夏を呼ぶ
甲子園めざし球児の血は燃える
レントゲンあとで気付いたカットパン
はつきりとけじめつけたら負けになる
政治家のけじめそのうち総選挙

倉吉川柳会

渡辺

善句報

武衛 一葉 峰雪 三津江 梅園 幸子 芳朗 正朗 明朗

思い出を連れれば恐いほどの落陣
壮大な思い出つくるポイジャー二号
気ままですラーメン好きの僕の犬
どこまでが気ままか杭を打っている
エリーートの隣でがっくりする私
がっくりした頭の上でどんどろけ
土瓶口飛び出しがっくりさせられる
地球を回る気ままな風を見送る

川柳塔わかやま

牛尾

緑良報

荒介 次男 とみお 千代 瑞枝 完司 善句

下駄ばきで様子見に来た近い火車
信念を貫くいのち縮めても
縮まった距離へ残り火燃やして
伸び縮み出来る余裕で生き延びる
心まで縮んだらしい背に出逢う
縄梯子君との距離が縮まらぬ
追いつく車線のいのち縮めていませんか
趣味が出来脳の縮みも一休み
夫婦という近さに気付くのも老後

川柳はまでら

井上

喜酔報

紫香 桂香 信子 守 光代 幸 輝子 武治 緑良

思い出に何かよいことしておこう
遠慮勝ちに一億円貸せと言う
ムードよし遠慮しないでついて行く
極楽へ行けば気ままになるだろう
教育ママにがっくりさせる呼出状
満月も屋敷に座る内祝

寿満湖 さつき 千代子 かつみ 喜美子 洋 満春 秋人 秋草 碧水 千春 康志 ゆり子

仁王門へまっすぐ稲穂の風が来る
汗滲んだ金に地道な知恵がある
四十年稲の本音を未だ聞けず
農政へ反論してる稲の出来
知恵の輪を解かず抱えている夫婦
赤ちゃんには悪知恵などは持っていない
ざりざりに生きて仏の知恵を借る
三猿を真似る知恵にも事を欠き
生き残りゲーム知恵があってもなかつても
泣かされて知恵は大きくなってゆく
悪知恵に文殊の出足くじかれる
蓋い日も速い日もある帰り道
藪をする前に近所へ知れわたり
御近所の絆は細い路地にある
神社仏閣近くにあつて無信心
科学者の欲は星座を近く視る
万歩計に近回りして叱られる
人生に近道などは無いと知り
お互いに不幸で身近なお付合い
男と女ホント近くて遠まんナ

萬的 武雄 正博 凡太 三男 信秋 金太 忠 アサ 克子 豊太 紀美女 裕美 好笑 登志代 忠雄 千寿子 白光子 紀久子 凡九郎

臆病なやんちゃ娘で笑われる
親に似てやんちゃな孫は左利き
やんちゃでも嫁にいくまで処女でした
保育所のやんちゃも怖い注射針
見た目にはやんちゃや坊主も優しい子
往年のやんちゃが集うクラス会
三日目はもう手にあまるやんちゃ孫
遠足のやんちゃに車中のひなた草
やんちゃして母校の顔へ泥を塗り
ドロ遊びさすとやんちゃも大人しい
昭和史にやんちゃの頃のわらべ唄

治虫 蛾 宙 凡兵 醉舟 廣人 千流 喜醉 与呂志

難民船我が引き揚げの時思ふ
百歳になると気ままに生きている
同じ礼言うなら遠慮せずに喰い
赤飯がまだまだ足りぬ内祝
も一人の私と遠慮なく話す
がっくりとくるとは言わぬ妻の意地
長男に長男誕生内祝

雄々 亜弥 京子 秋女 御前 やえ 石花菜

親二人取り残される日曜日
遊学も遊にウエートある時代
サバイバルゲームが好きな青い麦
たわむれの恋は出来ないアマリリス
カラコロと遊び足りない宿の下駄
遊芸の一つも知らぬ座りだこ
買ったがに一玉玉がまだ慣れず

三幸川柳教室 桜井 千秀報

親二人取り残される日曜日
遊学も遊にウエートある時代
サバイバルゲームが好きな青い麦
たわむれの恋は出来ないアマリリス
カラコロと遊び足りない宿の下駄
遊芸の一つも知らぬ座りだこ
買ったがに一玉玉がまだ慣れず

公一 高夫 靖子 結実 玉枝 親路

欲ばりの蚊が吸い過ぎて立てません
冷房に頼らぬ暮し天の川
冷房に布団をかけて寝ています
冷房を出て風鈴の私語を聞く
涼し風立ってクーラーの後遺症
生き残る徴兵検査もまだ二人
クーラーで銀行の椅子冷えすぎた
電車から昔住んでた家を見た
冷房に馴れてやっぱり汗をかき
背広まで着て冷房にたち向い
轟々とびびき職場のひる休み

川柳ささやま

遠山 可住報

七彩の夢が渦巻く青春譜
もう少しとべる余力へ薄化粧
聞きそこねそれでよかつた電話口
悲しみに耐えてうねりとなつた海
ハーモニカ薄い胸だが大志もつ
電話からまたも火の粉がとんで来る
薄化粧こころの武器として捨てぬ
催促の電話で友を見失う
うかつにも出たため息を娘は案じ
抱かれたい海は墓石の下で風ぐ
広いね青い海 深いね母の海
札束へうっかりすつた鬼の面
悲しみの涙を呑んだ海の私語
沖繩の海の蒼さが胸をかむ
騙される方もうかつと叱られる
海風いて明日の謀叛を覗かせぬ
裏路を選んでほつとした小犬
居直つて失うもののない強み

好 聖 智 歳 世 悦 北 博 清 白
栄 子 重 栄 似 良 斗 利 泉 汀
はる 聖 智 歳 世 悦 北 博 清 白
み 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

おっぱい川柳会

松村迷観子報

顔だけで人の値打がわからない
一言が耳に残つて寝つかれず
言い訳はいわぬ男の目が赤い
恋一つ花火のように消えて生き
貴方への思いと同じ飛行雲
汗流す背中で秋の風が舞う
墓掃除孫の話をして帰る
敬老の日に招かれる齢となり
愛し合う二人に言葉などいらぬ
予定などない顔をしても役も受け
世の中では計算出来ぬ未来像
理の中のアホーを寄せて阿波踊り
行く先を背の子供に教えられ
閉めるにはおしい涼しい風と星
いらいらをかみしめている待合所

京都塔の会

松川

杜的報

本音で話そう葱坊主が揺れる
打ちあける気ではるポト揺れはじめ
木が揺れて明日を気遣う宿の夜
まだ心揺れさす人に出会わぬ
勲章が集うと風が生臭い
パレードの風船夢をはらんでる
父さんも一緒に揺れる肩ぐるま
小刻みにイヤリング揺れすねている
ぎらぎらと喰いつきそうな目に出合
洗濯の白ぎらぎら夏陽をはじく
することもせず生意気な青りんご
ポイジャーが海王星の影送る

和 求 紫 白 正 美 花 武 年 杜 風 圭
友 香 芽 溪 坊 智 代 庫 代 的 云 児
報 報 報 報 報 報 報 報 報 報 報

川柳塔まつえ

恒松

町紅報

吊皮が眠そに揺れてる終電車
しゃばん玉間一髪の命です
負け犬に夕日きらきら無情なり
マチ針の数を確かめやつと終え
亡父の撒粉に画鋏でとめる終
きらきらと野心に燃えたる男の眼
葱坊主思案まだまだ続きそう
歩武堂々さからう風も少し吹け
きらきら太陽向日葵しよげ返る
あと一人コールへ揺れる外野席
蜘蛛の巣はかすかに揺れて餌を待つ
政治家の耳に届かぬ生の声
生返事娘は爪を磨いてる

表札が二枚並んでいる過渡期
表札を変えても運が向いてこず
表札の文字いかめしい門構え
天国の夢を見ているハネムーン
天国へ着いて道化の服を脱ぐ
天国へわたしを乗せる鶴を折る
天国に夫にも言えぬ人がいる
又今日も天国行きの船が出る
正論をじつと聞いている大時計
正論を吐く煙突が高くなる
正論が封じこまれるカゴメの輪
正論を吐いて男は背をのぼす
正論を吐けぬ首輪が重くなる
正論を捨てればいがい酒になる
正論を吐いて若い樹たじろがぬ
鈴虫の正論夜通し続くなり

江 英 福 佳 芳 水 三 飛 美 美 倫
美 子 子 秋 栄 子 客 求 鳥 徳 子
はつ 子 子 子 子 子 子 子 子 子
綾 綾 子 子 子 子 子 子 子 子

正論へ精一杯の旗を振る

窓際で仲よくなつた雀の子

仲よしへお別れ参列者を泣かす

仲よしは学生気分抜けきれず

仲よしとのめばしょっちゅう度が過ぎる

仲よしと一しよに泣ける海がある

仲よしが男と女だからもめ

独り居のけちが宛名のない遺産

台所主婦が居らねばけちくさい

けちであるつもりはないが出しそびれ

けちにして貯めてもあの世金いらす

仲よしの犬と猿がいて話題

千円札の皺をのばしているどけち

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

呑むほどに人が変わった女酒

戸を開けるまでお酒には負けてない

見てござる 仏の前で朝の酒

演出が下手でお酒の世話になる

左遷地の地酒やっぱ辛い酒

負け犬になるなど妻は酌きながら

酒断つた夫は口数へるばかり

トゲ抜いて飲もう今宵は祝い酒

トルコブルーの眸をほろ酔わす灘の酒

酔うたあとコップの底にトゲをみる

人間をむき出しにする酒をみた

酒瓶を見ると笑顔の父になる

飲み直す酒に溶けない事がある

輪の中の酒が今夜はほろにがい

酒壇の向うの海を見てしまつ

秀子

登志子

舞吉

みえ

巡歩

文子

与根一

煩悩児

米子

静恵

長三

静江

鶴丸

叮紅

酒場には天使も魔女もいるそうな

急転直下酒が快諾してくれた

川柳藤井寺

高田美代子報

財布握らせると天まで飛んで行く

法善寺財布次第の風が吹く

嫁はんには財布と命預けます

苦勞した証か肩が痛み出し

肩で風切るヤクザ映画を見た帰り

肩合傘男の肩はぬれれている

肩ゆらせ揺らせ母歌海の唄

肩書のなせ父にある人間味

肩車父さんの髪にも白いもの

肩叩きゆるみがちな靴の紐

肩組んで校歌の波は甲子園

頂上を極めにつこり肩の息

独りが好きなアルプスの肩君の肩

独りが見つけたママの福ぼくろ

転んだら自分で起きろ瘦せ蛙

何時転ぶかわからぬ身にも今日がある

転ぶたび身についてくる人間味

喚声を耳に転んだゴール前

ちよこちよこと転び大事にいたらない

寝転んで隣の主人ながめてる

有難や人生転ばず傘寿過ぎ

転びなれしてる男の長電話

寝転んで八月の雲涙ぐむ

妻の手が転ばぬように杖となる

転んでも長い人生立てと言つ

夏さらい冬もさらいと歳をとる

スカウトが目を光らせる甲子園

田鶴

日枝子

和子

宗一

三郎

繁男

作秀

吸江

伴子

和美

信子

志洋

美房

須美

修六

昭子

敦子

ときお

与呂志

政美子

祐二

比呂志

悦子

終戦日その日の日記書いてない

聴診器転ばぬ先に来いと言つ

臆病な男で転んだことがない

豊中もくせい川柳会

田中

好きな方持つて帰れと友が言つ

傷口を広げて見せる友がある

戦友もまたマラリア倒れ華中の夢

戦争の話になるとだまる父

虫の声別れ話をされそうて

土地の値の話を聞いて腹が立ち

いい話だけ病人にしてあげる

面白い話が好きな紙コップ

会話するように羅漢は木の葉蔭

遠目にも品良く反った寺の屋根

家の屋根飼ひ猫だけが知っている

本堂の屋根の修理の奉賀帳

だんじりの屋根の港に誘われる

残り少ない遺産少ないの採めず

思ったより遺産少ないので採めず

あいさつをする子が少なくなってきた

少ないがと母はこっそり握らせる

早い経お布施少ないせいかしら

里の秋少ないけれどおすそわけ

充電の足りぬ男があればてる

さよふなら竜宮へでも行つたらか

蓮の葉のこぼれる露に秋の蝶

秋日和の旅をうながす時刻表

宿場街さびれ税がよく目立つ

忘れたい過去をノートが喋り出す

好きな花にいつも添いたい草

末一

てつお

美代子

正坊報

薫風

つえ子

明吉

武庫坊

寿美子

登志美

紫香

しげお

萬的

(国)英子

とく子

圭坊

さく子

白漢子

正坊

富子

博史

慶子

明光

花村

登代子

諷云児

露児

福一

英子

ぼつくり寺の帰りもコーヒ忘れない 杜的

南大阪川柳会 中川 滋雀報

素うどんの鉢は少うし歪んでる 作二郎
 友の死後鉢のトマトが枯れている 頂留子
 煮ころがし山盛りにする母の鉢 一 章
 捨て鉢にならずにすんだ妻の愛 トミ子
 金魚鉢いつか主なく水中花 公一
 間を置いて息ととのえる勝負どこ 文秋
 名コンビ間の取り方にそつがない 恒明
 間の持てぬ話で汗を拭くばかり 柳伸
 間をおいて戻る返事にそつがない 柳美
 間をもたすキリマンジャロがほろ苦い 楓楽
 子に向けてときときぬくい矢を放つ 柳宏子
 満々の自信二の矢はもつていず 重人
 定年の靴に矢印見つからぬ 凡子
 味方から吹矢がとんだ日の焦り 庸佑
 矢面に立てる持ち駒用意する 覚然坊
 矢もたてもたまらず速いに来たと言い 章久
 一の矢を態と外した下心 恭太
 光陰の矢が檜山へまっしぐら シメ子
 とときめきは吹矢も飛んでくる近所 三重子
 帰らない矢は一度は放ちたい 信治
 捨てたところか通う落ちこぼれ 滋雀
 言いたい事が煮詰まってくる落し蓋 勝美
 落第をしたのが出世がしらとや 久子
 落してからポケットの底を縫う 喜風
 落武者の津々浦々にあるドラマ 智子
 怪談より怖い話があるニュース 憲太郎
 栄転の話はきえる遠花火 浩一郎
 幸になれる話に金がある

話かて生きてる少うしずつかわる 凡九郎
 ああ結婚夢を見るのが花だらう 秋子

川柳高知 川竹 松風報

リモコンを妻に握られ遊べない 一 郎
 農薬の汚染気になる自由米 憲一
 訃報聞く他人ごとでない歳になる 竹萌
 外聞は気にはしてない二度の職 一 求
 見物の気分も混じる火事見舞 節子
 時々妻が見せませす変化球 春童
 船乗りの妻が祈ると風が止む 和 広
 星一つ流れて故郷の母を恋い 菊 功
 町内のボスは隣のオバタリアン 千恵子
 口笛を吹いて青春譜を思い 佳 風
 人らしく生きて出世とすれ違う 朱 坊
 年金の無聊悪友見逃さず 松 風
 喪が明けて化粧が少し濃ゆくなり

尼崎尾浜川柳会 春城武庫坊報

ときめきも遠去かつて秋の風 歌 子
 とときめきが怒りに変わる待合所 敏 之
 とときめきの手紙仰山書きつぷす 弘 治
 とときめきに酔った男の丸い鼻 十四郎
 後ろから飛んで来る矢に音がない 夢之助
 音のある玩具に幼児両手出し 向 西
 不調和な音で都会の朝が明け 今日も又和音が生きるマイホーム 澄 子
 台所の妻の音から今朝も明け 石 舟
 ドラの音に再びあの日甦り 昌 子
 優勝旗火花の音で先ず迎え 美代子
 車椅子おして見に行く事故現場 保 蔵

手洗いに四季の花挿し満ち足りる すみ
 ネクタイを外し本気で飲むつもり 紫香
 先輩と永久の別れに句報入れ 六 お
 つぎつぎに風林火山に亡ぶ城 美智子
 亡ぶ日の我が人生に悔いはなし 義 嗣
 糞掘に亡びた跡をあばかれる 定 人
 下町に温いなさけは亡びずに 武庫坊

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

一番の苦手が隣の席に来る 天 樹
 かくれみの酒が苦手と言うておく 正 一
 哲学は苦手 煙草の輪が増える 定 人
 計算は苦手の妻が貯めている 歌 子
 だんまりを決めて苦手な女といる 退 児
 夢にまで苦手美人が現われる 伊三郎
 高齢化男に残る狭い椅子 伊三郎
 家族みな散ってローンが残る家 伊三郎
 残り火を燃やし蜜が吐息する 伊三郎
 補聴器の中に残っている悔辱 伊三郎
 千灯供養の温い残りのおごり 伊三郎
 よく似てる従兄弟同士の勘違い 伊三郎
 勘違いいそれから酒を注ぎに来す 伊三郎
 勘違いい辞表まで書く羽目になり 伊三郎
 勘違いいではすませぬ薬瓶 伊三郎
 勘違いいあの娘の来ない珈琲館 伊三郎
 勘違いいさせる封書の女文字 伊三郎
 八月の風はいたすら過ぎないか 伊三郎
 カメラぶれ防ぐ支えとなつた杖 伊三郎
 朝顔の種をたのまれエフ付ける 伊三郎
 年金に合わせて暮らす秋の空 伊三郎

ほおずきを鳴らして姉をなつかしむ
テレビ漫画つづきたのしむ孫娘
亡母が残した紫蘭がいつそ小さくなる
年 代

翠 洋 会 中西兼治郎報

へその緒のまま子を捨てる母がいる
亡母思う四季それぞれの花に寄せ
逢うたびにその人柄にひかれ行く
赤提灯ゆみという名の母の味
かあちゃんも昔マドンナだったんだ
おふくろの味に似て来た女房よ
母の留守おやつ置場の走り書き
甘えてる無知な私が恥ずかしい
石切さんの石に病の数がある
母ひとり盥回しに慣れて来る
南無阿弥陀ありアメンもあり我が母校
ポケットの石は捨てるよ男なら
どの母もアニメに似てる幼稚園
川の字が崩れてパパははみ出され
ジグソーパズル母はひとりて組立てる
極楽に行けば逢いたい人がいる
逢えるかなあえないだろか黄泉の国
縄のれん繋遊してた人に逢い
又逢うと言って別れて二年半
母さんと同じ手付きで柿をむく
子沢山母に孝養しなかった
夢を見たそうで母から手紙来る
天の声地の声天安門の石

高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報

弾む日の化粧がとてもよく伸びる
美智子

覚悟したあの日を想う片乳房
嫁にやる決心をして二日酔い
覚悟した酒は一気にとのどをこす
風向きによっては辞表出す覚悟
終の部屋刀は既に研いである
胎動に女の覚悟つよくなる
その覚悟聞けば抱きしめなくなった
許されて母はやさしい顔になる
潮どきへ許す限りの譲歩する
許されて郷里の踊りの輪にまじる
許されてどの生物も生きている
ゴキブリの命を許す益三日
許さないと女はすぐに言いたがる
許すとは言わずに傘をさしかける
人ひとり許すことから軽くなる
ナツメロのように許してやろうかな
許されて低い敷居のある安堵
受話器置く 人を許したことにして
ゴシップへくし乱れた心電図
ゴシップに影武者欲しくなってきた
ゴシップはラストダンスが済んでから
足の爪薬に切らせた日 pensando
孟蘭盆会霊を迎えて蟬時雨
へそくりをしても刺激のない生活
胃を切ったあとと見せてる扇風機
諸行無常野仏の鼻が欠け
叱らめ行く日はニコニコしていよう
休み明けの木馬が眠りこけている
粗品進呈女は炎天歩きます
戦争展に遺書冷房がきつすぎる
風はたわむれ木々の緑を騒がせる

美智子 保蔵 年 代

美智子 保蔵 年 代

英子 京童 スミ子 元 紀 静 江 年 代 節 子 求 芽 武庫坊 凡九郎 花代子 白漢子 散 歩 みさお 礫 百合子 和 友 佐代子 花 村 春 風 紫 香 圭 坊 冬 葉 しげお 杜 水 眉 的 芳 子 栄 子 作 二 郎 鬼 遊

駒つなぎ川柳会 里 小路報
遠慮していると傍から窘が出る
先様を困らす遠慮はやめなはれ
土壇場で頼みの顔が雲隠れ
虎の子を頼りに二人粥する
髪の大さき痛いほど中曽根さん
良心の痛みを知らぬ空気銃
ふたりして貯めて未来図描いている
銀行の姿勢が変る貸金庫
出しきったウミ男の財布
隠しごと出来ぬ新しい貌をもつ
快便に今日一日の爽やかさ
鏡の裏に哀しいものが貯まりだす
遠慮するわけがだんだんわかりかけ
大仏つあん遠慮する手としない手と
頼られてる錯覚は美しい
頼り甲斐があると言われて裏切れぬ
思わぬ金が出て行く痛い愚痴
やんわりと真綿で攻めるから痛い
古い銭貯めて心を温めてる
雨後のたけのこ借金はすぐ貯まる
型通り遠慮してから弾み出す
遠慮せず飲みと課長に試される
もつ父は夕陽に頼り明日を待つ
幸運を心頼みにして落ち目
痛みは言わずに耐えている笑顔
古傷がまた痛みだす夏の雲
出る釘になって言いたくないしゃべり
捨てられた金庫の金はどうなんだ
無駄口がつい出て男軽くなる

恒 明 憲 太郎 柳 宏 子 勝 美 英 一 庸 佑 善 信 冬 葉 文 秋 笛 生 比 沙 胡 凡 子 度 白 兔 恭 太 美 幸 射 月 芳 浩 一 郎 頂 留 子 金 太 萬 的

出たがらぬ母は仏間の灯になじむ

岸和田川柳会

植山

武助報

柳伸

連絡線消えてロマンのない港

セリも見た観光客も来る港

不漁続く港に老いた母がいる

すり切れた男が充電する港

正月の漁港大漁の旗飾る

人情も恋も出てくる港町

うず潮太鼓港は今日も荒れもよう

泣きに来た港は深い霧の中

港の絵見入る初老の一人言

鈴のなる方へ信じてついて行く

眠れぬ夜一人土鈴を振って見る

有難い鈴は頭の上で鳴る

大好きな鈴一つだけでもっている

機嫌よく今日も風鈴よい音色

猫に鈴つけて恩義を押しつける

コッポリの鈴らしくなる京の夜

夫には大きな鈴をつけておこ

親に似た羅漢をさがす秋日和

南海川柳会

飯田

悦郎報

一瞬に楽しさ飛ばす旅の事故

楽しみの趣味の道にもある悩み

思いようで楽しい日々になりました

順風満帆鼻唄がとまらない

夢に見る楽しい事は忘れな

税務署が怖くて売れぬ一等地

定年に和んだ土地の赤とんぼ

ころがした土地と一緒にこけました

庸佑

真砂

凡子

度

東雲

柳伸

憲太郎

凡九郎

駅前土地持つてると口説かれる

意味なんかどうでも何んとなく生きる

この意味を少年の眼は妥協せず

片言の意味が通じる母と子で

童話から人生の意味感じる日

開運は波を飛ぶのかマーマイド

方法の方法笑顔絶やさない

六法を読んで抜け道許さる

どんな料理が出るか期待の披露宴

靴下に種類があつて無い左右

種類だけ他人に負けぬ疲れ

スーパ一の種類に妻の財布負け

星の種類を知ってロマンに遠くいる

川柳泉尾

吉川

寿美報

流れ藻よ昨日のことは振り向かぬ

夏色に染めて山が海が呼ぶ

木登りの楽しさ知らず塾通い

参道の石に預ける命杖

歯車の合わぬ意見もちこさ

ブライドを捨ててパート出る

人生を変えた小犬と屋根の下

見る夢は何時も大きなシャボン玉

寝てる目が目さますやん蟬時雨

大の字に寝て終戦の日の平和

電話機のそばにセキセイいるらしい

焼き鳥の匂いに負ける帰り道

籠を出たオームの主張的をつく

茜雲鳥が並んで溶けてゆく

人生の花道でらす灯がほしい

花たばを母のベッドに見る笑顔

甘平

正好

道祖神野花手向けである祈り

花盛り女系家族の盆帰り

あさき夢れんげ蟲で蝶になる

初任給で花博の券くれた娘よ

消去法雑魚は次々使い捨て

魚釣りが出来る左遷のままでいい

お魚に生まれていたらいわしかな

りーダーに肩書はない回遊魚

八月は峠三吉の詩生さる

意気込んで平目のつくりアラとなり

核家族お盆の匂い薄くなり

昇ぶりをおさえて女が抱く火花

仲間割れさせない仏様が居る

呆けを病む暇でもない趣味仲間

鬼の一匹ぐらい仲間に入れておく

振りむくと仲間がうしろささえてる

会えばすぐ意見の揃ういい仲間

輪の中をみんな仲間と見た油断

ほんとうの仲間に国境などはない

やれ月見萩が咲いたと飲み仲間

五本指仲間の欠けた旅淋し

仲間までコピー人間にはさせぬ

すがすがし仲間同士の愛芽はえ

いい仲間兎も亀もいてくれる

持続する友情仲間信じたい

朗かな遊び仲間として楽し

仲間打ち感情線はれ上る

どんぐりの仲間が繋ぐ手が温い

仲間から明日も生きる知恵を借り

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

三千代

きよ子

トミ子

功子

はつ子

昭子

美津子

弘子

敏

マリ子

洋子

寿美

柳風

早苗

猿杏

小鹿

温子

白峰

静歩

典草

野々

孝恵

とみお

日出子

佳女

仙岳

みほ

螢

大切にしたい仲間のと絆
玉砕を誓った仲間の手が温い

川柳たけはら

森井 善居報

パチパチとせんこ花火はかわいいね
宿題がたまり続ける夏休み
青春のしるしでつかい桶を抱く
銘水百選みんなおなじ味がする
何時寝たか起きたかお膳に妻のメモ
新品の寝巻はたまの娘に着せる
小一日焼けよ少したくましく
やじろべえ明日の風向き思案する
ふるさとの空気がうまい盆踊り
ひめゆりの鳴咽がもれる風化石
五寸釘打たれたような日を重ね
きまじめが取柄でついで来た私
老体も一汗かいてハイキング
地蔵さま優しい顔で見てください
思うまい有っても無くても思うまい
ペンペン草が昔のロマン秘めて咲き
ババタリアンまだまだロマン追っている
ひまわりの一途さを妬く夏のバラ
一言も喋らず朝のドラマ見る
鶏犬猫私を主人と知っている
警沢は窓いっぱい風の吹き
古時計鳴って心が安らぎぬ
大切な方へ便箋選っている
郵便が来ない日曜日ながい
はかなさを知りつつ夏のバラは咲き
丸木橋の下にいっぱいある童話
住みついて筑後の夏も蟬時雨

ひさ子 弘朗 小六晶 美 小六晴 美 菁居 蘭幸 静水 千年枝 比呂子 房子 節夫 喜美子 浪子 喜久恵 ヤスエ 麻代 俊夫 愛子 魚子 栄恵 清木 清水 一木 一路 博子 康子 淑子 笑子 伸子

線香花火のさきに幼い恋がある
やすらぎは隣の町に子らが住む
青虫もおいしいキャベツ食べてはり

川柳堺

河内 月子報

酔い醒ますロビーでドラマ期待する
病院の廊下でひよいと見た縮図
病院の廊下でほろい話きく
パーゲンで得したように買いあさり
部屋の隅で私を唾う健康器
凄いと相談してるイヤリング
年金をいただき浪費ぐせがつき
ろくでなし親の命日には戻り
祈り届いて闇の廊下に灯がともる
凄いやまのわりに各論なまぬるい
あんな時顔色一つ変えてない
愛ばかり見つめて酒におぼれてる
ろくでなしやっぱ甘い話待つ
浪費するくせに一円でも値切り
ロビーには華がいっぱい咲いている
浪費ぐせ疑いもなく親ゆすり
軍事費を浪費と思つハトの群
親戚の話題にきわすろくでなし
僕よりも男前やがるくでなし
凄い目で僕を睨んだ冷凍魚
呼び出して廊下で叱るよい教師
シンナーの怖さ知らないろくでなし

川柳大阪

中原比呂志報

安心は昨日と変らないリズム
土壇場へ処する男の顔になる

静風 新造 千代美 千万子 月子 半錢 紀美女 かりん 小雪 文 凡子 寿恵子 森子 凡九郎 小鹿 与呂志 一二三 金太 楓 春香 天笑 素灯 信博 重人 雅巢

結び目をほどけば逆境の頃う
少しずつ夫婦で埋める白い地図
横顔でばかりもの言う雀たち
興のないもの一つに昼の月
骨埋める土地でゆっくり生きている
埋められて掘り返されて古墳です
幸せな日々日記は閉じたまま
一獲千金夢見た穴は埋まらない
核のゴミ夢見て未来にうまれる
親方は一言褒めて走らせる
夏瘦せを知らず神経疑われ
番付表郷土力士は虫めがね
新築の生涯ローンに骨埋める
医者通い薄化粧する回復期
親方もそっぽを向いた民営化
年齢が自慢話をほめて聴き
職場にて精を出すのが自慢です
府営出てローンで買った家自慢
黒い幕あろろがひばりの歌は澄み

富柳会 池 森子報

お百度を踏んで明日を信じよつ
しの笛がほくを誘った秋の夜
夫婦ならバスであれほど喋らない
口笛に応えるように窓があき
ふもとから分教場まで遠い道
ふもとへと風が運んだ秋の彩
お隣の夫婦のことで内がもめ
少年にかえる口笛すきとおる
窓きわで小さく吹く父の笛
仲のよい夫婦と言われ病んでいる
洛 金太 希久志 本蔭棒 笑風 凡九郎 与呂志 鉄心 柳弘 幸一 亮太 正之 柳弘 一歩 しげお 幸一 純泉 遊心 比呂志 花子 昭水 (伊)勇 (田)勇 智久 莊次 文次 花次 柳太 岳人

純行の男が停まるふもと駅

川柳はびきの

塩満

敏報

森子

ノックせず寝所へ忍ぶ夏の風邪

繁栄のツケ突きつける戯性雨

ゴキブリを退治て父権取り戻し

ネクタイを締めて顔まで引きしまり

砂文字を波で占う夏の恋

自分史の此処は輝く聚眼

監督の笑みがたまには見たいトラ

五時からの話にうまく乗せられる

耳鳴りがことさら強い蟬しぐれ

民主主義椅子も短くまわり持ち

トラ二人ならばあべのと練り歩き

晩酌は今日も無事でうまい酒

八月の風には重い詩がある

筆癖が元氣とわかるいい便り

建て直す隣の財布斜に見る

また一人友を見送る大文字

水中花溺れて見事変身を

ハネムーン派手に送っている車窓

夏よさらば大粒の雨窓を打つ

燃えつきて涙で終わる青春譜

ぎりぎりになっても鏡にらんでる

友みんな偉く思える熱帯夜

夏祭り父に甘える肩ぐるま

歯車のきしみ聞える古稀の坂

ご婦人は二人寄つたら会議する

時計の針みんな合ってる物足らぬ

法外なチップに潜む下心

世界中窓から日本のぞかれる

たけし

かつみ

繁男

志洋

絢子

寿美

蛙声

トミ子

敦子

みつこ

忠宏

義一

美代子

与呂志

吐来

ケイ子

伴子

文子

美津子

悦子

ゲン吉

隆

末一

昇

健三

比沙胡

希代司

胡村

ぎりぎりの癖直らない朝寝
じやじや馬も貴男の色に染まります

いずも川柳会

吉岡きみえ報

白水

敏

素通りの気ますき友に詫びをいれ

兄嫁がいるから実家素通りし

灯の家を素通りします共稼ぎ

灯を消して十五夜の月一人占め

北の海イカ釣り舟の灯が揺れる

心の灯大きく燃やす子の進路

目ざましい前進支店またひとつ

前進の音頭が三三七調子

廿一世紀へ向いて少年靴を履く

感激を新たに釘をかけたおす

汗だけが感激の味知っている

大盃の感激涙と共にはず

感激の醒めないうちに寄付がくる

友情の見舞類火ににぎりめし

ワイシャツのボタン外しているゆとり

ゆとりもつ平和カンパのにぎりめし

ゆとりある棟梁静かに墨を打つ

ゆとりある生活で猫も鯛の骨

乗り越えたゆとりで回る夫婦独楽

ゆとり無く働き蜂の父の背よ

ゆとり持つ人は花との対話持つ

追い風のゆとりを見せて回る独楽

傷心の痛みを分ちあう家族

老妻が忙しくなる夏家族

長風呂を気遣う家族いてくれる

変り種家族の中に一人居る

あつたかい家族で毬が良く弾む

リチエ

フミ子

一葉

篤子

正朗

芳子

清子

圭詩朗

久栄

佐吉

芳郎

房子

章峰

寿美

町紅

きみえ

巡歩

きよし

桂子

秀子

文子

芙佐子

まこと

青湖

多賀子

水煙

満江

結局はたった二人になる家族
独房の外は自由な虫の声

子に自由与えて母は一人住み

目こぼしの自由の中で妻遊ぶ

裏町が好きで気ままに生きてる

風船の身の程知つて自由

冤罪が晴れて幾とせぶりの娑婆

幸一

良子

ちかし

草丘

昭二

和子

代仕男

西宮市民文化祭協賛

西宮市民川柳大会

とき 11月5日(日) 正午開場

ところ 西宮市立勤労会館3階会議室
(阪神電鉄「西宮東口」駅下車、山側すぐ)

兼題 連想句(福島郁三氏三回忌追悼)
「文楽のキッス カチリと音がして」

から選択
「光る」 中村東角謝選
「丸い」 奥田みつ子選
「帆」 松本 一郎選
「倉」 佐野美知子選
「和紙」 水垣美代子選
「拾」 石井 冬魚選
「土」 黒川 紫香選

締切 午後1時 会費 600円
・各題2句(3才に呈賞)

弓削吟行の旅

児玉歌子

「遠いところ、よう来んさった」。十月三日、バスで弓削を訪れた紫香先生、夢之助会長、いわおさんはじめ私たち尾浜川柳会の一行を迎えてくださったのは、弓削川柳社会長の奇童さん、百合子さん、寿美江さん。公民館で一休みさせていただいた折り、配られた銘菓川柳饅頭に川柳人の心意気を見た思いがします。

似たものの夫婦で歩幅までそろい、良一、私が届いた饅頭に焼かれていた句ですが、両隣にはそれぞれ違った川柳が刻まれています。早速、お土産を注文して待望の「川柳の小径」へと向かいました。街を歩くと、川柳と河童の像が私たちに迫ってきます。ゆつくりと一句一句を味わいながら足を運びましたが、川柳を楽しむ者には絶好の散歩、田んぼの案山子も蕎麦の花も、句碑の傍に転がる栗もみんな川柳になります。

久しぶりの山歩きで少々、バテ気味でした

が、旭川辺八幡温泉郷のサンタケベで夕六時から句会が開かれました。湯上りの宿浴衣で集まった皆さんが、まだお酒の入っていない真面目な顔で作句、やがて十四郎選の「当日雑感」から披露が始まり、正坊選「歴史」で数々の歴史、人生経験が光り、奇童選「秋」では秋の黄昏から実りの秋などが奏でられました。そして懇親会に移り、宿ご自慢のアルゼンチン産ペレレイの刺身を賞味しながら川柳談義に花が咲き、カラオケで夜が更けていきました。

二日目は、法然上人ゆかりの誕生寺に参詣した後、後醍醐天皇流島の時、児島高德が桜の幹を削って「天莫空勾踐 時非無范蠡」と書いてお慰めしたという史跡が残る作樂神社に参り、衆楽園をゆっくり見学して津山で鍋焼きうどんの昼食を食べ、一路、帰途につきました。

奇童さん、止水さん、お忙しい中をお世話になりました。そして、とても楽しい旅を計画してくださいました尾浜川柳会の方たち、どうもありがとうございました。

なお、当日の各題秀句は次のとおりです。

句碑からの声なき声に胸を打つ 夢之助
歴史にはのらぬ夫婦の五十年 昌子
そして秋影も思いが深くなる 美智子

「川柳塔」建立募金

ありがとうございました

西尾菜・天正千梢・宮口笛生・榎本吐来・玉置重人・塩満敏・西田柳宏子・橋高薫風・小出智子・田中正坊・高杉鬼遊・新家完司・渥美弧秀・児島与呂志・野田素身郎・小林トメ子・榎谷寿馬・松村迷観子・石垣花子・八木千代・林荒介・林瑞枝・澤田千春・田中亜弥・政岡日枝子・片上英一・まいにち川柳友の会・松川杜的・神夏磯典子・田中透太・稲葉星斗・飯田悦郎・福本英子・内芝登志代・堀端三男・羽原静歩・津守柳伸・桜井千秀・柴田英王子・松原寿子・佐藤藤子・稲葉冬葉・寺井東雲・西出楓楽・春城武庫坊・春城年代・竹原川柳会・山内静水・谷信夫・久米奈良子・横田英詩子・大矢十郎・横山一声・本間満津子・町田達子・河井庸佑・江口度・弘津柳慶・林花仔・植村客遊子・松本ただし・吉原紅月・保西岳詩・阿萬萬の・小池しげお・茂見よ志子・川島諷云兒・中島正博・片上明水・松川芳子・小林英子・工藤甲吉・渡辺独歩・安平次弘道・吉川寿美・城北川柳会・吐田公一・平松かすみ・近藤一途・里小路・木本朱夏・若宮武雄・玉井豊太・宮西弥生・内海幸生・高須賀金太・片岡智恵子・山根いつを・本田恵二郎・河合茂雄・板東倫子・松永すすむ・中西兼治郎・米田恭昌・北田一笑・堀江光子・横山為子・安藤寿美子・椎江清芳

城北川柳会吟行

神夏磯典子

今年四月頃から誰言うともなく、一泊吟行をしてはとの声が出て、今から六年前の五十八年十月、生前の川口弘生先生が企画され、近江八幡の長命寺や近江水郷めぐりを楽しんだ日を思い出しました。あのような思い出深い吟行ができたらと、候補地を皆さんと考え、城北川柳会へ常時投句して下さってる兵庫県朝来郡生野町の伊澤午郎さんから、以前に「生野町には銀山跡や風光明媚な場所がたくさんあるので、一度遊びに来られたら」とのお誘いを受けていたこともあって、ここを吟行の場所に決めました。

九月二十三日・二十四日の連休を利用する

ことにしたのですが、出発の日が待ち遠しい思いました。当日はお天気にも恵まれ、銀山跡や道中にある銀採掘の手掘りの跡など、タクシー運転手さんのガイドを聞きながら楽しいひとときを過ごしました。

三時頃に宿の魚ヶ滝荘に着くと、早速、会場作りをして句会を開催、課題は生野町に因んで「生きる」「高原」「銀」「滝」「湖」の五題でした。みんなで投票の結果、吟行最優秀句は右近さんの「明日あると命信じて今日生きる」に決まり、楯賞が贈られました。

このあと宴会に移り、酔いのまわるにつれて、午郎さんの唄を皮切りに満津子さんの民謡など、全員がそれぞれの持ち味を生かした個性的な歌や浪花節を披露し、夜の更けるのも忘れたひとときでした。きつとさきの近江の吟行に勝るとも劣らぬいい思い出になったことと思います。

生野町の魚ヶ滝付近はキャンプの名所で、この日も何十というテントが張られ、若い家族連れがキャンプを楽しんでおられ、平和という「時々」をつくづくと感じた次第です。

西日本文字放送作品募集

題「祈り」 橋高薫風選

3句 締切 11月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

・福元稔・上田登志実・辻川慶子・古川美津枝・田中笑風・人見翠記・浅野房子・岸野あゆめ・坪田紅葉・宮崎シマ子・久家代仕男・松本文子・池田半仙・月原宵明・友廣千恵子・渡辺晋吾・中川滋雀・富上光代・長谷川春蘭・北野久子・鈴木節子・奥田みつ子・二宗吟平・川柳塔久世川柳クラブ・林野魁光・高橋千万里・河内天笑・河内月子・神谷凡九郎・黒川紫香・西山幸・宮園射月芳・川柳塔わかやま・野村太茂津・河瀬芳子・芦白漢子・竹内花代子・藤村ゞ女・大坂形水・大福留吉・松下たつみ・矢内寿恵子・山本玉恵・岩本雀踊子・北勝美・金井文秋・笠原吸江・野呂右近・井上白峰・藤井一三・福浦勝晴・林はつ絵・菊地トミエ・吉田笑女・秋元てる・山崎君子・西口いわゑ・奥山美智子・稲本凡子・神原文・矢倉五月・金田南天・桜沢あかり・猪子れい・中川楓・中井慧梢・綿野春香・山本半銭・小西小雪・宮本かりん・後藤正子・松井かなめ・桑原喜風・今西静子・井上森生・森下愛論・岡田ふみ・行天千代・小林由多香・垂井千寿子・門谷たず子・菅井とも子・相馬一花・園山多賀子・矢野佳雲・丁坪サワ子・丸山よし津・谷垣史好・田中紀美代山本規不風・水粉千翁・青戸田鶴・越村枯槽・芳地狸村・波多野五楽庵・都倉求芽・佐野卜占・清水利武・木原絹・清水絹子・山本希久子・内田結実・小白金房子・上杉信秋・田中輝子

(十月十五日現在・二〇五件)

柳界展望

集録一敏・武庫坊

★ふれあいの祭典ひょうご
89「川柳祭」で本社同人の
次の両氏が受賞した。

▽文部大臣奨励賞
折々の酒にわたしの灯を
点す 林 荒介

▽西宮市長賞

電話でも済む事だけど母
と会う 北山 越山

★奈良市が自然景観と古社
寺・文化財をPRするため
市内各所に「歌のポスト」
を設けて短歌・俳句・川柳
を募集しているが、その第
22回入選発表で次の句が優

秀句に選ばれた。奈良へ行
かれた場合はぜひ投句を。
君は来ないかシルクロー
ドへつづく道

し給え 和田 光代
公園に宇野重吉がいまも
いる 山本 磔

高杉 鬼遊

★はびきの市民川柳会は9
月15日から17日まで同市立

★西宮北口川柳会創立15周
年記念川柳大会が9月11日
西宮市中央公民館で開かれ
参加者百余名の盛会であつ
た。当日の各題秀句次のと
おり。

月15日から17日まで同市立
陵南の森公民館で開かれた
第6回市民まつりに参加、
ロビーで川柳展を行い、川
柳講座、募集吟「選挙」の
入選句を発表した。

▼出版▲

★尾藤三柳著「実作のため
の川柳小百科」(雄山閣刊・
価1800円)

★「川柳ひろしま」(広島川
柳会)は9月号を第40回広
島平和祈念川柳大会の特集
号として刊行、「柳都」(柳
都川柳社)は9月号に第40
回柳都川柳大会を特集、ま
た「川柳宮城野」9月号は
500号記念全国詩上川柳
大会特集号として刊行。

新同人紹介

岩

佐 ダン吉
武助・敏・吐来推薦

▼同人消息▲

■浜野奇童氏(本社参事・
弓削川柳社会長)は「川柳
紋土」9月号巻頭言に「路
郎句碑」と題して執筆。
■小林由多香氏(鳥取市・

故金泉萬楽氏句碑 建立募金のお願ひ

建立場所

大阪市阿倍野区北畠

阿部野神社境内

募金目標

一〇〇万円

1口2000円(何口でも可)

★払込先

郵便振替口座 大阪8-22906

米沢 俊夫

現金小為替送り先

大阪市天王寺区真法院町2-16

木山雄幸 ☎(06)71-6663

主催 大阪川柳人クラブ
後援 番傘川柳本社 川柳瓦版の会
川柳塔社 川柳天守閣
川柳文学社

本社参事)は、「北条川柳」 会委員長、磯野氏は出版委
員長を兼ねる」とありまし
▼訂正△
たのは、「西尾氏は出版委
員長、磯野氏は大会委員長
を兼ねる」の誤りでしたの
で訂正します。

■10月号の水煙抄(49P)
下段の増田扶美さんの一句
「挽きたてのトマト」は
「挽きたての」の誤りです
たので訂正します。

■10月号の日川協に関する
記事(89P)中、「西尾氏は大

11月各地句会案内

	日/時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 不器用・戸惑う・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
堺川柳会	5日(日)正午集合吟行 ワイン・別れ・割る・脇役	大仙公園内日本庭園入口 阪和線百舌鳥西300m 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(金)午後6時から 長い・選ぶ・文学・誘う	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 適当・出る・点	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
川柳塔 まつえ	12日(日)午後1時半から 木守柿・輪・障子	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 自信・弁解・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木)午後1時から 溜飲・怠る・メニュー・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1-7-7-905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 各題2句
南海 川柳会	17日(金)午後6時から 参加・反対・企業・省略	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(日)午後6時から 薄い・苦・巢・釣る	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時から 文・ガラス・すくすく・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
川柳 東大阪	25日(土)午後6時から 落ちる・サイン・切符・城	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	27日(月)午後6時から ゴール・期待・笑顔・命中	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
<p>※川柳ねやがわは3日(金・祝)寝屋川市民川柳大会(71頁参照) ※富柳会は19日(日)富田林市民川柳大会(71頁参照)のため、11月例会は休みます。</p>		

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内
 原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
 〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社11月句会

日時 11月7日(火) 午後6時

会場 メンズファッションセンター13階

中央区内本町1-1-1 電06-941-1918
地下鉄香町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題 「表面」

「引く」

「秘密」

「塔」

野村太茂 津

河瀬芳子 選

玉置重人 選

高杉鬼遊 選

西尾栗選

席題 2題 当日発表

各題3句以内厳守

★投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。
各葉ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句料310円(62円切手5枚)同封のこと。

本社12月句会 7日(木)

兼題 「映画」 「明るい」
「ケーキ」 「納める」

川 柳 塔 社

『夜市川柳』募集(3句)

第6回 「首」 山本 磯 11月末

第7回 「打つ」 小出 智子 12月末

第8回 「職」 高杉 鬼遊 1月末

第9回 「洗う」 森中恵美子 2月末

第10回 「影」 中尾 漢介 3月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2

河内天笑方
堺川柳会

● 募 集 ●

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗 選

水煙抄(10句)黒川 紫香 選

愛染帖(3句)河内 天笑 選

茴香の花(3句・女性)八木千代選

吟 「玉」 青枝鉄治選

課題 「逢う」 宮崎シマ子選

「始まる」 藤井一二三選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗 選

水煙抄(10句)黒川 紫香 選

愛染帖(3句)河内 天笑 選

茴香の花(3句・女性)八木千代選

吟 「針」 佐藤藤子選

課題 「割る」 里小路選

「敬語」 奥谷弘朗選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

定価 六百元(送料51円)

半年分三千八百円(送料共)

一年分七千五百円(送料共)

平成元年十一月二十五日印刷

平成元年十一月一日発行

編集兼 西尾 巖

印刷所 藤原童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1914番
振替口座大阪8133368番

編集後記

☆高野山の霊地に川柳塔同人の供養塔が建つことになった。私たちにとって本当に喜ばしいことである。常々、川柳塔は家族的であると言

われてきたが、死して尚川柳家族として語り合えることができたことは、なんと楽しいことであろう。こんな快挙は、川柳他社は勿論のこと、他の短詩文芸においてもかつてなかったことなので、皆様もござってご参加いただきたい。

☆秋になると奈良をこよなく愛した秋神道人会津八一のことが思い出される。彼を評して初めのうちは短歌にしても書いでも、平凡な言葉で言えば、世に迎えられない時代であるが、彼はそれです満足していたのである。そして好きな歌を好きなように詠みつけていた。世間の評判などいっさい関心を持たなかつ

た。しかし珠玉はいつまでも土の中にその姿を隠しておくことはできないと評している。平凡な言葉で好きな句を好きなように作ることは、私たち川柳人にとっても大切なことではなからうかと思つた。

☆故金泉萬葉さんの句碑が阿部野神社の境内に建つたことになった。ここには先に私たちの先輩である清水白柳さんの句碑もあることでご両人とも古いおつきあいがあるのだから、さぞかし話題にはこと欠かず、話はずきないことと思う。よろしく私たち後輩を見守っていただきたい。

☆TBSラジオのこども相談室にこんな質問が増えたと言っているのである。「どうしたら喧嘩の仲直りができますか」と。私たちの川柳界も、お互いに仲好くしなくちゃね。

(萬)
▼帝国ホテルの客も豚も同じ料理を食べている。と言つても白いテーブルクロスを

境に向き合つて食事をしているのでない。残飯量が六〇パーセントになったというところで、それが養豚業者へ回ることなのである。これは豊かさの証しでも何でもない。贅沢な所業に外ならない。

▼親戚に農家があり、その人の話では、市場へ出す野菜と自分の家で食べる分とは、作り方が違つた米や野菜は思つただけでも恐ろしい。と言つて芋や野菜を頂くことがあるが、時々まなので、その他はスーパ一等の農薬いっばいの害菜を食べていることになる。

食後一時間ほどで腹痛になつたり気が狂つたりすれば二度と口にすることはないが、永い期間の蓄積の結果であれば、時々思い出す程度で大方は忘れていく。

▼「食べ物捨てないで」と新聞の投書欄に、ボランテニアクラブに入っている中三の文章が載つていた。

宿泊研修者の食後の片付けで、残飯の多いのに怒りを覚え、海の向うの餓死に想いを馳せていた。同じ人間でありながら、この違いをどう説明したらよいものだろうか。自分だけよければよい時代が、今の豊かさに関わっているように思えてならない。物質的なものより精神的な豊かさの価値をより高く評価したいものである。

(き)
★三月号のこの欄で、現代の「文具四宝」に関連してワープロのことについてふれたが、私の知っている範囲でも、これをつかつて文書や句報をつくっている人が少なくない。ところが、ワープロで打った投句にはほとんどお目にかかたことがない。川柳は、機械になじまないでも考えられているのだろうか。

★私は、原則として投句はワープロで打つこととしていいる。かなりクセのある文字なので、選者や印刷所に

ご迷惑をおかけしないといふささやかな配慮もあるが、私の句が「活字」になる前から活字で表現できるのだから、私自身の満足感も大きい。ワープロをお持ちの方は、何をおいてもまず、川柳に活用いただきたい。

★ワープロは機種によつて個性がある。それも機能面だけでなく、漢字転換の際には、はつきり出てくる。たとえば、「せんりゅう」と打つて「川柳」と出ない機種もある。私の愛機はあまり上等ではなく、ずいぶんとデータラメな漢字を出すのが、「川柳」だけはパッチリ打つてくるのでかわい。

★一つの句は多くの場合、いくつもの単語または文節に分けて打つが、ときには十七音字をひらがなで打ち一発で漢字まじりの句に転換できることがあり、私はこれを素直な句と名づけていいる。例はいくつもあげられるが、私の句「朝顔の花が小さくなって秋」(正)

川柳界初の「カレンダー」刊行

〔題字〕

坂本 一胡 (国語審議会会長・元NHK会長)

〔カレンダー色紙〕

佐藤 正敏 (川柳研究社顧問)

〔毫〕 渡邊 蓮夫 (毎日新聞川柳全国版選者)

野村 圭佑 (川柳きやり吟社主幹)

尾藤 三柳 (読売新聞時事川柳選者)

〔紙〕 磯野いさむ (番傘川柳本社主幹)

〔色〕 西尾 栞 (川柳塔社主幹)

去来川巨城 (ふあうすと川柳社主幹)

*右各先生の「色紙」別刷り・はり込み式。

〔入選作掲載〕 *全国川柳(誌上)大会の入選作

と作家氏名一、五〇〇句掲載。

*二七〇mm×五八〇mm・タテ長、和室向き。

〔第二回大会予告〕 *「川柳カレンダー」第二回全国

川柳大会投句用紙同封。

〔価格〕 *実費一部、九五〇円 (送料は使用郵便切手

分を「カレンダー」到着後に送金していただきます)

〔申し込み方法〕 *ハガキでお早めにお願ひします。

限定部数です。品切れの場合は、お許しください。

〔申込先〕 〒一九四〇一 東京都町田市金井町四二四

日本伝統美保存会文化部

「川柳カレンダー」係

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551